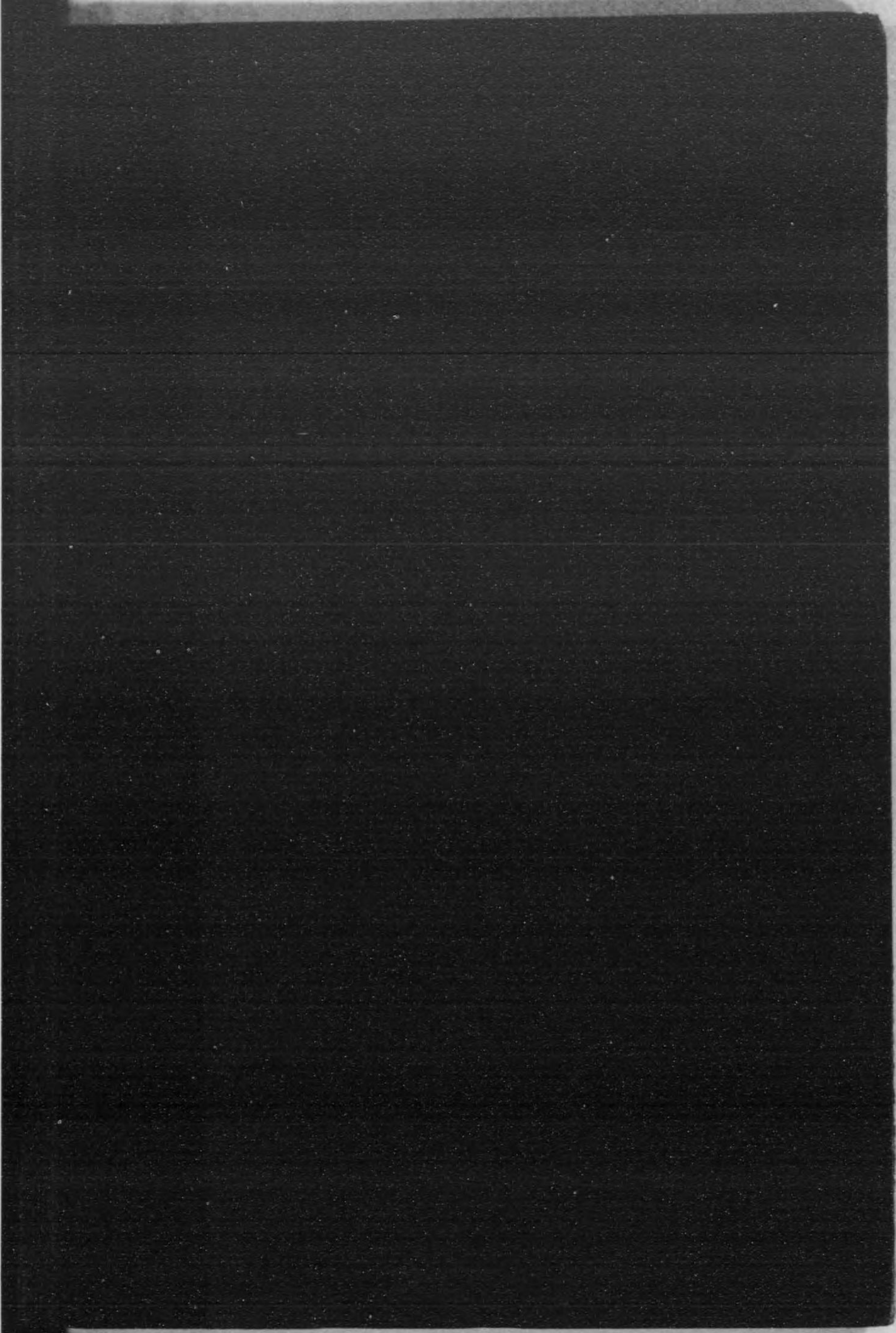


始





HOW
TO
TRANSLATE
JAPANESE INTO ENGLISH

和文英譯の研究

By Y. SATO



MEGURO

TOKYO
1926

緒 言

或る時横濱の町通りで異人さんの子供達が何やら盛んに云ひ争つて居るのを見た通りがりのそいつが「何だ生意氣に英語で喧嘩して居やがる」と云つた、と云ふ一語がある。が此れには慥かに一點の眞味がある。吾々が英米の子供等の片言を聞いても其の口調の自然さには一種の羨しさを感じずには居られぬ、なる程語學に達するの道は子供が母國語を習ひ覺えるが如くに自然に慣れ親しむにあると感ずる、が併し唯それを感じてしまつただけでは困る、問題は子供が生れて母國語に達成する幾十年の道程を如何にして吾々外國人が數年の短時日を以て通達しやうかにある、且つその子供にしてももし教育が不充分で野育ちにして置いたならば彼が英人なり米人なりとしての英語は誠に劣等なものであつてそれを筆にして書き寫したならば殆んど讀むに堪へぬ様な英文であらう。もし日本人が洋行して彼の國に居住し誰れ彼れの別無く接するがまゝの英人や米人の口眞似してその人々になりすました氣で英語を覚え込んだならば、彼の英語はなる程 natural ではあらうけれども語學上より見て甚しく不具な英語を覺ゆる事となるであらう、事實は簡單である、こゝに彼我を轉倒した場合を考へて見られよ、或る外國の人が日本に滞在して日本語を自然に習ひ覺えたとする、長い間の natural method に依つて日本人の口

調にも習熟し一人前の日本語通となつたつもりで吾々に向つていと眞面目に「こんちやー、御寒うげす」と云つて空嘯いて居たとする。どんな effect がそこに表はれるであらうか。此れは皆誤つた解釋のもとに従はれた natural method の結果である。語學の習得はどうしても自覺的であらねばならぬ。自然に覺えると云ふ事は決して時と場合、われとひととを無差別に無茶苦茶に自己が接する英語に同化すると云ふ事では無い。己れに確たる判別の見識があつて言葉と心持との相對關係を自覺しつゝ取り入れて行つたもので無ければ一種の鵠的語學に終るのである。要するに吾々は外國人になる必要は無いし、又、其れには自國語を忘れてしまふ位な犠牲を拂はねば出来ぬ事である。吾等の目的は必要に應じて外國語を理解し自己の意志をそれで發表し得ればよい、それが爲めには一方外國語に親しむと同時に研究的態度を以て其れを學ばねばならぬ。研究的態度とは即彼我兩國語の異同、言葉の使ひざま、口調の差別等を自覺的に調べて行くと云ふ事である。我々が外國語を學び覺えるには同時に吾々の母國語を一層注意して考へると云ふ事を必要條件とする。教科書でも、新聞でも、小説でも何んでも讀む時に「はい、あ吾々がこう云ふ所を英語ではこう云ふのだな。此れは面白い expression である。此れは同じ心を正に彼我反對に云ひ表はすのだな。又此の云ひ方は丁度吾々がこう云ふ所に相當するな」。など感心したり、驚いた

り、しかめ面したり、しながらやつて行かねばならぬ、それでこそ腦裡にうつる印象も深くなるし、必要に應じてそれ等の expression を吾がものとして reproduce する事も出来るのである。さは無くしてサラサラと讀み飛ばして行つた丈けでは「讀む」目的には結構な事であらうが「語學」の目的には適はぬのである。つくづく考へて見ると表はさむとする同じ心も言葉の違ひでよくも反對になるものだと思ふ事がある。一二例を擧げてみると

With some exceptions, the more briefly a thought is expressed the more clearly is it conveyed.

てふ一文を讀んでその文意が

二三の例外はあるが、思想が簡潔に云ひ表はさるればそれだけ明確に傳へらるゝものだ、

と解せられる、併し語學の勉強としては只それだけで満足したては不足である。“With some exception” (二三の例外をもつて) に相當する吾等の expression は何であるかを考へて見ると、それは「二三の例外を除きて」である事に思ひ當るであらう。吾々は「除きて」と云ふ向ふでは「をもつて」とする、正に云ひ方が逆である。と此處まで考へて來なければ今度は吾等の意志を英語で發表する場合、或は和文英譯の場合に“Without some exception” と云はぬとは限るまい。英文を讀んで行く際に此の邊の考慮を費す事が語學生のたしなみと申すものである。又茲にこう云ふ和文が

ある。

余は他の日本人の如く、紹介状を持つて世話になりに行く宛もなく、又在留の舊知とは無論無い身の上であるから、恐々ながら一枚の地圖を案内として毎日見物のため若くは用達のため出あるかねばならなかつた。

假りに此の文を英譯するとした場合下の様に書いたとしたらどうか、

Like other Japanese, I was not provided with letters of introduction, nor had I any old acquaintance staying there to help me. Accordingly, I was obliged to go out timidly either for sight-seeing or on business every day with only a map as my guide.

此れはなる程原文の文句に忠實に譯してあるが併し原文の文意は全く覆されて、他の日本人も皆自分と同様に孤獨で便る知己とでない身であつた事になつてしまふ。即原文の「他の日本人の如く」は英文では unlike other Japanese (他の日本人とは異りて) とならねばならぬのである。

こう云つた例は隨處に見出される。そして此れ等の暗礁に乗り上げまいと欲するからには諄い様であるが彼我の言葉の使ひざまを常に觀察し比較研究せねばならぬのである。

ところが現今の英學生の發表方面の仕事としては和

文英譯がその重なものとされて居るのである、「英作文教科書」はその實「和文英譯教科書」である、従つて學生は English Composition といふものは與へられたる和文を英文に直す仕事だと考へて居る向きが多い。そこで前申した様な「考へずにたゞ譯す」と云ふ弊害が起つて來るのである。著者の考へる所では吾々はどうしてもまづ自己の思想を英語で發表する事の練習即眞の作文の稽古が必要である、英作文とは和文英譯を云ふのでは無い、自己の思想の直接發表である。和文英譯と稱するものでも其の實際の仕事は英作文であらねばならぬ、與へられたる和文の表はす所の眞意を自己が英語で發表するのでなければならぬ、此處が語學生の最も考慮すべき點である。「和文から英文へ」……其の中間に思想といふ中繼が無かつたならば全く似てもつかぬ結果になつてしまふのである。例ばこゝに owing to; on account of など云ふ句がある、此れは「……のために」と譯す、がそれは譯語である、ところが owing to~ は「……の御蔭で、……の所爲(セイ)で」といふ心、on account of~ は「……と云ふ勘定で、……の結果として」といふ心である、その眞意を無視してたゞ「owing to= ために」、と語と語とを結んだ丈けて置くと「病氣靜養のために云々」と云ふ和文を owing to the recrital of health と英譯してしまふ事になる、これでは「病氣恢復せる結果、それがために」の意であつて for the recrital of health (病

氣を癒さむため)とは大變な意味の差であつた。それは「……の目的で」の「ために」も「……の結果として」の「ために」も一所くたになつてしまつた結果である、言葉のこゝろを無視した咎である。自由意志の英語發表、即英作文が必要だと申すは即此れあるがためである。

さて翻つて吾々の國語を觀てみると實にそれは六ヶ敷い國語である、その一事の發表の形式の千差萬別なる、又貴き賤きに應じて使ひ分ける言葉のあやの複雑なる、更に又語法の自由にして規則づける事の困難なる、とても他國語の比で無い。此れが英語の如きであつたら語法も整然と主語述語もキチンと備はつて誠に規則正しい、従つて和文英譯の仕事には先づ與へられたる和文の精密なる語法的解釋が必要である、次に其れに應ずる所の English Construction を求めるのである。抑も一文の主要なる中心點はその文の主語である。主語の如何は引いて全文の構造を左右する。ところが日本文には往々此の大切な主語を缺く事がある。又眞の主語は隠れて客語がその位置につく様な事もある、(「それは必ず實行致します」の如き)或は又二つの語が相並んで主語の位置につく事もある(「その家は庭が廣い」の類)それ等に對して臨機應變の處置を執つて譯さねばならぬ。英學生の苦勞はまづ此處にある、今試みに一文を擧げてみると

みんなで一日中の面白かつた事を語りあつて夕食

をするときほど愉快なことはない。

一見してさほど六ヶ敷い單語としても無く無難に譯せさうである、「みんな」は all で「一日中」は all day、「面白い」は interesting と云つた様に部分的には困らぬ、がさてそれをどう綴り合せたものかと云ふ段になると中々面倒である、文の表からみれば「みんな」が主語で「語り合ひ夕食をする」と云ふ事であるが併しそれでは原文の意は纏らぬ。「みんなて」は「皆が御互に」の心である。語り合つたり夕食をするのは「吾々」であらねばならぬ。「一日中」も「朝から晩まで」の意ならば all day であらうけれども此處では「其の日のうちにあつた事」の心である、即 of the day が當る、a day でもなければ one day でも勿論無い。「面白かつた事」とあるからとて interesting things は當らぬ、その文意が「その日に楽しく思つた事」に思ひ當らねばならぬので、それならば What we enjoyed most during the day. とか pleasant happenings of the day とかあるべきだ、「夕食をする」to eat supper とする人は夕食は食ふものなり、食ふは eat なりと機械的に持つて行く人に違ひ無い。但しリーダーの一卷からして大概の場合には to have supper とか to sit at table とかあつた筈である、それ等を考へ合せてはじめて下の様な文が出来るのである。

Nothing is more pleasant than to sit for supper, talking with one another over what we enjoyed most

during the day.

以上の事どもを総合すると英文を書く事を習ふには一方自然に英語に慣れ親しむと同時に研究的態度を以て常に彼我の語法を比較対照して、思想の發表にも、和文の英譯にも役立たせる様に努むると云ふ事になる、が茲に吾々英學生に取つてどうしても缺く可からざるものが一つある、それは即英文法の知識である、前申した様に外國に長く居て不知不識のうちに英語が話せたり書けたりする様になる理想的方法は別として吾々の様に日本に居て短日時を以て英語を學ぶにはどうしてもその型を知つてそれにあて箆めて行くと云ふ方法を取らねばならぬ。ただそれが唯一の方法として一から十まで公式應用の箆め込み細工では英語が死んでしまふのである。と同時に全然文典を超越した人の英語には(大家は別として)誤りが起りがちである。どうしても極端はいかぬ中庸その宜敷を取つて進まねばならぬ。それで英文典の學習といふものは英文典そのものとしての學習としてでなく英語を読み、書くための英文典であり度い。冠詞の省略の場合が幾つ。定冠詞の用法がどう、と箇條書きに覺える事がたゞその知識のみで實際筆執つた場合に生きて働かねば實際的效果が少いのである。要は文典の知識が活用的であり度いのだ。それにはどうしても實際的練習が必要である、墨の上の水練では間に合はぬ。どうも吾々は讀む事はよくやるが書く事は誠にあつくらに感じる、餘儀なく

さるゝに非ざる限り英語を云つて見る、書いて見る事をせぬ。習ふより慣れよと云ふ金言は英作文に於けるほど適切なるものはなく而かも英作文に於けるほど守られざるものは無い。正に田舎の人が洋服を着る時の心理状態である。一年に二度か三度試験と云つた様な時に久方振りて英語を書かうと云ふのだからズボンを逆に穿いたりネクタイを忘れてたりするのは無理も無い筈、従つて益々英文を書くのがイヤになるわけである誠に御同情申し上げる。が併したゞ同情した丈けでは吾々の役目がすまぬ。どうしても平素進んで英語を云つて見る、書いて見る様に習慣づける事を強いなければならぬ、英文法の規則にしてからが彼の所謂英文の形式といふものをやたらに覺えた丈けで事あるに臨んでその形式に單語をはめ込む様な習ひ方では到底満足は出来ぬのである、形式てふものは死んだものである、此れを生かして使つて始めて役立つのである。或る英學生が下の様な文を譯させられた、

彼は劔を抜くや否や敵を切つた。

するとその學生は「や否や」は no sooner than である、好敵ござんなれとばかりに

No sooner had he cut his enemy than he drew his sword.

とやつて済して居たと云ふ、此れが即形式萬能で「や否や」は no sooner.....than てふ事丈けを知つて居てちつとも頭を働かす事をせず「敵を切つた」と「劔

を抜いた」とを随所にはめこんだ結果遂に「敵を切るや否や劔を抜い」てしまつたのである。此れは決して作つた噺では無い實際著者の授業中に起つた事である。こう云つた滑稽談も今日は人の身、あすは我が身、で吾々もどこでそれと五十歩百歩の誤をして居ないとも限らぬ、お互に注意して勉強せねばならぬ。

著者は今日まで英語の教師として英作文の困難を自らも痛切に感じ又英學生のそれに對する苦しみをも長年見せられて來た。その間折にふれて日本人として英文を書く事に感ずる困難やその短所を色々考へさせられた、それ等に對して如何に學んで行くべきかについて自らも取り他にも薦めた方針やら注意やらを書集めたものが本書である。その中には所謂文法の形式もある、彼我の語法の比較もある、別に系統としては立つても居ない、順序とても無い、が全體を通して讀んだ人に幾分か作文上の困難が輕められ、起り勝ちな問題の解釋を得るに便し得られやうと自ら信じて居る、もしそれに似た結果が得られたなら非常に幸福である。

CONTENTS

| | PAGE |
|--|------|
| 二つの仕事 | 1 |
| Subject の選定 | 5 |
| 無生物の Agency | 7 |
| Dative Verbs の利用 | 13 |
| Non-volitional Agency | 15 |
| “There are” に就て | 18 |
| 「が」と「は」と「を」 | 23 |
| Nouns and Articles | 42 |
| Dependent Clause の用法と Abstract | |
| Noun の働き | 58 |
| Continuative Use of Relatives | 67 |
| Relative Pronoun の Case | 72 |
| ▷ Connectives に就て | 76 |
| ▷ Incomplete Verbs と Complements の應用 | 97 |
| Causative Verbs の活用 | 111 |
| Passive Construction と注意すべき Transitive | |
| Verbs | 117 |
| “Be done” の形 | 132 |
| Verbal Form の Aspect | 136 |

| | |
|--|-----|
| Present Tense に就て | 140 |
| Progressive Form に就て | 147 |
| Shall と Will | 152 |
| Perfect Tenses に就て | 157 |
| Infinitive, Participle, Gerund の Sense-Subject | 168 |
| Partial Negation | 171 |
| 条件の構文 | 176 |
| 反対を表はす文 | 182 |
| 軽い反対を表はす文 | 190 |
| 原因、理由を表はす文 | 194 |
| 軽い理由を表はす文 | 201 |
| 長い文の譯し方 | 210 |
| Participial Constructions | 217 |
| 結果を表はす文 | 223 |
| 比喩、比較、比例を表はす文 | 227 |
| 極度を表はす Expression | 239 |
| 談話體に就て | 243 |
| Equality の心理とその發表 | 251 |
| 假定文に就て | 270 |
| 雜 題 | 289 |
| 問題譯例 | 293 |

APPENDIX

漱石「硝子戸の中」英譯



JAPANESE INTO ENGLISH

二つの仕事

和文英譯は free composition では無い、與へられた原文の表す所の意味を忠實に英文で表し、原文に無い事までも云ふてもいかぬし、又原文中の事柄を云ひあましても悪い。して見ると和文英譯たるものは嚴重に云へば自由英作文よりも難事である。さてそれで此の和文英譯を研究するに當つて先づ二つの仕事がある、それは

a. 原文を熟讀玩味して譯文の構造、譯語の配備をきめる事。

b. Concord を守る事。

である、a. に就てはすでに緒言に於て縷々述べた、要は筆を下す前に何を主語としどれを述語として、如何な構文で譯し出すか、と云ふ手配を腦裡に練る、と云ふ事である、それに就ては本書全卷を通じて機ある毎に説いて行くつもりである。

次に Concord と云ふ事である、Concord とは「一致」である、それは英語の第一歩から守られる所の規矩であつて、I とあれば am と應ずべく、They ならば were で was で無い、—— そんな事は今更云々するがものは無いと思はれるであらうが、決して然らず、可成り六ヶ敷い文法の規則は知つて居りながら、それで學生の書いた英文を見ると到る處で此の concord が破られて居る、He go to school. や I am fond to read novels. の如き例は決して稀らしく無い。

Concord とは決して單數複數の呼應をのみ云ふのでは無い、すべて英文構成上、語と語とが手をひき合ふて並ぶ上の約束である、to be fond of doing で to like to do (or doing) である、その concord を破つて to fond to do とする事も to be like to do とやる事も許され無い。We are very much like the French people. に於ける be like は「似て居る」意で「好む」では無い、How much we like to be praised! の like. とは全然別物である。I am to go there. は完全な英文であるけれど、もし I am go there とすれば「私、行く、あります」と云つた様な珍文になつてしまふ、明けても暮れても此の concord を守ると云ふ事は英文を書く上に於て決して忘るべからざる事である。例へば

身體の鍛練も亦修養の一要素たる事を忘れてはならぬ
を英譯するとして「忘れぬ」に對する主語如何に依つて

predicate がその態を定めねばならぬ、即ち

You should not forget that.....

It should not be forgotten that.....

This must be kept in mind that.....

等様々あらう、次で「身體の鍛練も亦修養の一要素である」が

the bodily exercise also forms part of a man's culture.

と譯す。今度は「一要素」とあるに英文では form part of又は form essential part ofとあつて a part として無い、これは一見 concord を破つたものの様に思はれやうが part と云ふ語の性質上 “part of a whole” (全きものゝ一部)の意では “a” を附けずに用ひる、がもし「肉體の鍛練が人の修養上重大な役目をつとめる」、心で to play a part の一句を借用するとならば又別問題で

the physical drill plays an important part in a man's culture.

となるのである。

猶一例をこゝに取つて見ると、

彼が立派に難關を切り抜けたのは天才や境遇の力ではなくて全く彼の努力と勉強の御蔭だ。
の英譯を試みるとする、全體の骨組が「.....したの
は.....の御蔭だ」であるから

It is owing to.....that.....

といった形式の應用である、で、その“that……”にあたる所が「天才や境遇の力ではなく努力と勉強の御蔭だ」と二者の比較であるから

It is not owing to his genius or circumstances but wholly to his industry and exertions.

とか又は

It is owing to his diligence and hard work and not to his genius or circumstances.

とかある所であらう、そして之につゞく文句は

……that he could successfully tide over that difficulty.

になる。ところが此の事たる過去に屬するもので、原文では「御蔭である」とあるけれ共英文としては「御蔭であつた」で無ければならぬ、それが即ち時の concord である、だから正しい譯文は

It was solely due to his hard labour and industry, not to his genius or circumstances that he could successfully tide over that difficulty.

である。此の concord は吾々日本人としては一寸不思議と思はれる位まで嚴守されるので下例の如きが最も目立つた例である。

どうして君は僕が此處に居るのを知つたか。

How did you know that I was here. [I am here で無い]

君の御名前は何かとつしやいましたつけ。

What did you say your name was? [your name is で無い]

以上説いた二つの仕事は和文英譯の研究に於て常に眼中に置かるべき最も重要な力點である。

Subject の選定。

一文を譯すに際して何が一番大事かと云ふと subject の選定であると云はねばならぬ。なる程原文には subject が出て居るけれ共必しもそれが譯文の subject にはならない。否ひしろ subject は他に求めた方が譯しよゝい場合が多い。それで一旦文の subject が極るとあとに續く文の書き方は自然とある文脈を辿らなければならぬので、subject の据え方一つで文の態が定まるのである。であるから一度筆を採つて書き出しても、うまくする々々行かない時は又後へ戻つて新規に subject を立て直して出發するがよい、例ば此處に下の様な文例を取つて見る。

バイロンの作物の特徴は其の燃ゆるが如き情熱である。

此れを問題の通りに譯すとすると subject は「特徴」があるのである。「特徴」は peculiarities とか remarkable features とか云ふ所だらう、で主語は The peculiarities

of Byron's works (or writings) である。「燃ゆるが如き情熱」は “burning passionateness” なぞであらう、が burning は無くともよい。それで「……にあり」は例の “to consist in” “to lie in” の如きが丁度適當するので、一と通りの譯は

The peculiarities of Byron's works lie in his passionateness.

である。此の際もし peculiarities の一語を知らなかつたとして、又「特徴」に對する譯語に窮したとして、決して全體を give up するには及ばぬ。此の文の譯はむしろ Byron's writings を主語として書き出した方が手軽く行く。但しそうすれば「バイロンの作は情熱を以て著しい」と云ふ風に書いて行かねばならぬ。それには to be marked by ~. to be noted for ~ 等の云ひ方が見出される。すると譯文がこう變化する。

Byron's writings are marked by his passionateness.

猶次の諸例に依りて一文が subject の据え方でその譯が如何に變化し得るものなるかを考究されよ。

父が死んで學費の途がふつつり絶えた。

- a. Father dying, left me without school expenses.
- b. The death of my father suddenly cut off the supply of my school expenses.
- c. I lost my father and was cut off from the means for study.

【注意】 上の a 文は「父が死んでその結果私を學費の無い者にしてし

まつた」と云つた様な書き方で後章に説く non-volitional agency を主語に据えたのである。b 文は「父の死」なるものを主語に置いたので所謂「無生物の agency」を働かした例。c. 文は直接影響を受ける「私」を主語として「父が死んだ」を “I lost my father.” と持つて行つたのだ、此れ等の文はいづれも原文の直譯 My father died and my school allowance was cut off. よりも better な譯文である。

此通知に接して拍子抜けがした。

a. I was disappointed at the report.

b. The report has come as a disappointment.

それで考ふべき第一の事は主語として扱はるゝ言葉の性質上如何なる點が邦語と英語との間に差異があるかと云ふ事である。それをこれから少し研究して見る事とする。

無生物の Agency

生の無いもの、無形のものを主語にして其れの働きで或結果が生じたものゝ如く云ひなすのが英語の idiom である。換言すれば原因や手段や方法等を主語にして文を作るのである。早い話が「彼はなぜ怒つたか」と云ふのは直譯して “Why did he get angry?” とするより “What made him angry?” とする方が idiomatic である、又「どうしてそんな考へを起したか」は同様に “What induced you to think so?” などとする。次の例で各々譯文 b が此の筆法を用いたもので、それ等が英文として簡潔な達意の文である事を考へられ

よ。

彼は勉強ずくて成功した。

a. He succeeded by dint of hard ^{industry} application.

b. Industry has gained him success. (or, has made him succeed).

時節が来れば真偽は判然する。

a. Truth must be revealed in (due course of) time.

b. Time reveals truth as well as falsehood.

人の性格は些細な事で知れる。

a. A man's character may be known by little things.

b. Little things will illustrate a man's character.

短い文で例を挙げれば際限が無いが此處に長い問題を採つて此の筆法の練習を試みやう。

例文 A.

3 夏は日が長いけれ共、だるくて活動が出来ぬ、之に反して冬は日が短いけれ共仕事がよく出来る。だから結果に於ては殆んど異なる所が無い。

【譯し方】「夏は日が長い」は何の文句も無いが次の「だるくて活動が出来ぬ」を如何に處置すべきか。「誰がだるくて活動が出来ぬ」のかと云へば「吾人が」である。すると

We feel dull and inactive.

であらう、しかしそれは夏の日の暑さが原因しての事であるか

ら、英文としたら

The summer heat makes us dull and inactive.

と致し度い、殊に此處は夏と冬の優劣の比較なのであるから、やはりそれを Agent に据え度い氣がする。

「之に反して」は “on the contrary”

「仕事がよく出来る」も前同様「冬の日が仕事に適して居る」意に表すべし。

「だから結果に於て」は一番簡單なのは “after all” だ、「結果に於て」をそのまま表すなら “in effect” などがある。

「殆ど異なる所が無い」の subject は何であるか、夏と冬の日であらう、だから此の両者が殆ど異らぬ (differ little) と云へばよい。即ち

So, after all, they differ little in effect.

の如きものになる。

【譯】 Days in summer are long but the heat makes us dull and inactive, while those ^{days} in winter are short but are fit for work. ^{on the contrary} So, after all, they differ little in effect.

【別譯】 The day in summer is long, but its heat makes us feel dull and disinclined to work; in winter, on the contrary, the day is short but is fit for work. So in effect there is little difference between them.

例文 B.

何か或事をせねばならぬとなると、それを爲す最善の方法に氣がつくものである。そうかと思ふと又岡目

八目と云ふ言葉もある。前者にも亦後者にも同じく真理がある。

【譯し方】「何かある事をせねばならぬとなる」との一句はそのまゝ譯せば When one is compelled to do anything などであらう。そうすると「それを爲す最善の方法に気がつく」が He will think of (or, find) the best way of doing it. とつゞくのだ。併し此の原文を考へて見るともう少し簡潔な所謂 short and pithy saying が欲しい、即「窮すれば通ず」と「岡目八目」と相對した様に。それで「何か爲さねばならぬと云ふ必要が人にそれをやる最良の法を教へる」と云つた様な風に持つて行く事を考へる、と此處に to suggest てふ動詞が大に御役に立つ。

The very fact of having to do a thing suggests one the best way of doing it.

此の文を見て學生は何だ一向簡潔ぢや無いと思ふかも知れぬ、成る程文の長さや語数はさ程違はぬけれどもよく讀み比べて見られよ。When one is....., he will findと云つた風の dependent clause (從屬節)を含むだ complex sentence は文の長短に拘らず語勢が鈍る、文が冗漫になる、反之只一箇の subject と predicate よりなる文、即 simple sentence は語数は多くとも簡潔に耳に響くものである。さて上の文意を猶一層短く表はさんとならば

Necessity is the mother of invention.

とするも一法だが此れはちと意譯に過ぎる嫌がある。いつれにせよ「必要」を主語として働かした點が眼の着け處である。次に「さうかと思ふと」は "while" でつなぐが手輕でよい、こんな語は所謂直譯したらさつぱりだめだ。

「岡目八目」とは圍碁の game (競技) を傍で見て居る人は實

際それに當つて居る者よりも八目丈けの強さがある。即當事者よりも傍觀者の方が目が利く意で

The outsider sees the most of the game.

が適當な譯である。

「前者にも真理がある云々」は There is as much truth in the former as in the latter. でよい。there is の代りに we find としても可である、で譯文は

【譯】 The very fact of having to do a thing often suggests us the best way of doing it, while "the outsider sees the most of the game." And we find as much truth in the former as in the latter saying.

【附】原文にある「……と云ふ言葉もある」は上の譯文では " " の mark で表はしてある、もし言葉で表はすのなら while we have a remark "....." which means just the reverse. などあるべきだ。こうすると又文に無い which means just the reverse (それは丁度反對の意味だ) の一句が加はる、それは英語として考へて何だかあつて欲しい句と感ぜられるからて此の邊の繁簡の具合が六ヶ敷のである。

例文 C.

どんな悪い事でも誰かに利益になるもので、東京に西班牙風が流行した爲めに財産を作つた醫者がある。

【譯し方】先づ「どんな悪い事でも」を直譯すれば A thing however bad in itself がよろしいがこう云ふ場合には形容詞の最上級が大に役立つ、即 the worst thing; the vilest thing がそれである。the worst; the vilest が「どんな悪い事でも」を表はすのだ。次に

「誰かに利益になる」が becomes a benefit to some people だ

八目と云ふ言葉もある。前者にも亦後者にも同じく真理がある。

【譯し方】「何かある事をせねばならぬとなる」との一句はそのまゝ譯せば When one is compelled to do anything などであらう。そうすると「それを爲す最善の方法に気がつく」が He will think of (or, find) the best way of doing it. とつゞくのだ。併し此の原文を考へて見るともう少し簡潔な所謂 short and pithy saying が欲しい、即「窮すれば通ず」と「岡目八目」と相對した様に。それで「何か爲さねばならぬと云ふ必要が人にそれをやる最良の法を教へる」と云つた様な風に持つて行く事を考へる、と此處に to suggest てふ動詞が大に御役に立つ。

The very fact of having to do a thing suggests one the best way of doing it. *clause は 成り立つ*

此の文を見て學生は何だ一向簡潔ぢや無いと思ふかも知れぬ、成る程文の長さや語数はさ程違はぬけれどもよく讀み比べて見られよ。When one is....., he will findと云つた風の dependent clause (從屬節)を含むだ complex sentence は文の長短に拘らず語勢が鈍る、文が冗漫になる、反之只一箇の subject と predicate よりなる文、即 simple sentence は語数は多くとも簡潔に耳に響くものである。さて上の文意を猶一層短く表はさんとならば

Necessity is the mother of invention.

とするも一法だが此れはちと意譯に過ぎる嫌がある。いづれにせよ「必要」を主語として働かした點が眼の着け處である。次に

「さうかと思ふ」とは "while" でつなぐが手輕でよい、こんな語は所謂直譯したらさつぱりだめだ。

「岡目八目」とは圍碁の game (競技) を傍で見て居る人は實

際それに當つて居る者よりも八目丈けの強さがある。即當事者よりも傍觀者の方が目が利く意で

The outsider sees the most of the game.

が適當な譯である。

「前者にも真理がある云々」は There is as much truth in the former as in the latter. でよい。there is の代りに we find としても可である、で譯文は

【譯】 The very fact of having to do a thing often suggests us the best way of doing it, while "the outsider sees the most of the game." And we find as much truth in the former as in the latter saying.

【附】 原文にある「……と云ふ言葉もある」は上の譯文では " " の mark で表はしてある、もし言葉で表はすのなら while we have a remark "....." which means just the reverse. などあるべきだ。こうすると又文に無い which means just the reverse (それは丁度反對の意味だ) の一句が加はる、それは英語として考へて何だかあつて欲しい句と感ぜられるからで此の邊の繁簡の具合が六ヶ敷のである。

例 文 C.

どんな悪い事でも誰かに利益になるもので、東京に西班牙風が流行した爲めに財産を作つた醫者がある。

【譯し方】 先づ「どんな悪い事でも」を直譯すれば A thing however bad in itself がよろしいがこう云ふ場合には形容詞の最上級が大に役立つ、即 the worst thing; the vilest thing がそれである。the worst; the vilest が「どんな悪い事でも」を表はすのだ。次に

「誰かに利益になる」が becomes a benefit to some people だ

が此れは少しまづい、やはり「それが誰かを利益する」と云つた筆法にして

The worst thing in the word do some one some good.

とする、*to do one good* (人を益す) といふ句を活用したのだ。或は

There is hardly anything, however evil in itself, but does good to some people (or, but brings some profit to some men).

此れは *but=that.....not* を應用して「……せざるもの少し」と云つた形に譯出したのである。猶此の外

It is an ill wind that blows nobody good,

と云ふのがある、それは「どんな悪い風でも誰かには都合がよい」意を裏から云つて「誰にも不都合な風こそ實際イヤな風だ、そんな風はめつたに吹かぬ」と云つた一つの諺言で丁度此處の譯文にあてはまる。

「東京で西班牙風の流行の爲め」は *owing to the prevalence of Spanish Influenza* が普通の譯でそれが

「財産を作つた醫者もある」(*some doctors made their fortune*) につゞくのだが此處でも「流行」を主格に置いて

The prevalence of Spanish Influenza of late has brought a fortune to many a doctor in Tokyo.

と譯すと文がスッキリとする。

【譯】 *It is an ill wind that blows nobody good, and the prevalence of Spanish Influenza of late has brought a fortune to some doctors in Tokyo.*

問題

1. 其の品は毀れ易いから大事に取扱はなくてはいけない。
(「……しなくてはならぬ」を *to require* を用ひて試みよ)。
2. 利害關係で集まつて來た友達は頼むに足らぬものだ。
(「利害關係」は意譯して *benefit* で表し得る、「benefit が呼び集めた友」と云ふ風に譯して行く)。
3. 山登りは、愉快で心身の爲めにはよいが、海の旅にも之に劣らぬ趣味と實益がある。
4. 彼は中々よい人間だが、酒のためにいつでもしくじるのだ。
惜いものだ。
(「彼を *mislead* するものは酒だ」或は「彼をして *err* せしむるものは酒だ」とする、「惜いものだ」は獨立して *pity* を名詞にして用ひて見よ)
5. 善人でも金のために目がくらむ事がある、金が敵の世の中だ。
(「金が善人を *evil-doing* に *tempt* する事がある」と云ふ風に譯して見よ)。

Dative Verbs の利用

無生物の agency に附屬して研究し置くべきは Dative verbs の利用と云ふ事である。Dative verbs とは「誰に何を爲し與へる」意味を示すもの、即 Direct と Indirect Object とを取る動詞を云ふ。My father bought me a watch. (父が私に時計を買つて呉れた) の如きがそれである。此の種の動詞中に特に原因、手段等を

subject にして 其れが基で斯々の結果を來した意を表はすものがある。例ば

此の離れ業のためにその飛行家は非常な名聲を得た。

を普通に譯せば

The aviator gained a great renown by this brilliant feat.

となるのであるが to gain には「或事が誰に………を得與へた」と云ふ風な云ひ方に用ひる事があるので、次の様な譯し方がある。

This brilliant feat gained the aviator a great renown. (此の離れ業が彼に名聲を齎した)。

此れを前の普通の譯文と比較する時は此の方が非常に味ひのある文である事が知られるであらう。同じ事を云ふにしてからが、If you show this ticket you will get admission. (此の切符を示せば入場が出来ます) と云ふ代りに、This ticket will gain you admission. とすれば文が直截簡明になる。to gain に類する語に to win がある。

彼はその頓智諧謔の爲めに秀吉の寵遇を得た。

His wit and humour won him great favour of Hydeyoshi.

さて言葉といふものは對を求めるもので「得て與へる」に對して「失つて與れる」と云つた様な心で to lose が類似の構文をなす事がある。

彼は野呂間だもんだから折角の好機を玉なしにしてしまつた。

His stupidity has lost him a rare chance of success.

問題

6. 此の計算器 (calculating-machine) があれば大層手数が省けます。

(“to save” を用ひて譯してみよ)。

7. 其の時初めて中學で習つた英語が御役に立つたわけだ。

(“to render one service” の云ひ方を参考)。

8. 一將の遅延の爲めにナポレオンは其の日の戦に敗れたのだ。

(「戦に敗れる」を “to lose the day” 又は “to lose the field” と云ふ、此れを Dative Construction に譯せ)。

Non-volitional Agency

He made himself sick by working too hard. と云ふた場合。「彼」は決して病氣にならうと思つて勉強し過ぎたので無い事無論である、それを「彼は己れを病氣にした」と云ふ様に云ひ表はす。此れは即「やらうと思つてやつたわけでは無いが自然そう云ふ結果を來すやうな所爲をした」心なのでこう云ふのが自然的作因 (natural agency) とも、又は非意志的作因 (non-volitional agency) とも云ふべきものである。それで此れ

を subject に置いて自然的結果を表はす筆法が英語では時々用ひられる。例ば

サキソン人の援助を受けた事はブリトン人にとつて猶一層恐ろしい敵を迎えた事になつてしまつた。

In calling in the aid of Saxons, the Britons invited a worse enemy.

かゝる場合動詞 **to invite** が「心あつて招ぐ」意から「自然と招いだ結果になる」意に轉じ用ひたのである。此處だ、考慮を要する點は、換言すれば「volitional action を表はす verb が non-volitional action を表はす場合がある」と云ふ事である。猶他に例を求めると、**to require** は普通「要求する」意と知られて居る、がそれは又「要する」でもある。He *required* me to do more than I could. (彼は私に出来ぬ事までせよと云ふた)。The matter *requires* a careful investigation. (これは慎重な研究を要する件だ)の二文がよく説明して居る。He *required* は彼の意志から發した行爲で、The matter *requires* は自然の必要である。此の後者の用法を生を有する主語に用ひる事に注意するがよい。

彼奴は厳しく罰する必要がある。

That fellow *requires* a severe punishment.

“that fellow *requires*……”と云ふたとて彼奴が「……して呉れ」と自ら進んで云ふたのでは決して無い。彼奴の行狀が自然的處罰を要求するのだ。即此處の that

fellow が non-volitional agency をなすのである。

又茲に **to remind one of ~** といふ動詞がある。此れは to put one in mind of ~, to make one think of ~ で「人に想ひ出させる」意だ、此れも **require** と同様 a. I beg to remind you of the promise you made the other day. (先日の御約束を御忘れ下さらぬ様に)、b. The song always reminds me of my childhood. (その歌を聞くといつでも子供時代を想ひ起す)、の二つの用途がある、此の後者の「……を見れば、又は……を聞けば自然に……が胸に浮ぶ」意で此の動詞が有生物を主語に持つ事がある。

そんなにクチャクチャ音を立て、物を食ふな、(それを聞くと)豚でも傍に居る様な氣になる。

Don't make such a noise in eating. You remind me of a pig.

此れも亦 non-volitional agency の一例である。

例 文

近來危険思想が我國にも擡頭して來て、此れを抱く者は何かし不穩な事を企てやうとする、彼等は常に其筋の嚴重な監視を要する。

【譯し方】「危険思想」は dangerous thoughts でよい、「擡頭する」は to raise the head と直譯しても通ずるが、此處では「危険思想を抱く者が出來て來た」と云ふ様を書いて、その次に來る「此れを抱く者は……」を單に they……と受けて譯

せば至極便利である、こう云ふ風に譯語の融通をはかる事を稽古せらるべし。

「思想を抱く」は to hold or entertain を用ひたらよい。

「不穩な事を企てやうとする」で「不穩な事」は riotous attempt などが譯語であるが reader 等によく to do mischief といふ語が出て居た筈だ。それで此の句に對しては

They are ripe for some mischief or another. が適譯である。
to be ripe for = to be ready for である。

「嚴重な監視」は strict surveillance で上に説いた require を使つて They require strict surveillance. とする、或は A watchful eye must be kept on them. としてもよろしい。

「其筋」は the authorities である、複數形で「權威を持つた者」の意で「當局者」に當る。

【譯】 Lately, dangerous thoughts have come to be entertained by some people in our country. As they are ripe for some mischief or ^{or} another, they require a strict surveillance on the part of the authorities.

one or another

“There are” に就て

ものゝ存否を云ふには普通 There is (or are) ~. の形式を取る事になつて居る、それで「……する人もある」とか「……した者も多い」とか云ふ文を譯する際に學生は多く此の形式に依るものとのみ心得て居らしい、例ば

自己の分に安んずる者は尠い。

を譯すに

There are few who are well contented with their lot.

とする、これは決して誤つた文では無いけれ共非常にオツクウな書き方である、もし「……する者」に相當する部分が長いものであつた場合には who から以下が長い adjective clause をなして従ふ事になる、さうはせずに簡短に

Few people are well contented with their lot.

として一向差支へは無いのである、のみならず There are……who…… と云ふ重くるしい云ひ方と比べて、かへつてよいのである、「自分の名さへ書けぬ者もある」などとあると、どうもすぐに

There are some who……

としなければならぬ様に感じるかも知れぬが決してそうで無い。

Some cannot even write their own names.

で結構なのだ。「やはりこれも subject の選定に關する一項をなすものであつて、要するに日本文で長い附屬句を従へた主語、そしてそれが「ある」とか「無い」とか云ふ場合には、その長い附屬句の内容を英文では predicate の方へ廻して、

「……する者もある。」 は
「ある者が……する。」 とし
「……する者が多い。」 は

「多くの者が……する。」
と云ふ風に譯出するのが便利なのである。

例文 A.

労働者のうちには朝早く家を出て、夜晩く歸る者が多い、休日の外には自分の子供の顔さへも見得ぬ者がある。

【譯し方】慣れぬ學生は此の文に對して正直に「労働者のうちには」を“Among the labourers”とし、それに“there are many”をつゞけ「朝早く家を出て」以下を who ……で表さうとするかも知れぬ、かりにさうして譯してみると

Among the labourers there are many who leave their homes early in the morning and return late at night.
となる。それと次文とを比較して見られよ。

Most of the labourers leave their homes early in the morning and return late at night.

日本文を離れ、たゞ上の二つの英文を読み比べて見ると如何にも後者の方がスラツと英語らしく讀めるであらう。因に、此處の「……者が多い」は「大概の労働者は」と云つた様な心なので most を以て表すがよろしい。次に、

「子の顔さへ見得ぬ者がある」

も同様「或る者は自分の子供の顔さへ見る事が出来ぬ」“Some cannot see the faces of their own children.”とすればよい。夜歸つたとて子の寝顔が見えるぢや無いかと理窟が氣になる人は

Some cannot see their own children awake.

とすればよい。

新法 = 43 424

「休日の外は」は“except on a holiday”など。

【譯】 Most of the labourers leave their homes early in the morning and come back late at night. Some cannot see even their own children awake except on a holiday.

例文 B.

近頃は出来合の服でも、丁度好い工合に體に合ふ様に仕立てゝあるので、特別に注文して二三割以上も高價なものを求めるのは愚であると云ふ人が多い。

【譯し方】「出来合の服」は“ready made suits (or clothes)”で、「注文する」は“to order”である。「仕立てる」は「縫ふ」(to sew)とは違つて to make, to tailor 等である。で、

「好い工合に仕立てゝある」は單に“……are well cut (or tailored)”でよろしい。服の仕立てに“cut”と云ふ語がよく用ひられる。例へば

君の上衣は仕立てがよい。

Your coat is neatly cut.

の如く、これは tailoring のうちでは裁ち方 (cutting) が一番重要であるからだ。

「體に合ふやうに」は前の「仕立てゝある」につゞけて“……are so well cut as to……”とやる。「體に合ふ」は直譯すれば to fit the body だが、これはチト困る、body の代りに wearer (着る人) を置き度い。

「特別に注文して三割以上も高價なるものを求める」の譯出を一考せられよ、これをそのまま譯して行くと

to purchase one's suit which is more than 30 per cent

dearer by specially ordering it.
 であらう、が英語として頗るといのはぬ様な気がしはせぬか、
 むしろ

特別に自分の服を注文するとして三割以上も高く拂ふ。
 to order one's suit specially and pay more than 30 per
 cent dearer.

としたらどうか、本文の語句に拘泥せずその精神を捉へて
 英語らしく云ひ表さうとすれば非常に樂で英語らしい英語が
 出来るのである。

「……するのは愚である」は “It is folly to……” でよい。最
 後に

「と云ふ人が多い」は前に説いた如く「多くの人が……」とす
 るがよいので、もし There are many persons who say that
 it is folly to…… などしたらまことに、くどい文になる。猶こ
 うで「……と云ふ」は「さう云ふ意見を持つ」意なので *Many*
are of opinion that の如きが適當であらう。

【譯】 Lately even ready made clothes are so well
 cut as to fit the wearer to a nicety. So many people
 are of opinion that it is folly to order one's suit
 specially and pay more than 30 per cent dearer.

問 題

9. 農場で働いたら苦いので、農業をやるのは考へものだと云ふ
 學生もある。

〔働いたら苦いので〕は「農場に於ける苦しい経験 (hard ex-
 perience) の後で」と云ふ様に譯出せばよし。〕

10. 自國語よりも外國語を好む人は甚だ稀だ。

「が」と「は」と「を」。

和文英譯の難關は“が”と“は”と“を”との
 處理にあると云へる。“が”と“は”とは主格關係
 を、“を”は目的關係を表すものと一口には云ふも
 のい、さて實際に當つて見ると中々そう簡單には參ら
 ぬ、邦文の表面から見ればなる程主格であり又目的で
 あつても文意の實質から考へれば決してさうで無い場
 合が多々ある。又邦文ではその名詞を主位に置き又客
 位に置いてよいのだが英文としてはそれでは不都合な
 場合も多い。此れ等は時と場合それぞれ臨機の處置を
 取るべきではあるが併し其の間に何等系統も組織も無
 いものでもあるまい。茲にそれ等の場合を系統的に調
 べて見やう。尤も此れであらゆる場合が盡せたわけ
 は無い、著者が平素經驗したものを取纏めたに過ぎ無
 いから。

I. 先づ“が”と“は”とを比較して見る。同じ
 主格關係を表す此の二つの助詞に何等用法の區別が無
 いかと云ふにそうでは無い。一言もてすれば“が”は
 “は”よりも我(か)が強い。「其れが善い」と云ふと
 「其れは善い」と云ふと比べて見るがよろしい。前者
 は他と比して其の方が善い様な氣持がある「其れ」な
 る者が他を排して「善い」と云ふ資格を壟斷して居る
 觀がある。「其れは善い」は相對的で無い、たゞ「其

れ」なるものゝ客觀的評價である。前者は *That's better.* と云つた場合があるが後者にはそれが無い。又「私が間違つて居た」と云ふのは「先方が正しかつた」場合に多い、此れは *I was in the wrong.* である。「私は間違つて居た」と云ふのは別に相手の無い場合に云ふ言葉で *I was wrong.* である。斷つて置くが此れは“が”と“は”との區別の總ては無い。此の區別のやうに複雑なものは一寸他に無い、上に云つたのはそのほんの一面である。たゞ先づ此の一面の事實を執つてそれが英譯に際してどう云ふ交渉を持つかを考へてから又他の一面に及ぼうと思ふのだ、てまづこう云ふ斷定をしてかゝる、即「が」は他との相對關係のある様な場合にそれを取り立てゝ何等かの叙述を加へるので、「は」は單獨に或者或事の叙述を爲さむとする時の主語の指定である。それで

A. 「が」が特に此の相對關係を明瞭に表す場合それに対する英文の構造に如何なるものがあるか、次の諸例に依つて研究され度い。

1. 先方がそんな悖徳行爲をした以上御互の關係は斷絶だ。

After such unjust conducts on his part our connection is at an end.

此れは動詞を使つてあるものを固めて名詞にしてしまひ「先方にそんな行爲のあるからは」と云つた様に譯してしまつたのだ、それには *on one's part* とい

ふ主格關係を表はす句が利用される。猶一例を擧げて置く。

自然は人間の額の汗に對してのみ物を與へる。自然が與へる賜物は人間が爲す努力に對する報償なのである。

Nature yields nothing except to the sweat of man's brow; every gift on her part is a recompense for effort on his.

2. 御前が悪いのだ、彼に何等責むべき點は無い。

It is you that are in the wrong; I find nothing to reproach him with. (or, he is not to blame in any respect.)

此れは“*It is—that—*”の構文の應用である。此れは何か特に取り立てゝそれに叙述を施さうと云ふ時の筆法で *that* につゞく動詞は理論上 *It* に應すべきではあるが實際はそのすぐ前の名詞に應じる、例へば“*It is you that is……*”でなく“*It is you that are……*”となる様に。斷つて置くが此れは必しも「が」にのみ對するものではない、それは普通文に直せば主語になるものを特に取り立てゝ云ふ時に“強い「が」”に對するものなので、普通文にして目的或は修飾句であるものを強く表す時の日本文は「が」でなく「は」である。

君が悪いのだ。

You are in the wrong. = It is you that are in the

wrong.

先生が呼んで居るのは君だ、僕ぢや無い。

Teacher wants you, not me. = *It is you that teacher wants, not me.*

僕が成功したのはやつとの事だ。

I succeeded with difficulty. = *It was with difficulty that I succeeded.*

3. 英語を知つて居る君が佛語を習ふのは容易だが何も知らぬ僕が習ふのは中々骨だ。

It would be easy for you to learn French who know English, but it is very difficult for me to learn it who have not learned any foreign language before.

此れは文の中に出て来る行爲の agent (仕手) を表はす場合即「誰が……する事」の發表法として Infinitive の sense-subject に for~ を置くのだ、此れに就てはその項を参照され度い。

B. 「は」は主格關係を表す助辭として「が」よりも用ひる場合が廣い様だ、それで單に英文でそれを subject の位置へ据える以外の場合を擧げて見ると。

1. 「君はどうかされたのですか」「何だか目がまわる様に感じる、僕はどこか悪いに違ひ無い。

“Is anything the matter with you?” “I feel dizzy, something must have gone wrong with me.”

此れは What is the matter with you? が代表的の

もので、一般的の叙述 (what is the matter? 何事か?) に特殊の場合づける with~ = in the case of~. (……に就て) を従へる云ひ方なのである、同じ「彼は事業に成功した」と云ふのでももしその事業が成功した事を主位に表し度ければ

He succeeded in the enterprise.

と云ふ代りに

The enterprise succeeded with him.

とするのである、即「事業は成功した」と「彼は成功した」との二者いづれかが後へ廻されるのでそれには in the enterprise; with him. と云ふ様に前置詞句を用ひて主語の衝突を避けるのである、猶一二熟語的譯例を示して置かう。

彼は萬事順調に行つたが遂に戦後の不景氣が襲ふた。

All had gone well with him, until the afterwar depression of trade came on.

見つかつたら最後僕は酷い目を見る所だつた。

If I had been discovered, it would have gone hard with me.

2. 語學は實用が第一である。何事でもそうであるが實際をはなれて理論ばかりでは何にもならぬ。

In the study of language, practice is the first thing. As in everything else, theory without practice will never do in this work.

文の冒頭に「……は」と取り立て、擧げるのは實際の主語にならぬ事が多い、現に上例に見る如くすぐ次に又「實用が」と云つた様に別の主語が現れて来る。此れは「……に際しては」と云ふ意味であつて多くこんな風に譯される。猶次の第 II 節を参照されよ。

3. 彼は無報酬で僕の爲めに働かうと云ふ、其れはこつちで承諾出来やしない。

He says he will work for me gratis. That I can never consent to.

此れは主語の假面を被つた目的語である、「……を」は普通動作の目標を示すのであるが其れを特に取り立て、「其れをする事は」と云つた様なものが此の目的を表はす「は」である、後段説く部分的指定の「は」である。

私は英語は習ひません。その代り獨逸を致します。

I do not study English. I learn German instead.

英語としての構文には別に普通の目的と變らぬが特に「それ丈けは」と強く表さうには最初の例に見る様に目的語の位置を變へる様な事がある。

II. 部分的指示の「は」と「が」。

「其の箱は形が丸い」「彼はみかけはぞんざいだが内心は好人物だ」等の文に於ける「が」又は「は」は主格の部分的指示と云ふべきものであつて、上例に見る如く本來の主語（その箱は；彼は）は別に存在して居る上にその如何なる點に就て述ぶるかを云ひ表すための

ものである。此の部分的指示の「は」と「が」とは頗る多い。そしてそれ等は大概は preposition+noun の句を以て表示さるゝこと下例に見るが如くである。

1. "in+noun."

此れは "It is round in shape and black in colour." と云ふ様な文で普通見る所である。此の "in" は意味の上から云ふと、in point of, in respect of (……の點に於て) である。かゝる譯例二三を擧げて置く。

東京市は益々人口が増えるばかりだ。

The City of Tokyo is increasing in population.

人は學問や智慧が進むと健康が退歩する。

As man advances in knowledge or wisdom, he retrogrades in health. *The more the world advances in knowledge or wisdom, the weaker*

此の品物は外見が似て居るが實質は大變違ふ。a man looks

These goods resemble in appearance, but differ very much in quality.

日本と英國とは總ての點が相似て居る。

Japan and England are very much like each other in many respects.

2. by+noun

此の句は元來 "I know them by name." (名に依つて知る——名前を一々知る) と云ふ様な用法で、名は、生れは、職業は等の句に對するのである。下の例がよくそれを表して居る。

彼は名は熊吉だが、通稱熊さんで通つて居る。

He is Kumakichi *by name*, but he goes *by the name of* Kumasan.

彼は生れは江戸つ子で商賣は大工だ。

He is an Edokko *by birth* and a carpenter *by trade*.

3. of + noun.

此れは「……に就て」が基の意であつて blind of one eye. lame of one leg. など云ふ類である。

その老人は少し耳が遠いがその他は壯者に劣らぬ程の元氣である。

The old man is a little *hard of hearing*. In other respects he is as vigorous as any young man.

彼は呑み込みがのろいが記憶は中々確かだ。

He is *slow of comprehension* but *tenacious of memory*.

4. for + noun.

所謂「……に向つては」で、その代表が “as for ~” (……は如何と云ふに) である。即或事を取り立て、特に述べ立てやうと云ふのだ。

▼ 詳細の事は幹事に御たづね下さい。

For particulars, I must refer you to the manager.

將來は注意致しますから、どうか今度だけは御赦し下さい。

I will be more careful *for the future*, so please pardon me *for this once*.

他の人はそれに對してどう云ふ意見か知らないが

私はそれに大反對です。

I do not know what opinions others may form of it; but *as for me*, I am dead against the step.

as for ~ の句の特徴は改めて主語を繰り返す點にある。上例の *as for me, I am.....* に見る如くに。

III. 「を」は目的關係を表はす助詞である。それで此れが英文に如何なる形を取つて表はれるかを調べて見ると、中々云ふ事が多い。一と口に目的とは云ふものゝ、それは單に他動詞の直接目的のみでは無い、以下擧ぐる所の諸形式はどうしても一と通りは呑み込んで置かねばならぬ。

1. **What have you done with it?** (君はそれをどうしたか) の形式。

此れは「……に對して何を爲す」意が基になるので “to deal with ~,” “to do with ~.” はその重なものである。

どうかその本を御讀みにになりましたら御返し下さい。

Please return me the book, when you have *done with it*.

どうぞ適當と思はれる様に彼等を御處分下さい。

Deal with them as you think proper.

此の仕事を片附けたらそれに取りかゝりませう。

As soon as I *get through with* this task I shall take that up.

2. **Don't be offended with me.** (僕を怒るな)の形式。

これは「……に……される」意で、感情の原因を表はす“with”が時に「……を」に對する事がある。但し此の構文は「を」よりも、むしろ「が」に當る事が多い、それは如何なる點がの意を表す「が」なのだ。

何故彼の人達は僕を怒つて居るのか解らない、彼等の怒を買ふ様な事をした覚えは無いが、

I can not see why those people are angry with me. I have done nothing to provoke their displeasure.

その子は私が與へたおもちゃが大變氣に入つた。

The child was much pleased with the toy I gave him.

3. **To fill the cup with water.** (水を杯に満たす)の形式。

「何に何を満たす」と云ふ事は英語的に云へば「何で何を満たす」となる。此の云ひ方が「供給」を意味する動詞に數多く用ひられる。なるべくその口調に慣れて置き度いと思ふ。

彼が居なくなつたから適當な者を補充せねばならぬ。

As he has left, I must supply the vacancy with a proper hand.

事業は有望なのですが資金をみついで呉れる人が無いので困つて居ます。

The enterprise is full of promise, but I am in trouble for want of a person who will furnish me with necessary funds.

御氣の毒様ながら御請求の金額を御用立てする事が出来かねます。

I am sorry to say that I am not in a condition to accommodate you with the loan you have requested.

何卒至急御回答をいたゞき度う御座います。

Please oblige us with a speedy answer.

青年に義務の觀念を植ゑ付ける事は最も必要な事だ。

It is most important to impress young men with an idea of duty.

4. **To catch a man by the hand** (人の手を捕へる)の形式。

「人の袖を引き止める」と云ふのは「人を引き止める」ので「袖其のものを引き止める」のぢや無いと云ふ理窟で“to hold a man by the sleeve.”とするのである、なる程「人の手を捉える」のも手そのものが單獨にころがつて居るやつを捉えるのでは無い「人を捉える」のだ、その捉える手が、りは何か? 即「手」であるから“to catch a man by the hand”となるわけである、初學者は此の by the hand をこちらの手を意味する様に思ひ易い、が決してそうでは無い先方の手である、此れは手だから一寸誤り易いのもし I caught the girl

by the hair. と云つたらどうか無論「娘の髪をつかんだ」意であらう。まさか髪のもで物がつかめるものぢや無い。それでこう云ふ部分を示す「を」の譯し方を下例で練習して置く。

私は彼の頸をつかまえて無事に陸上へ連れて来た。

I took him *by the neck* and brought him safely ashore.

彼は熱心に私の手を振つて歓迎してくれた。

He shook me eagerly *by the hand* and heartily welcomed me.

5. **He struck me on the head** (彼は私の頭を打つた)の形式。

これも上の *to take by the hand* と同一筆法である。「人の頭を打つ」と云ふのは「人を打つ」のだ、そしてその打つた場所は? に對して *on the head* とつゞくのである。He struck her head off. と云ふ様な實際首を打ち落した場合と對照して見られよ。

私はだれか背中をたたく者があるのに気がついた。

I felt some one *pat me on the back*.

正にその通り、君の想像的中した。

That's it. You have *hit the nail on the head*.

例文 A.

人は文明が進むと道德が退歩するとはよく聞く言だ

が確に今日の文明の世には恐しい暗黒の半面がある様である。

【譯し方】「文明が進む」は上の説明で知る通り *to advance in civilization* とする。「道德が退歩する」も同様。「退歩する」は *to retrograde* といふ動詞がある。retro- は back で、-grade は「度合」である *gradually* (段々に) の「段」がそれだ、それで *retrograde* が「低下する」事になる、此れをやさしく云ふなら *to go back in morals* でもすむ。その他 *to backslide* (逆戻りする、墮落する) といふ動詞もある。「よく聞く言だ」は簡短に譯せば *We often hear that.....* である。The remark is often made that..... としてもよろしい。

「今日の文明の世には」は *in the civilized society of to-day* で、「暗黒の半面」は *dark side* 或は *seamy side of life* などあるべし、*seamy side* とは衣類の裏の縫目の出て居る側を指すので「醜い半面」の意となるのだ。

「ある様である」はそのまゝの譯は *there seems to be.....* だがそれを *we suspect.....* で表はす事も出来る。

最後に注意する一點は「よく聞く言だが.....」の「が」である。此れは前言を否定する「が」で無くて、寧ろ肯定するツナギの語である。だから“but”は用ひられ無い、此れについては別項説く所の“but”の用法を参考されよ。

【譯】 *We so often hear the remark that where men advance in civilization they retrograde in morality, and really we (cannot but) suspect a dark side in the civilized society of the present age.*

例文 B.

大概の學生は夏休みと云ふと或は山へ、或は海へと
思ひ思ひに暑さを避けて面白可笑しく暮すのだが、此
の青年はそうぢや無かつた。

【譯し方】 大概の學生は “most students” で the most students ぢや無い、まづ「大概の學生は暑さを避ける」と云ふ。“Most students avoid the heat of summer.” となる。それに「或は山へ或は海へ行く事に依つて」とつなぐのである。それが “by going to the seaside or climbing the mountain” である。“climbing” の一語は「山」とある以上 どうも使ひ度くなる。mountain climbing (登山) は定り文句だから。

「夏休みと云ふと」は直譯して when the summer vacation comes. でもよろしいが、後段に面白可笑しく暮すとあるその目的語が無くてはならぬのだからそれに此の vacation を使ふても濟む、さて「暮す」は to spend one's time 又は to pass away one's time だが此處に例の面白く……するに最も有効な “to enjoy” といふ動詞を借りて enjoy their vacation とする、それに「思ひ思ひに」(in their own ways) を添へるのださうすると、問題の第一節はこう云つた風のものになる。

Most students avoid the summer heat by going to the seaside or climbing the mountain, and thus enjoy their vacation in their own ways.

そこでこう云つた general statement (一般的概括的叙述) をして置いて、但し此の青年は然らずと云はうと云ふ、かゝる際にすでに説明した “with——” の云ひ方を用ひるがよろしい即文を新にして

(It was) Not so with this young man. 又 It was not the

case with this young man.

とするのである。これをたゞ This young man was not so. では文が何だか間が抜けて感心せぬ。“be the case with” と云ふ事、此の句の使用はよくよく呑み込んで置いてもらいたい。又、此の青年と云ふのが this young man とする外に The young man here referred to (此處に舉げた、即今問題になつてゐる青年) などもよい。

【譯】 Most students avoid the heat of summer by going to the seaside or climbing mountains and thus enjoy the vacation in their own ways. But it was not the case with the youth here referred to.

【別譯】 It is usually the case with students to go to the seaside or climb mountains when the summer vacation comes and thus enjoy themselves according to their own fancies, but not so with this young man.

例文 C.

此の暑い天氣に外出は無論出來ず、内でゴロゴロして居てはだるくなるし、全く僕は自分をどうしてよいかわからない。

【譯し方】 「……は無論出來ぬ」には There is no —ing. 又は To do so is out of the question. の如き句がある、だから第一節は

To go out in this hot weather is out of the question. 或は There is no going out in these hot days.

等でもよろしい、それに「そうかと云ふて内に居て……しては云

云」とつゞくのだが、まづ「だるくなる」を何とするか、「だるく感じる」でそれは to feel out of joints 又は to feel languid 等である、それを使つて「内に懶けて暮す事がだるく感ぜしむ」るやうに云へばよろしい、即 It makes us feel only the more languid to..... となる。the more は不要なやうなもの、たゞさへだるいのには晝寢でもすれば猶だるくなる様な心でそう書き度くなるのだ、only を先へ出して It only makes us feel languid. としてもよろしい。最後に「自分をどうすればよいか」——これが “What to do with oneself” の應用である。

【譯】 To go out in this hot weather is out of the question, while to stay indoors, idly lying about, will make us feel only the more languid. Indeed, I never know what to do with myself.

【別譯】 There's no going out in these hot days, but yet it only makes us feel out of joints to lie about idly at home; surely I don't know what to do with myself.

例文 D.

彼は學問もあり手腕も充分だけれ共、此の仕事を任せるには少し若過ぎる。

【譯し方】「學問あり手腕に富む」は色々に譯し表はせる、別に難點は無い、to be learned and talented. でもよし to be a man of learning and ability でもよい、「手腕も充分」とあるからとて必ずしも enough や sufficient を用ひるにも及ばぬ。

He has much learning and sufficient ability.

が忠實な譯だがその他 He is much of a man of learning and ability などとして結構である。

さてそれで「仕事を任せる」が “to entrust a man with some work” といふ “to fill~with~” 流の云ひ方であるから、その直接目的たる「人」を主位に据えると「仕事を以て任される」とならねばならぬから

He is too young: to be entrusted with this work.

となるのである。

それで全體を通覽すると初めには褒めて置いて 後で缺點を云ふ例の云ひ方だから「成程.....だが」と云心を表すがよろしいそれには先づ “to be sure,” や “indeed” の如き副詞が入用である。

【譯】 To be sure, he is much of a man of learning and ability, but I think he is a little too young to be entrusted with this work.

例文 E.

君は大分英語が進歩しました。他の學生と比較して熱心の度が大變な違ひだから。

【譯し方】 まづ「英語が進歩した」は「君が進歩した——英語に」と書いて行く事。此の二重主語のさばき方に慣れて居らぬと困る、それで譯文は “You have very much advanced in English or in the study of English” と云ふ事になる。

後半の文は中々考慮を要する、それを原文に沿ふて譯すと英語らしからぬ英語が出来る。例ば

If compared with other students your zeal is remarkable.

と云ふ様なものになるのだが「他と比較する」からには「.....よ

り以上著しい程度」を表す事になるので “you show much higher degree of zeal.” とでもせねばならなくなる。そうすると誠にオツクウなギゴチ無い文になつて談話文として面白く無い。コウ云ふ場合はズツと原文から隔れて「君は熱心に於て遙か他を抜いて居るから」と云ふ様な意に書きこなすがよろしい。即 “to surpass one in~.” てふ句が利用されて

You surpass others by far in your zeal.

となるのである、一見してそれが原文の表さむとする真意なる事がわかるであらうと思ふ。

【譯】 You have greatly advanced in your study of English, for you far surpass others by far in your zeal.

【附】「熱心の度が大變な違ひだものそれもその筈」と云つた心を猶一層明かに表さむとならば—and no wonder, for you surpass others とすればよろしい。

例文 F.

讀書は多讀を要せず良書を擇んで熟讀するを可とす。

【譯し方】「讀書は多讀を要せず」に於て「要する、必要とする」事の眞の意味の上から見た主語は何であるか、曰くそれは「讀書は」では無い、「吾々が」である、We need not..... である、此れに in reading の一句を加へて見られよ、それが正に「讀書は」に相當する事を知らるゝであらう。次に「良書を擇んで」は to choose good ones で、「熟讀する」は to read carefully だから後半は we should choose good ones and read them carefully. となるが此れを一文にして We should read carefully a few well chosen ones. とするもよろしい。それから

原文には多讀を要せずと絶對的に書いてあるが、それではあまり強く響き過ぎる、やはり「それ程必要では無い；必しも必要ならず」の意を加味した方がよろしい、其れには we need not read many books but we should read carefully..... とあるその “but” を “so much as” にすればよろしく。又第二譯例の如く「多讀は」と書き出す以上、必しも讀書はとことわつて初めるにも及ばぬのでその一句を全然 ignore (無視) する事も出来る。

【譯】 In reading, we need not read many books, but we should read carefully a few well chosen ones.

【別譯】 Wide-reading is not so much necessary as well-reading of a few chosen books.

問題

11. 後年に於ける袁世凱 (Yuan Si Kai) の勢力は實に素晴らしいものであつた。
彼は名は大總統でも實は國王同然であつた。
(「名に於て大總統」だが「in reality では國王だつた」と譯す)。
12. 那須與一が扇の眞中を射當てた時は敵も味方も陸上からも海からも歡呼大喝采の聲が湧き起つた。
(「扇を in the centre に當てる」とする。「大喝采が湧き起る」は “great applause rang to the echo” など云ふ)。
13. 自分の云ひ分をすつかり聞いて貰はうとて人の袖を引つばつたり手を捉えたりするもんぢや無い。
14. 軍備制限 (limitation of armament) の必要は誰しも認める所だが、さて如何にしてそれを實現すべきかが問題である。
(「..... の必要は」は目的を特に抽出したもので “As to” と云ふ響き出しにする。後段は “the question is.....” と云ふ風にするがよし、「實現する」は to actualize, to realize など)。

Nouns and Articles

名詞及冠詞の用法は本書の一部として説くには餘りに廣い題目である。依て此處では單に代表的例文を取つて文法書に説く所の諸規則の應用を練習する事にした。

例文 A.

物は見かけに依らぬもので堂々たる紳士が私に耻づべき行爲をなしたり、素的な財布の中身が貧弱であつたりする事往々である。それもつまり外觀に苦心する人は實質がis sometimes found to beおろそかになる結果である。

【譯し方】「物は見かけに依らぬもの」とは “Appearance is deceptive (or deceiving)” と云ふ定文句がある。appearance が無形名詞で一般的に云ふ時は無冠詞なる事言を俟たぬ。後段の「外觀に苦心する人」の「外觀」は自己の示す特種の色々な様子であつてかゝる際には “to keep up appearances” (外觀をつくらふ、見得を飾る) の如く複数形にしてよく用ひる。かく單數無形名詞が複数形となつて特種の意味を持つ事は多々あるので例へば means (手段) の如きは却て此の方が多く知られ用ひられて元來の單數形 mean. (“to take the golden mean.” 立派な中庸を取る、極端に走らぬ) の方を知らぬ人が多い位である。

それでまづ “Appearance is deceptive.” はそれで一句にして切つて、「されば(so)堂々たる紳士も云々」と出て行くがよろしい。「堂々たる」は imposing or dignified がよろしい、「紳士」は gentleman でもよいが “personage” などかゝる所に用ひ

て面白い、「恥づべき (mean or shameful) 行爲」は conduct で此れは「指導」の意では abstract noun で單數だが個々の身の導びき方即ち行爲の意では common noun として複数形に用ひられる、又「財布の中身、内容」は “contents of a purse” で contents は複数形が普通だ、それは「contain (含む) したもの」の意だ。單數形ならば「満足」の意で to one's heart's content (心ゆくばかり) 等の句になる、で第二段は次の様になる。

So a much dignified personage is often found to be doing shameful conducts, or a splendid purse holding poor contents.

次にその説明として「それつまり……なのである」と云ふ、それには the fact is that…… や the explanation is that の如きがある。又「外觀に苦心する」は to take pains with~ の一句を用ひ度い、pain は「苦痛、痛み」であるが、pains となる時は「心配、苦勞」となる、で “to take pains with their appearances” がよろしい、さう云ふ人は實質 (real worth) をおろそか (to neglect) にするからだ、と云ふ。英語にするとときはそれも「し勝ちだ」と稍柔けて云つて絶對的に「……する」と云ひ切るのを避け度い。要するに此の問題には abstract noun は無冠詞單數形が本體で特種の場合を意味して それらが往々複数形に用ひられると云ふ事の説明に適する問題である。

【譯】 Appearance is deceiving. So a much dignified personage is sometimes found to be doing base conducts (or a base conduct), or a splendid purse to be holding poor contents. The explanation is that those who take much pains with appearances are apt to neglect their real worth.

例文 B.

此の論文は今すぐと云つては書け無い。それに少し頭痛がするから明日書かう。一と晩よく眠たら癒るだらうから。

【譯し方】「今と云つてすぐに」は “at a moment's notice” といふ句で表し得られる、元來 's の語尾は生物にでなければ附けて用ひる事を許さぬ定めであるが特に生あるものゝ如く取扱つた名詞即 personify (擬人) したのものにはその形を取る事を許す、例へば the sun's rays とか our country's needs とかいつた様に。それから又 time, distance, value, weight 等を示す名詞には語句の簡潔をはかる上に於て 's の語形をゆるされるので at a month's notice (一ヶ月前に豫告して) とか A mile's ride とか a dollar's worth (一弗ぶり) 又 a pound's weight (一封度の重量) など云ふのである、それに類して「一分時の豫告」で、即「即席に」の意で at a moment's notice があるのだ、故に第一節は

The essay cannot be written up at a moment's notice.
となる。

「それに」は Besides 又は Moreover である、次に comma を置く事を忘れてはならぬ besides の次にコンマが無いと「その次に云ふ事の上に」となつてしまふ。次の文例を比較されよ。

彼は學問もあるしその上経験もある。

He is a learned man. Besides, he has much experience.

He has much experience besides scholarship.

次に「少し頭痛がする」は “I feel a slight headache” である。

最後の節の「……だらうから」は捨てゝただ「……だらう」とし

て構はない、でないと「頭痛がするから」と云ひ又「癒るから」と云ふ二つが「明日書かう」の理由になるわけで變になる。それで「一と晩よく眠たら」の譯し方だが、此れが上に説いた “an hour's ride” 流の云ひ方で A night's rest を主語に据えてそれが私をサツパリさせる、とやうに書く、例の subject の選定に關しての腕前が要る、でないと If I have a good sleep for a night I shall get well. といふダラけた文になる、それを

A good night's rest will set me all right.

とするのだ、この good は「たつぶり一と晩の休息」の意である事を知つて置かれよ。猶此の流の譯し方の参考例を一二擧げて置く、

一哩騎つたら町の見える所へ出た。

□ A mile's ride brought us in sight of the town.

その宿屋は停車場から歩いて十分の所にある。

The hotel is at ten minutes' walk of the station.

【譯】 The essay cannot be written up at a moment's notice. Besides, as I feel a slight headache now, I shall write it to-morrow. A good night's rest will set me all right.

例文 C.

此の土曜日に友達四五人と海岸へ行かうと思つてゐますが御閑でしたら一所に御出になりませんか。

【譯し方】「海岸へ行く」と云ふ「海岸」はどこかの海岸だから a seaside 又は a sea-shore だと思ふかも知れぬがそうで無い、此處では go to the seaside とあるべきである、まづ seaside で sea-shore で無いわけは此れは「海濱の土地」の意であつて實

際の海岸を指すのぢや無いからである、もし鎌倉に住んで居て夕方海岸へ散歩にでも行くのなら go to the sea-shore. であらうが東京に居るものが夏海濱へ行くなどは go to the seaside である。それから “the” を附するわけは「田舎へ行く」を “go to the country” と云ふと同様或る特種の場所例は山野 (the field), 空中 (the air), 水中 (the water), 地上 (the ground), 芝原 (the grass) の如く他と大別して specify する場合には “the” を附するのである、南、西、東と區別して「北」だから the north であり、左に對しての「右」が the right である、地に對して「空」が the sky であるし、「海」が the sea である、細かく分けて或る濱と思ふから “a” が附く様に思ふのだがそれなら “go to a seaside place or village” とでも云ふべきで大別して海濱の總稱と見て the seaside となるのである。

「行かうと思つて居る」は I am thinking でなく “I think I will.....” か “I am going to.....” とすべし。

「一所に御出でなさい」は won't you go with us? 又は join us? で「御閑なら」は if you are free. 又は if you are not engaged 等よろしい、それで全體の譯は次の様になる。

【譯】 I am going to the seaside with a few friends next Saturday. Won't you join us if you are not engaged that day?

【別譯】 I think I will visit a seaside place with some friends on Saturday next. Would you go with us if you are free that day?

例文 D.

英國人は保守的だ、頑固でなく、自由を愛するが秩序を亂さない、獨立心と自治心に富んだ高尚な國民である。

【譯し方】「英國人」の譯語に四つある、the English, the Englishman, an Englishman, Englishmen. 之である、第一は英國人の總稱で、第二はその代表的單數、第三は any one of them で第四は英人等といふ不定複數である。それで此の場合どれが適すかと云ふにどれを使つても誤りではあるまい、が問題の性質から考へて見ると此れは英人の國民性を説いて居るのだから第一の形式が適當である、代表單數形の The Englishman もよろしいが文の結びが「高尚な國民である」とあるに徴して They are..... と云ふ様に自然なる道理であるからやはり The English の方が better である。そしてその「高尚な國民である」と結ぶ場合は “They are a noble nation.” とする、the noble nation では無い、此れは丁度 I am a student. と云ふと同様で The+noun is a+noun の形式は少しも珍らしく無い、「彼等英國人は一個の立派な國民だ」であるから。

次に「保守的」は “conservative” で「頑固」は “obstinate” 或は “bigoted” など、「自由を愛する」は “to love freedom” で「秩序を亂す」は “to be disorderly” 又は “to disturb order” だ。此れ等が二つづゝ對となつて一方を肯定し一方を否定して行く書き方に注意せられよ、簡単に but not で譯せば “The English are conservative but are not obstinate. They love freedom but never disturb order.” となるのだが第二段は少し何とか變へてもよい、例ば “Though lovers of freedom, they

are never disorderly”など、Though の次には“they are”を略したのだ。

そして今度は全體をしめ括つて「高尚な國民である」と云ふのだからその前には Indeed とか In short とか何とか對應的の起句があり度い、そして“they are a noble nation”に「獨立心(spirit of independence)と自治心(spirit of self-government)に富んだ(full of)」の一句を加へればよろしい、independence と self-government の spirit だから此れは複數形でなければならぬと思ふかも知れぬが、かゝる際よくそれが合一した一つの心と見て單數形にする事がある、どちらでもよろしい、冠詞は定冠詞がつく。

【譯】 The English are conservatives but are never bigoted. Though lovers of freedom they are never disorderly. Indeed they are a noble nation full of the spirit of independence and self-government.

例 文 E.

猫を被つて聖人氣取をしても駄目なものだ、いくら口の先きで嘘をついても目が物を云ふ。要するに人間といふものは正直なものだ。

【譯し方】 單數名詞に定冠詞を附けると其の種のもを代表して「……と云ふもの」の意になる事は文法ですでに知らるゝ事と思ふ、The dog is a faithful animal. に於ける様に。併しそれは必しも「と云ふもの」と云つた場合にのみ限らぬ、それが代表的意味を表して用ひる時ならば皆此の用法になる、例ば

君はピアノを弾きますか。

Do you play the piano?

斯る人間は到底いざといふ時役に立たぬ

Such a person will never rise to the occasion.

それで此の代表的 the +noun の例外として忘れてならぬものは“man”と“woman”で此れも文法書にはちゃんと出て居るがさて作文となるとどうも忘れ勝ちなものだ、「人間は萬物の靈長だ」「Man is lord of the creation.」の如き例でしかと覚えて置かれよ。もし“the man”と云つたら「あの人」と云ふ場合は無論別として「人情」とか「人としての性格」とか云つた abstract quality (抽象的性状)を指す事になる、例ば“The child is father of the man.” (子供の性格がやがて長じての人格の素である)に見る如く、又此の冠詞の用法も必要なものである、“the pen”と云へば「文筆の力」を意味し“the sword”と云へば「武力」を指すと云つた様に“the +有形名詞=abstract quality”となるのだ、此の用法を應用して澤山の慣用句が出来るので「聖人を氣取る」も“to play the hypocrite”と云ふのだ、同様に「馬鹿の眞似をする」、が“to act the fool”であり、「目も口程に物を云ふ」も“The eye can tell as well as the tongue”である。それでそれ等の應用が此問題の狙ひ所なのである。

【譯】 It is no use playing the hypocrite. The tongue may lie but the eye will speak the truth. After all, man is an honest being.

【附】 上文の“the eye will speak the truth”の will が必要である、即「目は眞を語らばはおかぬ意である、此れなぞは原文に無くても前後の文意をとくと考へてみるとなる程と首肯さるゝであらう。又「人間てふものは正直なものだ」の「もの」が“being”で表される、「人」を

「存在物」即 being で表すのはこう云つた場合なのである。

例文 F.

私は其處まで行つて案内を乞ふ丈けの勇氣が出るまでに何遍も戸口を行つたり來たりした。

【譯し方】 此れは「案内を乞ふ丈けの勇氣」の譯し方で定冠詞 “the” が利用される、それは “the” が “such” の意でよく名詞につく場合なので、下の様な例はよく心得て置く必要がある。

彼は約束を破る様な男で無い。

He is not the man to break a promise.

彼は不幸にも學生時代に父を失ふた。

He had the misfortune to lose his father in his schooldays.

第二の例に見る如く「不幸にも……した」は「……する様なそんな不幸を持つた」と云ふ風に云ふ、勿論 He was so unfortunate as to lose etc. としてもよろしいのだが特に此の “the—to do” と云ふ語法が氣が利いて居る。それで「行つて案内を乞ふ丈けの勇氣」も此の流で譯すと “to have the courage to go up and knock” となる、「案内を乞ふ」は直譯すれば “to call or ask for admission” であるけれども普通さうせずに “to knock (at the door)” 又は “to ring (the bell)” 等云ふ。「戸口を行つたり來たり」は “to pass” の一語で片附けられる。

【譯】 He passed the door a dozen times before he had the courage to go up and knock.

【附】 上例に「何遍も」が “a dozen times” とある、決して「十二回」と正確な度數を示したので無い、數詞をかく「多數」の意で用ひる事に注意さるべし、此處でも或は “dozens of times” と云つてよいのだ、

dozen とか hundred とか pair とか云ふ類の言葉は定數を表す時は複數形の語尾 “s” を附けずに “two dozen of handkerchiefs” とか “three hundred of men” とか云ふが、不定數を表す場合には “s” を附ける、例ば “dozens of times” “thousands of men” の如くに。

次に上例の「……までに」が “before” で表してあるに注意。before は「……する前に」と云ふ邦文の外にこう云ふ原文に對してよく使はれるのである、例ば

成功を望み得る迄に一度や二度の失敗は覺悟せねばならぬ。

You must be prepared for a failure or two before you can hope for success.

例文 G.

「その事を誰にも云つちやいけないう、いゝかい」。
「大丈夫、一と口だつて口外はしないよ」。

【譯し方】 「一言たりとも」と云ふ様な強い否定は “not a~” である、即ち普通 “no~” と云ふべき場合 “no” を “not a” とするとそれが強い否定になる、例ば「そよとの風も無かつた」と云ふに “There was no wind.” ぢやちと物足り無い、そこで There was not a breath of wind.” とやる、依つて「一語たりとも云はぬ」は “I will not tell a word.” であるがその語勢から云つて言葉も従つて修飾されて

I will not breathe a syllable of it.

などするがよい。で初めへ返つて

「誰にも云ふな」は “Don't tell anyone about it” だか「いゝかい」はどうする?—こんな所で Mind! (心せよ) が利用されるのだ、此の邊の事は別項談話體の譯し方を參考さるべし、同様に「大丈夫」も “Depend upon it” など云ふ言葉が用ひられるのだ。

【譯】 “Mind! Never tell anyone about it.” “Oh, no! Depend upon it, I will not breathe a syllable of it.”

例文 H.

多くの近代語のうちで英語が一番広く話される言葉であるから、中學校の一學科とされて居る。

【譯し方】 此の中で冠詞の用法について注意して置く點は英語が the English language とするか或はたゞ English とするかである事、但しそれは一般的に「英語」と云つた場合なので、もし何かある特別な語に對する英語、例へば「學科といふ英語」(the English for “gakka”) とか又は或る事物が書かれて居るその國語とかを表す場合なら “the” を附けるのである例ば

此の物語りは英語から譯したものだ、

This story is translated from *the English*.

下の英文を譯しなさい。

Translate *the following English*.

それから「一番広く話される」は “the most widely spoken” である、“most” を無冠詞で用ひると「大概の」の意となつてしまふ。

今年から官立學校が 大抵皆學年開始を四月とする事になつたと思ひます。

I think it is decided that *most* government schools shall commence their school year in April from this year.

「中學校の一學科」では「中學校」が代表的單數 “the middle school” である事、などである。

【譯】 Of those many modern languages English is

the most widely spoken, and so it is made a subject (of study) at the middle school.

例文 I.

御出の際若し神保町をお通りでしたら、何卒私に東京堂で井上氏の英和辭典を買つて來て下さい。

【譯し方】 「御出の際」とあつてもそれは「來る途中」の意だ即 “on your way” でよい。それからこゝらの「若し」はさほどの不確實を意味するでも無いから “if you pass……” と普通の indicative を用ひてよろしい、“if you happen to ——” など云ふと「萬々がー」と云ふ様な語氣になる。

それで「井上の英和字典」であるがこれは “Inoue's English Japanese Dictionary” ではあるが此の際冠詞を附けたものかどうか、附けるとしたら「一つ」の意で “an” か或は定つた書物だから “the” か考へなければならぬ、それでまづ第一に注意すべきは書名と書冊そのものとは取扱ひがちがふ、例ば「井上の辭典を用ひる」と云つた場合にはそれは固有名詞で “I use Inoue's Dictionary.” だが「井上の辭典を一冊買ふ」は “I buy a copy of Inoue's Dictionary.” である、「君は八犬傳を読んだか」は “Have you read the Hakkenden?” だが「君は八犬傳を持つてるか」は “Have you a copy of the Hakkenden?” である、で此處では “Please buy me a copy of Inoue's Dictionary.” とすべきなのである。

【譯】 If you pass Jimbocho on your way, please buy me a copy of Inouye's English-Japanese Dictionary at Tokyodo.

例文 J.

音楽に耳のある者は概して語学の頭がある。それを見ても語学は幾分音楽と共通の所がある事がわかる。

【譯し方】人間の才能性狀を其の機能の名で表す事がある、「目が利いてる、耳が捷い」など邦語で云ふと同じである、此の場合「目」は「視力」を、「耳」は「聴覺」を意味して居るのだ。英語にも正にそれに相應する云ひ方があつてそう云ふ性能を持つて居る事を “to have an eye for~,” “to have an ear for~.” 等云ふ、かゝる際は單數に不定冠詞を附けて用ひるが普通である、此の問題の第一節などもその流義で譯して

Those who have an ear for music are generally found to possess a head for the linguistic study.

とすればよい。此處で “be found to……” の句を用ひる事に氣を附けられよ、原文にこそ只「……がある」とあるけれどもそれは經驗的に「……と云ふ事がわかる」意だからこう云ふ所で be found が役に立つのである。

次に「それを見ても……なる事がわかる」は “This shows that……” の一句がよくそれを表す。此れも subject の選定に關する一つの練習である。「共通の所がある」は “to have~in common with~” がよい、「の所」は to have の目的語に “something” を置く。「もし大に共通の所がある」、と云ふなら “to have much in common” である。

【譯】 Those who have an ear for music are generally found to have a head for the linguistic study. This shows that the study of a language has something in common with that of music.

例文 K.

部屋へ歸つて見るとまるで滅茶苦茶になつて居た。書類は床の上に散らばつて居る椅子はひつくり返つて机の上はインキの洪水、全く部屋中の器具何一つとして在るべき所に無かつた。

【譯し方】無形名詞は色々の前置詞と合して特種の形容詞句や副詞句を作る、かゝる際に大抵は無冠詞である、この中にも “in” と “out of” は「或る状態にある又は無い」意の語句をなす、例ば、

部屋が整頓して居る (又は居ぬ)

The room is in order (or out of order).

去る者日々に疎し、(見えぬ所にあると心からも去り勝になる。)

Out of sight, out of mind.

病人は非常に危険だ。

The patient is in (great) danger.

こう云ふ語句は一語の形容詞や副詞では表しかねる意味を持つ事が多いので、上例の「危険だ」の如き、もし此れを dangerous とすると同じ「危険」でも「それを他に及ぼす」意の「危険」なので、もし The patient is dangerous. とすると狂人が傳染病者か何かで吾々に危険を及ぼす懼れある「危険な病人」と云ふ事になつてしまつて病人其の者が危篤な意とは大變な差違が出来るそれから又こう云ふ句は一つの成句をなして居るのでそれぞれ特別の意味を帯びる事は下例を比較してよく解る事と思ふ。(第二例が即 in+~の成句をなした場合である)

其れは暗くて冷かな場所に置くべし。

Keep it in a cool and dark place.

彼の言は實に當を得たものだつた。

His remarks were *in place*.

それからこう云ふ句は又 verbal sense を有する事が多い、例へば

その型は今流行して居る。

The style is now *in fashion*.

その御醫者は今開業して居る。

The doctor is now *in practice*.

これはたゞ “in” と “out of” とに就て云つただけであるがその外 “at” や “with” と共に成句を爲すものが無数にある、で問題の英譯へ移つて「部屋が滅茶苦茶になつて居た」は The room was out of order (or in disorder). であるが例に依つて「歸つて見たら」の意を考慮して “I found the room in utter disorder.” とする。

「書類」は “papers” である。これは物質名詞が複数形にならぬと云ふ規則で paper は “a piece or (pieces of) paper” と云ふべきが當然なのだが「書いたもの、書類」の意では特に papers となる。「答案」なぞの “examination papers” と云ふのもこの場合だ、「床の上に散らかる」は “to be (or lie) scattered about on the floor” でよろしい。

「机の上はインキの洪水」とは “the desk was flooded with ink” だ、“to flood” は「水を被らす」といふ他動詞である。それから「部屋の中の器具」は名詞 “furniture” を使ふのだが此れは “clothing” と共に必ず單數であつて丁度物質名詞と同じ様に a piece of, an article of. 等の句を付けなければ一つ二つと云へない厄介な名詞である。それだから此處でも “Every article of furniture in the room” とせねばならぬ、それがそれぞれのあるべき所に無く雜然となつて居たと云ふのだから “to

be out of its place” の句で譯せばよい、its place としたのは「それぞれのあるべき場所」の意なのだ。

【譯】 On coming back to my room I found it in utter disorder, — the papers were lying scattered about on the floor, my chair was turned over, and the desk was flooded with ink; indeed every article of furniture within the room was out of its place.

問題

15. 西洋では雇主が雇人 (employee) を解雇する (to dismiss) 時又は雇人が暇をもらはうとする時は一ヶ月以前に斷るのが普通である。

(「斷る」は “to give a month's warning or notice” なり。)

16. 私は草臥れて草の上に寝たそして空を見つめて居るうちに知らぬ間に眠りこんでしまった。

17. 彼はそんな待遇 (treatment) を甘んじて忍ぶ様な男では無かつたので早速幹事の許へ出かけて行つて説明を求めた。

18. 此靴を直して貰つたらまだ穿けるでせうか。

19. 此書物は二部持つて居ますから御入用ならば一冊差上げてもよろしう御座います。

20. 盛岡は北上川の左岸にあり、我等の學校は此の市の北端に位す。

(Morioka 或は the city of Morioka なるに注意、「左岸に」は on the left bank. 「北端」は at the northern extremity なり)

21. 彼等は其日暮しで貯蓄なぞと云ふ事は知らぬ、日毎々々に仕事に行つて取つた金は皆その日の内に使つて仕舞ふのだ。

(「其日暮し」は “to live from hand to mouth” と云ふ、名詞をかく二つ々つ對に並べる時は無冠詞となる、「日毎に」も “day by day” である。)

Dependent Clause の用法と
Abstract Noun の働き

文が長くなると自然諸所に節(フシ)が出来る。節とは長文中の短文を云ふので、文法で Clause と云ふものがそれである。さて此の Clause なるもの頗る面倒であつて、就中 noun clause に於て吾々は多大の困難を感ずる、と云ふのは日本語では勝手に云ふ丈けの事を述べて、それを「……であるのは」とか「……なるを」とか手軽に名詞化してしまふが、英語では中々さうは行かない。イヤ行か無いではない行き方を知らないのだ。まづ文の中で名詞にまとまつた瘤つ玉の作り方から研究して行かう、實例を執つて進むのが一番手つ取り早い。

此の國で農業が幼稚なのは果實が澤山あつて食物を得るに困難でないからである。

上文の「此の國で農業が幼稚なの」が明に一つの名詞節をなすのだ、[序に斷つて置くが上の一文でも「此の國で農業が幼稚だ、何となれば……だから」としてしまへば「……なのは」と云ふ様な節にするに及ばぬのだ、が併し結局は同一の意味でも「これこれだから、こうこうだ」と云ふのと「こうこうなのは、これこれだからなのだ」と云ふのとは語氣が違ふ]。それでかゝる場合に對する最も普通な形式が It.....that である。

即ち名詞節を作る第一の形は that を以て引き纏めたもので、それを it が代表して先へ出るのだ。これで譯すと

It is because we have wild fruits growing abundantly and so we find no difficulty in getting our food that our agriculture remains in its infancy.

次に又「……なる事」と云ふ句に對して the fact that..... と云ふ引き結びの語がある。これを用ひるとそれを文の頭に据える事が出来てこうなる。

The fact that our agriculture is still in its infancy is because.....

一方又「……だからだ、」と云ふのが because 以外に is owing to~ とか is due to~ とか云ふ句で表し得るので、そうするとその次には名詞が必要になるから

It is owing (or due) to the fact that we have abundant fruits, and consequently, we can get our food with ease, that the agriculture of our country is still in the state of infancy.

と、そちらの方へ the fact that を用立てる事になる。

此の the fact that..... と云ふ書き方は語勢を弱める事があるから、よくよくの場合でなくば用ひぬ様にするべきである。元來色々の長たらしいつなぎの語は文がだらける缺點を興へる。作文の要訣は直裁簡明を第一のねらひとすべしと云ふ事である。なるべく文を短く

せよ。which や that 澤山の、行つては返り、返つては續く様な文は我々の様な未熟者には殊に避くべきである。此處の原文なども次の様に譯して一向差支ない。

The agriculture in our country is still in the rudimentary state. This is because we have wild fruits grow so abundantly that there is little difficulty in getting our food.

さてそれで此の直裁簡明と云ふ事に最も役立つのが abstract noun の活用である事を力説せねばならぬ。上の例を引きつゞき用ひるとして「果實が澤山ある事」と云ふのを“the fact that there are wild fruits abundantly”と譯す。これをもつと引きしまつた云ひ方にするには、その句の中で名詞形を求めるにある。即ち *abundance of wild fruits*. 或は *abundant growth of wild fruits*, 等の句が作り出される。そうすると「それが爲めに食物が容易に得られる」のだから、別項「subjectの選定」「原因結果の表し方」等に於て説く所に従つて「果實の夥多、それが吾人に容易に食を得しめる」と云つた流儀に譯してこうなる。

the abundant growth of wild fruits which enables us to get food with ease.

此れを

the fact that wild fruits grow so abundantly that we can get food without difficulty.

と比較して優劣を考へられよ。其の語勢に於て、キリッとしまつたる點に於て前者の勝る事今更言を俟たずである。同様に「此の國で……の幼稚なのは」も abstract noun を主位に据えてこゝに氣の利いたハツキリした文が出来上る。

a. The rudimentary state of our agriculture is owing to the abundant growth of wild fruits which enables us to get food with little difficulty.

b. The state of infancy in which the agriculture in this country still remains is due to the abundance of wild fruits which makes it very easy for us to find food materials.

以上の事柄を考へて來ると茲に Abstract Noun の有用な事、其の使用が一連の小文章が表はす意味を一語もて表し得る高等な expression をなすといふ事を首肯するゝであらう。それは上述の如き名詞節に於けるのみならず形容詞、副詞の用をなす節、即 abjective clause, adverbial clause 等を condense (短縮) するにも最も必要なのである。例へば When I arrived in Tokyo, I at once went to his house. が On my arrival in Tokyo, ……となるし、A man that has a fine character が A man of character と縮まるのである。Condensation of Clauses (節の收縮) と云ふのが此れである。以下二三の短い例を示して置く。各對の譯例に於て後に擧げたものが abstract noun (“—ing” の

verbal noun をも含む) を用ひて簡潔にしたものである。

序に断つて置く。文句の収縮と云ふ事は必しも文の長短を云ふのでは無い。いくら短い文でもその内に主語、述語が二つ以上あるもの、換言すれば clause を含む文は複雑な文である。I was sick when he visited me. は I と he とを主語とする二文の合したもので Complex sentence である。それを I was sick at the time of his visit. とすれば文の長さは却て長いけれども subject は I 一つであつて此れは simple sentence なのである。

全世界を征服したので無くては彼は満足しなかつたであらう。

- a. He would not have been satisfied unless he had conquered the whole world.
- b. Nothing but the conquest of the whole world would not have satisfied him.

彼は貧乏ではあつたが正直で通した。

- a. Poor as he was, he was always honest.
 - b. In spite of his poverty, he kept honest.
- 君の非難するのは充分道理のあること、思ひます。
- a. I admit that your accusation is well-founded.
 - b. I admit the justice of your accusation.

彼は進んで私と提携して仕事をし度いと云つた。

- a. He said that he was willing to cooperate with me.
- b. He expressed his willingness to cooperate with me.

彼は厚面皮(アツカマ)しくも見ず知らずの人に金を貸して呉れと云つた。

- a. He was so impertinent that he asked a perfect stranger for a loan (of money).
- b. He had the impertinence to ask a perfect stranger for a loan.

例文 A.

地球の圓形なることは、西又は東に向つて真直に進めば、再び出發點に歸り來る事に依りて證明さる。

【譯し方】 此の文には明かに noun clause になるものが二つある。「地球の圓形なること」及び「真直に進めば再び出發點に歸り來る事」此れである。それで前者が後者の事實によつて證明さる (is proved by) で結んであるのだ、さて此の二つの句を名詞として取扱かへる様に締めくゝるには前申した通り the fact that..... が一番手つ取り早い、併しながらそれを二つも一文中に用ひて The fact that.....is proved by the fact that..... としたではあんまり氣か利か無過ぎる。第一の句の「地球の圓形なること」の如き簡單なものは そうしなくても容易に名詞化され得る、

The fact that the earth is round = The roundness of the earth.

これは誰しも氣附く事であらう。猶「圓形」には *rotundity* なる名詞がある、此れを使ふのもよろしい。

それで第二の句に至つては中々こみ入つて長い。こう云ふものに the fact that を冠せるのは最もその所を得たものと思ふ、「眞直に進む」は “to go straight on to~” 又は “to proceed straight towards~” の如きで譯すとして「再び出發點に歸る」は “He will come back to the starting point.” でもすむが、こう云ふ處では「進んで行つて見ると 遂には出發點に歸つた事を發見する」と云つた調子の云ひ方が英語流で、He will finally find himself home where he first started. などが望ましい譯文である。

【譯】 The *rotundity* of the earth may be proved by the fact that if a man proceeds straight toward the east or west, he will finally find himself home where he first left.

例文 B.

約束の時日を違ふは時間の賊なり。殊に集會の時間は正しく守らざる可からず。一人の後ろゝ爲に多人數をして貴重の時間を空費せしむればなり。

【譯し方】 まづ「約束の時日を違ふは時間の賊だ」の一文の始末を考へて見る。主語に据うべき「約束の時日を違ふ事」は簡短に Infinitive を用ひて表される、“to fail in one's appointment.” 或は “not to appear by the appointed time” と云ふ様に。「時間の賊」もやはり “to rob others of their time.” だが rob を名詞にして “robbery of time” とする事が出来る。それで文典の教へる所に従つて Infinitive を主語とする時は It を以て代

表せしめる、と云ふ定めに従つて

It is robbery of time to fail in one's appointment.

とする事になるが、「……するは(取りも直さず)……する(やうなものだ)」と云ふ強い云ひ方は却て Infinitive の形を頭へ出して手つとり早く云ふがよい、例へば *To see is to believe.* (見るは即信するなり) に見る如く。だから下の様になる。

Not to appear by the appointed time is simply the robbery of time.

續いて又「集會の時間を正しく守るべし」とあるが、此處で又 appointment を使ふのも重なつて面白く無いから今度は *punctual* といふ言葉を用ふるがよい。そうすると

Especially one must be punctual about the hour of meeting.

となるが二人會ふのも meeting だから此處の集會(大勢の)に對しては *gathering* を用ひた方が better であらう。

次に「一人の後ろゝ爲めに云々」に於ては隠れたる noun clause あるを知らざる可らず、「多人數をして時を空費せしむる」は何がせしむるのか、即「一人の後ろゝ事」が斯くせしむるのである、それで此れをどう名詞にして表はすかを考へるとまづ *to come late* を一語にした late-coming がある、本式の語には *procrastination* がある、此れは *punctuality* の正反對だ。

「貴重の時間」は “valuable time.” 「空費」は “to waste” で全部の譯は下の如くなる。

【譯】 To fail in one's appointment is the robbery of time. Especially one must be punctual about the hour of gathering, since one person's procrastination makes many people waste their valuable time.

【別譯】 Not to keep the appointed hour is to rob others of their time, especially one must be punctual to the minute in a gathering. If one person is late, it will cause the waste of many person's valuable time.

問題

22. 日濠間の貿易が近年長足の進歩をなしつつあることは、誠に喜ぶべきことです。
23. 金を持つて居るものは金を用ふることを知らず、金を用ふることを知つて居る者は金を持つて居らぬと云ふ事は實に惜しい事だ。
24. 近來人殺しとか強盜とか云ふ犯罪が多くなつたのは生活難と奢侈の悪風があらゆる階級にしみ渡つて贅澤をする金に窮する者が多いからである。
(「人殺や強盜の cases の増加は high cost of living や luxurious ways of living の習慣が行き渡つて居る事、即“prevalence”に基づく」と云ふ様に譯して見よ。)
25. 待ち設けて居たとはまるで違つた結果を生じた。
(「私の期待が全く裏切られた」とする、「裏切る」は betray なり。)

Continuative Use of Relatives

英文を読む際に吾々は“——, which——”; “——, when”と云ふ様に relative pronoun や relative adverb 等がコンマで句切つて置かれてあるを往々見る、そして此れは and it…… とか and then…… とかあると同様に續けて(即、前へ還らずに)譯して行く場合であると

教へられて居る。例へば

I tried the method, which proved highly effective.

私はその方法を試みたが、それは大變有効だつた。

此れは無論「私は非常に有効だつた所の方法を試みた」と譯しては當らぬ事は一見して明かである。Relatives のかゝる用法を文典ではその Continuative use (繼續的用法) と云つて居る。さて此れが英文を書く上に於て非常に役に立つので、或事に従て起つて來た事柄の叙述には誠に都合がよく、所謂つかず離れずの關係を保たしめる。たとへば此處にこう云ふ文があつたとする。

私はどりや一と眠りと喜んで着物を更へ様として居た、とその時女中が御客様がと云つて來た。

此れを此處で云ふ Continuative の when を使つて譯すと

I was nothing loath for a good sleep, and was just undressing, when the maid-servant came in and said that there was a visitor.

となる。此文を見て或はこう云ふ質問が起るかも知れぬ。「此の英文は when の場所を代へて when I wasjust undressing, the maid-servant came in etc. 或は The maid-servant came in..... when I was..... undressing, としたのと何所が異ふのか」と。それは成る程述べた事實は違はぬ。併し文の心持が違ふ。即原文で表はされて居る「.....として居た、とその時丁度

云々」の氣分がそれでは表はし得ぬのだ。詳しく云へば「私はどりや一と眠りと喜んで仕度をして居た」と云ふ事は一箇の獨立文たる丈けの價値がある。此れを when で引つくゝつて、從屬文にしたのではあまり位置が軽いものになつてしまふ。要するに原文は二つの重要な叙述であつて、而かもその二つが極く密接な關係があるのである。

斯く Relatives が從屬句を結ぶと云ふよりは寧ろ二つの關係ある文のつなぎとして用ひらるゝ場合を少し練習して見やうと思ふ。

例文 A.

一寸見ると問題はわけなく出来ると思つた、處がやつて見ると頗る六ヶ敷かつた。

【譯し方】此の問題は明かに二つの部分より成る、そして「處が」と云ふつなぎで並べてある。此れはまあ“but”が使ひ度い所である、がその代りに which however,…… と云ふ風にすることが出来る。

「一寸見ると」は“at first sight”で、「わけなく出来ると思つた」は簡単に“seemed easy”とすればよい、“I thought I could do the problem easily”などはちと拙い。

「やつて見ると」は“when I tried”だがそれを“on trial”とする。それで此處の「やつて見ると六ヶ敷かつた」が別項 complement の所で説いた prove や find の應用さるべき好適例なるを見られよ。

□【譯】 At first sight, the problem seemed easy enough,

which however, proved very difficult on trial.

例文 B.

私は彼の人から書物を二三冊借りて読みました、がその中に面白い物語がありました。

【譯し方】「誰に本を借りる」は“to borrow some books of one”である。それで此の文をそのまま譯すと

I borrowed a few books of him and read them and I found some very interesting stories in them.

と云ふ事になるが、その内の and を少し何とか工夫するがよいのだ。

【譯】 I borrowed a few books of him, which I read, and found some interesting stories in them.

【別譯】 I borrowed a few books of him, which I found to contain some very interesting stories.

I borrowed of him a few books, in which were found some very interesting stories.

例文 C.

彼は夜更しをして時間の取り返しをつけ様と試みたがあまり強健な身體で無いのでその努力も失敗に終つた。

【譯し方】「夜更しする」は“to sit up late”だがそれには「勉強なり仕事なりをする」ためなのだから“sit up late at (or over) work”とするがよい。

「時間の取返しをする」は“to make up for the lost time”

と云ふ、「失はれた時間」の意なるを以て lost の一語を加へる。

「強健な身體」は“strong constitution”などあるべし、此れには“of”を附けて“*He was not (a man) of strong constitution*”となるのである。

「努力」は“effort”で「失敗に終る」は“to end in failure”或は唯“to fail”でもよい。

それで全文を二つに切つて片附けるとこうなる。

He tried to make up for the lost time by sitting up late at work. But, as he was not of strong constitution, this effort failed (or, he failed in this effort).

此れを一文に結んだのが次の譯文である。

【譯】 *He tried to make up for the lost time by sitting up late over his work; in which effort, however, not being of strong constitution, he failed.*

【附】 かく *which effort* の如く relative pronoun に名詞を附けてそれを形容詞の様に働かす事を覚えられよ、且つ又 *in which effort* の如く preposition をそれに冠する場合も考へて置くべし、此れは“*he failed in the effort*”なるを以て“*in which effort he failed*”となるなり、さはせずして“*which effort failed*”とするも可なり、但しその時は not being of strong constitution をそのまま用ふ可からず、何となれば文の主語が *He failed* でなく *the effort failed* であるから not being of strong constitution の sense subject (即 He) と共通にならぬ、依つて

.....Which effort, as he was not a man of strong constitution, ended in failure.

と云つた様に變化する事になる。(Participle の sense-subject の項参照)。

例文 D.

何處を探したら彼に會へると云ふあても無いが一刻も猶豫すべきで無い。それで私はせかせかと家を出て最初の角を曲つた、と誰あらう探す本人にハタと行會つた。

【譯し方】「あてがある」の「あて」は clue (いとぐち) など云ふ語もあるが此處では“to have (no) idea”などがよい、「何處を探したら會へるか」も“where to look for him”と手軽く片附けられる、こんな所で *If I searched for him.* なんかとしたら、とても困つた事になつてしまふ、よく文意のある所を考へて譯すがよろしい、直譯は最も險呑なり。

「一刻も豫猶すべからず」は“not a moment was to be lost.”又は“*I had no time to lose*”でよろしい。

「せかせかと家を出る」は急いで (“in a hurry”) 家を出たので、「誰あらう云々」には英語で次の様なきまつた文句がある。

Whom should I come upon but the very man I was seeking for? 此れは「私の求めて居た人で無くて誰れに會ふものか」と云つた様な文章で、その實「意外にも.....に會つた」事になる idiomatic expression である。

“when” の continuative use の應用に就ては一目瞭然のことゝ信ずる。

【譯】 *I had no idea where to look for him and yet no time was to be lost. Thus, I left my house in a hurry and turned the first corner, when, whom should I come across but the very man I was after?*

Handwritten note: 此の文は「意外にも.....に會つた」事になる idiomatic expression である。

問題

26. 日蓮は馬にのせられて鎌倉中を引き廻された上海濱の刑場へ引据えられ將に首刎ねられむとした時、その時、一天にはかにかき曇つて雷はためき物凄天候となつた。

(「引き廻す」は“to walk”を他動詞に用ひてよし。「かき曇る」は“to become overcast”なり。)

27. 彼は暗夜に乗じて敵の包圍を突破せんとしたが、その試みは失敗に終つた。

(「暗夜に乗ずる」は“under cover of dark night”で、「がその試みは」“which attempt……”として書きつけて行く。)

Relative Pronoun の Case

例の「親の死んだ子を孤兒と云ふ」式の文の譯し方である。かゝるものに“whose”(無生物に對しては“of which”)を用ひる事を心得て居らぬと一寸困る事がある。原文が“A child (its parents are dead) is called an orphan.”と云ふ事であり、従つてそれを一つの文に纏めると A child whose parents are dead, is called an orphan. となる。その順序が頭の中を容易に通過する様にして置き度い、尤も此の whose は或る程度までは避けられる。例ば上の原文にしても

A child who has lost its parents, is called an orphan.

と譯すことも出来るが、場合に依つてはどうしても此の所有格の形を使ふのが便利な事がある。of which でも同様例へば次の様な原文があるとする。

此處からあの門の見える家が御尋ねの家です。

「その家が御尋ねの家だ」と云ふ事と「その門が此處から見える」と云ふ事との結合で「その門」なるものがその家に結ぶのだから

The house, the gate of which you see from here, is the one you want.

となるのである、簡単な事だが吾々には誠に厄介な氣がする、少し練習をして見やう。

例文 A.

書物とは思想や吾人の研究の結果を記して後世に傳へる方法の發明である。

【譯し方】先づ「書物とは一つの發明である」“a book is an invention”と斷じて、さてその發明に依つて吾々の思想が記され傳へられるのだから、前の invention に“by means of which”とからんで行く。それで「後世に傳へる」は“to hand down to our posterity (or succeeding generation.”だから次の様な譯になる。

【譯】The book is an invention, by means of which our thoughts and the results of our labour are recorded and handed down to our posterity.

【附】原文の通りに譯して…… is an invention of a method by which……とする事も出来る。

例文 B.

眞の禮儀は他人の時間を徒費せぬにある。時の價値

は極度に尊重すべきものなればなり。

【譯し方】「眞の禮儀」は “true courtesy” で、「……にある」は “to lie (or consist) in……” とする。「徒費せぬ事」は “not wasting” と gerund に not を附けてもよし或は意譯して “the regard for others' time” とするもよろしい。次で「時の價值は」と文が起してあるので此れを前の time に結んで the value of which と續け得るのだ。

「極度に尊重すべし」「いくら尊重しても猶且つ足らず」の如き極度の云ひ方には “cannot……too” の構文がよく用ひられる、例へば

吾々は健康にいくら注意してもし切れ無い。

We cannot be too careful of our health.

Two 【譯】 True courtesy lies in the regard for others' time, the value of which can not be too highly esteemed.

【附】以上の事に連關して考へて置くべきは preposition+relative pronoun (in which とか with whom とか云つた様な) の用ひ方に習熟すべしと云ふ事である。次の譯し方を参考せられよ。

獨逸國民が國の爲めに戦つた精神を最もよく了解し得るものは日本人あるのみだ。

【譯し方】「獨逸國民がある精神を以て戦ふた、その精神を了解するものは日本人だ」と云ふのだから、先づ「日本人のみがその精神を了解し得る」と書き出して

Only Japanese can understand the spirit.

さてその spirit は如何なるものかと云ふと “……with which the Germans fought for their country.” となるのだ。

【譯】 It is only the Japanese that can understand

the spirit with which the Germans fought for their fatherland.

例文 C.

青年が始めて郷里を出る時と同様の決心を以て勉強を續けるならば大に成功するに相違ない。

【譯し方】此の文の力點は「決心」の一語にまつはる附屬物である。「もし青年が決心を以て勉強を續けるならば」が第一着手でそれは

If a youth will prosecute his study with a resolution.

の如きで表される。「青年の意氣を假定するのだから will を必要とする」。

さてその「決心」たるやどんな決心かと云ふと、「彼が始めて郷里を出る時の決心と同じ」なのだ、それは英語にすれば「ある決心を以て郷里を出る、その決心」であるから

the resolution with which he left his native place

と云ふ事になる、此の決心を上「勉強を續ける」へ結ぶと

If a youth will pursue his studies with the same resolution with which he left his native place,

となる、説明するとくだ々しくなるが、も一度原文と照し合せて見られたら with which の使ひ方が成る程と首肯せられるであらう。

さてそれにつゞく本文の「彼は成功するに違ひ無い」には must の第二用法を應用して “he must succeed” とすればよい、かゝる際思ひ切つて must を使へる様に心掛けて置くべし。

【譯】 If a youth will pursue his studies with the same resolution with which he left his native place, he

must make a great success.

問題

28. 先達御話致しました僕の友人立花君を連れて明日午後三時と四時との間に御同致します。

〔御話致しました友人〕は「友人、その人に就て君に御話した」とあるべきものなり。〕

Connectives に就て

思想が複雑になるとその発表形式も自然複雑になる、従つて一つの事柄を述べた一箇の單文が他の單文と種々の連鎖を以て結びつく、それからそれへと、これが繰り返されて遂には節の幾つもある長文が出来上る。於之、それ等の節々をつなぎ合せる連鎖の語 (connectives) が必要になる、前に説いた Relative Pronoun の如きも此の connectives の一つである。然るに connectives には種類があり、各々連結の仕方に特徴がある、その特種な性質を無視して、たゞやたらに節と節との結びに置いてもそれはたゞ置いたと云ふに過ぎずして全文に血が通はぬ破目に陥る、例ば

I see no reason that I should keep silence. (私は黙つて居なければならぬ理由は無いと思ふ)。
と云ふ文は死んで居るので、それは that と云ふ connective が此處では生きて動いて居らぬからである。何

となれば「I should keep silence に對する理由」換言すれば「何故私が黙つて居らねばならぬか」といふ理由は the reason why I should keep silence であるから。それが the reason that I should keep silence と云へば、例へば「私は沈黙を守らねばならぬと云ふ理由があつたので返事は出さなかつた」とても云つた場合の「……と云ふ理由」を表すことになる。

こう云つた様なわけで connectives の適當な使用と云ふ事は一文の死活に關はる大事である、依つて以下吾々が特に注意すべき connectives に就て少々研究して見たいと思ふのである。

I. That.

まづ “that” には大體三つの役目がある。1. 代名詞及形容詞として「其のもの；それ」の意。2. 關係代名詞として「……なる所の……」に當るもの。3. 接續詞として「……と云ふ」に當るもの。これである。

上の第二、第三の that が connective としての役目をつとめる that なので、そのうち第二の relative pronoun としてのそれは which と殆んど變りの無いものである。the book that I bought yesterday は the book which I bought yesterday と同じ事である。

ところが第三の that の用法に至つては全く that 獨特のものであつて、決して which の代用を許さぬ。He said that he was ill. と云ふべき所を He said which he was ill. とはマサカ誰でも云ひはすまい、然

るにこゝに一つ用心すべき事は、此の接續詞の *that* が antecedent を取る事がある、それは誠に relative pronoun に酷似して居る、例ば

The fact that he was ill did not occur to me. (彼が病氣だと云ふ事に私は気がつかなくつた)。

に於て *the fact* は *that* の antecedent である「事實、それは、彼が病氣だと云ふ事實」なので丁度 *the book which I bought yesterday* (書物、それは、私が昨日買った書物) と云ふのと如何にも似た所がある、それなら此の *that* は *which* と同一物かと云ふと大違ひ！元來 relative pronoun はその antecedent を受けて次につゞく文の主語になるか目的になるか何か名詞の役目をするものである *the book which I bought yesterday* に於て *which* は *I bought* の object になつて居るのだ、之に反して *the fact that.....* の *that* は「.....と云ふ事實」と云ふ一つの同格的説明を導いて居るのである、もしそれを

The fact which he was ill.....

としたらば「事實それを、彼が病氣である」「事實、それが、彼は病氣である」と云つた様な珍文を作り上げる事になる。

猶此の “*the fact that*” は或る事柄を纏めて一つの名詞とするに役立つもので、名詞で無くては結ぶことの出来ぬ connective である所の前置詞と或る叙述との結合に屢々有用である、例へば

彼等は地球が動くと言ふ事に思ひ到らなかつた。は [They never thought of]+[the earth moves] の連結として *the earth moves* を一つに纏めて「.....と云ふ事」として始めて、of とつながる事が出来るので

They never thought of the fact that the earth moves.

と云ふ事になるのである、之に就ては猶後に詳説する。

例文 A.

英語を話すことも出来なくて譯讀は出来ると云ふ考へは大なる間違であらう、單語や句は談話や文章の中に幾度も使つて見て始めて其意義及び使用の範圍が了解せらるゝものである。

【譯し方】「大なる間違であらう」のあらうは未來で無い事無論で、であると斷言するのを柔けたものである、別に譯文上にそれを表す必要は無い、強いてその意を出さうとならば *I think that.....* とか *seems to be* とかを用ひるのだが、此處などは「大なる誤りだ」と却て強く云ひたい所なのでむしろ “..... is greatly mistaken” と斷言した方がよい。それで

「.....と云ふ考へ」は “*the idea that.....*” が適當。

「英語を話す事が出来なくて譯讀は出来る」の「譯讀は *to read and translate* が直譯だが、*translate* は蛇足である、たゞ *read* でよろしい、「出来なくて」は “*without being able to speak.....*” である、此の *being able to* の形に注意、もし

Without one cannot speak it.

としたらば文脈が續かぬ事になる、それに就ては後に説く

Preposition と Conjunction の項を参照すべし。

次の原文を見ると先づ「単語や句は……」と出て居る、がそれは特に文頭に出したまでであつて、眞意は次の如きものである。

吾人は単語や句の意義用途を、始めて了解する、談話や文章の中に幾度も使つて見て後に。

それで「……して始めて……する」は普通に云へば“…… only when……”である、「使用の範圍」は“the extent of their uses”であらうが the extent of は略して差支へない。すると大體こうなる。

One can fully understand the meanings and uses of words and phrases only when one has used them often (or they have often been used) in speaking and writing.

原文中「文章」とあるに sentence を用ひる事は出来無い、writings か又は「書く事」の意で writing である。猶これを次の様に譯出する事が出来やう。

One can never master the meanings and uses of words and phrases until one has used them in speaking and writing many times.

これは「……したまでは……せぬ」「……して始めて……する」意の not……until の應用である。

最後に、此の「単語や句は」と取り立て、文頭に置いた心持を表すに英文では As for……, As to……の如き冒頭の句がある、それを用ひれば猶よろしい。

【譯】 The idea that one can read English without being able to speak it is greatly mistaken. As to words and phrases, one can never master their meanings

phrase

and uses until one has often used them in conversation and writing.

例文 B.

外國語を研究する日本の學生の共通の缺點は、個々の言葉に餘り重きを置き過ぎる爲に、却て文章全體としての意味を捕へ得ない傾がある事です。殊に會話の場合に於て一層著しく此傾向が見えます。

【譯し方】 前文の主體は「共通の缺點は……傾がある事だ」である、それでその subject をなす部分は「外國語を研究する學生の共通の缺點は」でその譯が“The common defect among the students of a foreign language”又は“The defect (which) the students have in common”である、common は「共通の」の意。

「……する傾がある」は“to be apt or liable to ~”であるから、それを上に結んで“The common defect is that they are liable to ~”となる。

「意味を捕へ得ない」は“cannot grasp the meaning”であるが、さてこれをどういふ風に they are liable to に結んで行くべきかが考へ所である。どうしても liable to do と云ふ動詞でそれを表さねばならぬ、それで“they are liable to fail to grasp the idea……”と導いて行く。

「文章全體としての意味」は“the meaning of a sentence as a whole”とするか“the idea conveyed by a sentence as a whole”とする。

「餘り重きを置き過ぎる」“to attach too much importance

to ~," "to pay too much attention to ~" 等、それで「.....
しすぎる爲に」とつゞくからそれを

as they attach too much importance to each particular
word.

となるわけだが、その代りに scrupulousness 或は scrupulosity
(小心翼翼、ビクビクする事)の如き名詞を用ひると in their
scrupulosity about the sense of ~ (「.....のあまりに」)の如
き構文になる。

「此の傾向」は this liability or tendency

「著しく見える」は「著しい」(is remarkable)とだけで可なり。

【譯】 The common defect among the students of a
foreign language is that they are apt to fail to grasp
the whole idea conveyed by a sentence in their
scrupulousness about the sense of each particular word
used in it. This liability is specially remarkable in
conversation.

II. What.

前項には「.....と云ふ(事)」の句を導く "that"
に就て説いた、今度は「.....した事、.....したも
の」に相當する句に就て考へやう、まづ次の二文を比
べて見られよ

a. I told him *that* I saw him.

b. I told him *what* I saw of him.

a 文は單なる事實を述べたに過ぎぬもので I said "I
saw him." を書き更へたまでである。b 文に至つては

「私が彼に就て觀た所の事柄」とあるものでその内容は
述べられて居らぬ。

what といふ connective は connective にして且つ
antecedent を兼ねるもので、所謂「.....する所のも
の」に當る、そしてその antecedent を明かに表しにく
い場合によく用ひられる、邦語でも「僕がこれから云
ふ事をよく聞け」など云ふ、それは「これから云ふ所の
言葉」だが、さりとして Listen to the words which I
am going to say. も氣が利かぬ、こんな所に what を
使つて

Listen to *what* I am going to tell you.

と處理する事が出来るのである。

例 文

我が心に思つた事を筆で書いたのが文である。心に
思ふ事を口で云ふのはさほどむづかしくは無からう、
口で言ふ通りを其まゝ筆で書いても文になるのである。

【譯し方】 第一文「我が心に.....」の譯出に稍苦心を要す、
原文の表面で見ると「我が心に思つた事」(what is conceived in
one's mind), 及び「筆で書いたの」(what is put down with a
pen) の二句が what.....の材料になつて居る、がこう幾つも
what.....が出て來たのぢや纏まりやうが無い、それでこれを
次の様に處分する、

What is conceived in one's mind, when (it is) put down
with a pen, makes a composition.

こゝで「文」は sentence では面白く無い、口で云ふのでも

sentence だから、a written sentence (or composition) ならば可。

「心に思ふ事を口で云ふ」は “to speak out what is in one's mind or what one thinks” である。

最後に「口で言ふ通りを云々」に至つては直譯を避けて意譯を試むべきである。殊に「筆で書いても」の「ても」の如きを though の如きでは表せ無い、須く

口で云ふそのまゝを書け、すれば、そこに汝は文を得るといつた調子の英語にすべきである。

【譯】 What is conceived in one's mind, when put down with a pen, makes a composition. It would not be so difficult to speak out what is in one's mind. Now write down just as you speak, and you have a composition.

III. Dependent Interrogatives の連結。

「……と云ふた又は告げた」等は極つて “say or tell that……” でつながれて行く、これはあまり普通のことでありすぎる結果、所謂間接話法 (Indirect Narration) に於ける connective は何でもかんでも that でよい様に思ひ誤られがちである、従つて、

I asked him, “Are you ready?”

を書き更える際にも

I asked him that he was ready.

とやる、が that はかゝる從屬的疑問句 (dependent interrogative) を結ぶ力は無い、此の「……なるやと

問ふ」には if, whether 等が必ず用ひらるべきであつて、

I asked him if he was ready.

とせねばならぬ筈である。これはやはり一種の慣れで、此の種の譯文に親しんで置くと自然こんな that の誤用はせぬ様になるのである。

猶、此處で序に注意して置き度いことは命令や依頼を間接の形で本文に從屬せしめる場合である。依頼にしても懇願にしても要するに命令と形式は變らない、Come here. が Please come here. になつても又 Be so good as to come here. になつても文の構造から見れば命令形である。で、此れ等のものが「……せよと命じた」「……して呉れよと乞ふた」の如く connect する際の connective はどんなものか、と云ふとそれには別に connective は無いので、本文の predicate verb たる ask, order, tell, command, beg. 等に “to do” の infinitive (不定形) を添へる丈けである。例へば

彼は時を移さず其の件の處置をして呉れと依頼して來た。

He asked me to lose no time ~~in attending~~ to the matter.

例文 A.

宿屋の亭主は僕に滞在ですかと問ふたので私は一週間程居たいと思ふが確とした事は云へぬと答へた。

【譯し方】「宿屋の亭主」は the proprietor of the hotel 又は the landlord.

「居たいと思ふ」 should like to stay.

「確とした事を云ふ」 to say for certain.

【譯】 The landlord asked me if I was going to stay long, to which I replied that I should like to stay for a week or so but I could not say for certain.

例文 B.

明日は是非仕事に取りかゝれと大工に云つて呉れ。彼が来なければ誰か外のを頼むことにするから。

【譯し方】「仕事に取りかゝる」は “to begin or set about the work”, 「是非」は “without fail” の如きがよい。

「彼が来なければ」 “in case he does not come.”

「誰か外のを頼む」は “to engage some one else”, 「頼む」つたつて此處では ask や request は避くべし。

【譯】 Tell the carpenter to set about the work to-morrow without fail. In case he does not come I shall engage some one else.

例文 C.

今日午後四時の東京着特急で行くから停車場に迎へに来て呉れと名古屋の友人から電報が来た。

【譯し方】「……して呉れと電報が来る」は

I received a telegram from a friend in Nagoya requesting.....

A friend in Nagoya wired to me asking..... の如き —ing の形でつなぐが常例である。

「今日午後四時の東京着特急で行く」は “to go by the express that arrives at Tokyo at 4 p. m.” と直譯するも一法だが “he shall arrive at Tokyo by express at 4 p. m.” としてもよい。

【譯】 A friend in Nagoya has wired to me asking to meet him at the station as he would go by the express arriving at Tokyo at 4 p. m. to-day.

問題

29. 或る懶惰の英國人が三年許り巴里に滞在して有名な教授に就きフランス語の稽古をして居ました。

其の人が倫敦に歸る時先生の宅に暇乞ひに行つて何か倫敦に御用はありませんかと尋ねました。

そうしたら其の先生は別に御頼みはありませんがあなたが私からフランス語を學ばれたことは誰にも話さないで下さいと申されました。

30. 僕は將來商人として身を立たいと思つてゐる。其の動機は近年のことで、初は學問が好きだつたから學校へ入れて呉れと母に願つたが、學費がないためそれは斷念して丁稚からやることにした。

31. 私が彼に仕事を引受けて呉れるかどうかと尋ねたら彼は喜んで引受けると申しました。

IV. “How”

疑問詞 (what, how, where 等)で始まる問の文を Indirect narration にして附屬句にするにはその疑問詞

それ自身が connective の役目をする、He asked me, "Where are you going?" が He asked me where I was going. となるが如くに。此のうちで特に注意して置き度いものは how の働きである、下文は how の用法を示すに實に好適な一例である。

When we studied the lives of ancient peoples, we find **how** like them we are in our desire to trade with foreign countries, **how much** in common our religion has with theirs, **how** our art has been developed from their beginnings; and in reading their literature we find **that** some of the stories with which we are most familiar are the tales and fables which were told long ago, in far-off times.

上文のうち how が三ヶ所に用ひられて居る。第一及第二の *how like them etc.*, *how much in common etc.* は

We are like them (or=ancient peoples) in our desire to trade with foreign countries. (吾等は他國と貿易する事を希望する點に於て彼等と似て居る)。

Our religion has very much in common with theirs (=their religion). (吾等の宗教は彼等の宗教と非常に共通な點がある)。

と云つた様な思想を When we studied the lives of ancient peoples, we find.....に結んだのである。それなら we find thatとしてもよさそうなものだ

が、その「如何にもよく似て居る」「實に共通の點が多い」と云ふ心持を移して本文へ結ぶところに此の how の役目があるのです、だから

私は彼が父を失つてさぞ悲しんで居るだらうと思つた。

の如きを英譯するとして、I thought that he would be very sad to have lost his father.ではやゝ物足らぬので

I thought *how sad* he would be to have lost his father.

と譯出し度いのである。

次に、第三の how.

(we find) how our art has been developed from their beginnings.

へ移つて、此處 how は所謂「ドウ云ふ風にして吾等の藝術が發達したか」と云つた心を傳へるものである。それは how の代りにたゞの that を置き換へて讀んで見るとその働き方が明瞭になる。もし

We find *that* our art has been developed from their beginnings.

だと、それは只單に fact を述べるに過ぎぬ、「吾等の藝術が彼等から發した事を知る」である、その that はさしづめ次の in reading their literature we find *that*の一文で代表されて居る。要するに、how は「どんな工合に.....したか、どうして.....したかと云ふ事件の徑路」と云つた様な意味を傳へる con-

nective である。

例文 A.

兎が龜と競走して負けた話は日本の子供に最も耳慣れたものである。

【譯し方】「……した話」は “*the story how……*” である、*the fact that……* で *the story how……* だと覚えて置くがよろしい。そこが即「單なる事實の叙述」と「事柄の説明」との差異である。

「兎が龜に負けた」は “*the hare was beat by the tortoise*” である。

【譯】 *The story how a hare ran a race with a tortoise and was beat by the latter is most familiar to Japanese children.*

例文 B.

朝鮮がどの位開けて居るかと言ふ事を知つてゐる内地の日本人は甚だ少い。

【譯し方】「内地の日本人」は “*Japanese at home*” が一番簡單である、「内地」の譯は “*Japan proper*” である。

「開けて居る」は *to be civilized*”

「……は甚だ少い」は本書 “**There are**” の項に説いた通り *few Japanese* を *subject* に置けばよろしい。

【譯】 *Few Japanese at home know how civilized Korea is at present.*

V. ^前Preposition と ^後Conjunction.

Conjunction は words, phrases, clauses 様々なるものを結ぶ connective である、Preposition は之に反して noun に限つてその後へ従へる、換言すれば preposition の次には名詞を置かなければ文脈が通はぬ。最も簡単な例を取つて見ると

He works from morning till night.

と云ふ、こゝで *from* も *till* も preposition であつて、その次に *morning, night* と云ふ名詞が置かれて居る、[かゝる名詞を preposition の object と云ふ]。今これを次の様に云ひ更へて見る。

He works from morning till the sun sets in the west.

此の文も別に不都合な點は無い、「日が西に入る迄」と云つた此の *till* は conjunction であつて “*the sun sets in the west*” と云ふ clause を結ぶ役をして居るのだ。ところが又次の様にして見る、

He works from the sun rises till sunset.

これは誤文である、*from the sun rises* が悪い、何故ならば *from* は preposition であるが conjunction では無い、だから *till* の様に *the sun rises* と云ふ clause を結ぶ力が無い、必ず noun を置かねばならぬ、で次の様に訂正する、

He works from sunrise till sunset.

此の前置詞は必ず名詞を *object* とすると云ふ事は
 厳守さるべき事であつてこれが吾々が英文を書く場合
 可成り頭痛の種になる。例へば最も卑近な例として時
 の制限を表す句に

「……まで」と「……までに」

とがある。「……まで」は成る事の繼續状態を示すも
 ので「私は次の日曜まで此處に居る」の如きもので、一
 方「……までに」は或る事の完成を示す、例へば「私
 は月曜までにこれを書き上げる」の如きがそれである。
 で、前者の「……まで」は“*till*”が之を表し、後者
 の「……までに」は“*by*”が之を表す、その用途は
 チャンと區別がある、*I shall stay here till next Sun-*
day. I shall come back by next Sunday. の區別は常
 に教室で繰返さるゝ所であらう。ところが此處に厄介
 な事がある、それは“*till*”は前申した通り *conjunction*
 でもあり又 *preposition* でもあるのだから、その後
 は名詞でも又文句でも何でも置いて連結する事が出来
 るが“*by*”は *preposition* 専門である、だから

君が洋行から歸る迄には私は卒業して居ます。

を譯して

I shall be graduated by you come home from
abroad.

としたのでは文のつゞきが全からぬ、ではどうするか
 と云ふに *by the time when you come home.* その
when は略して …………… *by the time you come home*

とするのである。文句を従へる「までに」はかくして譯
 出されるのである。

猶此の *preposition* の次には名詞を置くと云ふ事は、
 動詞+前置詞より或る所の所謂 *prepositional verb* を用
 ひる際に最も主要な條件をなすものである、まづ、此の
 前置詞の目的としてその次に置かるべき名詞なるもの
 は普通の名詞か、さもなくば *gerund* である、と云ふ事
 が基本條件である、〔*what, how* 等で始まる *noun clause*
 は別として〕。それ故 *I never heard of he died.* は
 ダメで *I never heard of his death.* で無ければならぬ。
 又 *I was not aware of he was there.* は *I was not*
aware of his presence. とせねばならぬ、ところが *death*
 とか *presence* とか云つた様な固まつた名詞の無い場合
 がある。前の例文に出た *One cannot read English*
without+one can speak it. の接合の如きがそれで、
 こんな際には *without being able to speak it.* と云つた
 様な“-ing”の形でつないで行かねばならぬのである。

例文 A.

彼が急病にかゝつたので家族のものが急に醫師を迎
 へにやつたが残念なことには醫師の到着した時には最
 早絶命して居た。

【譯し方】「急病にかゝる」は“*to fall suddenly ill*” 又は
 “*to be attacked by a sudden illness.*”

「醫師を迎へにやる」は“*to send for a doctor*” が定文句、

「急に」は「急いで」の意で “in haste” がよろしい。

「残念な事には」は “it was a pity that.....” など。

「醫師の到着した時には」は本項所記の “by the time the doctor arrived” とすべき所で、それに依つて「時には最早」の意が表されるのだ。

「絶命して居た」、「絶命する」は簡単に云へば to die であるが “to breathe one's last” などよく用ひられる、そして「.....して居た」は past perfect の形 置くがよろしい、次の two expressions を比較せよ。

He was dead = He had breathed his last.

【譯】 When he was seized with sudden illness the family sent for a doctor in haste. But, sad to say, by the time the doctor arrived the patient had breathed his last.

例文 B.

人と云ふ字は二本の柱から成り、短い方が長い方を支へて居る。併し短い方も亦長い方の棒に凭りかゝられて居る爲に倒れぬのであるから、短い方は他を支へてゐるが如くて、實は却つて、支へられてゐる。つまり両者は支へつ、支へられつして、人といふ字を構成してゐる。

【譯し方】 「人と云ふ字」の「字」は character である、word は「言葉」で口で云つても word である、又 letter は a. b. c の如き一つづつの文字で、漢字の如きは character なり、それで「人といふ字」は “The Chinese character for man” でなければ

ならぬ。

「二本の棒」の「棒」は strokes である、stick などはダメ。stroke とは strike から出た名詞で「一と筆」にあたる。「.....からなる」は例の “to consist of ~” が動かぬところ。

「短い方が長い方を支へて居る」は例の「.....から成り」へ-ing の形で續けて次の様にする。

.....consists of two strokes, the shorter one supporting the longer.

次は「併し」から「.....爲に倒れぬのである」まで、この「短い方、長い方」は the former, the latter. ですまることが出来る、それで「短い方が倒れぬ——長い方に凭りかゝられて居る事に依つて」といつた構文でそれを譯出するが一番うまく行きそうである。そうすると the former is kept from falling by に並ぶものが it is leaned against by the latter である事を考へて is leaned against を gerund として

.....by being leaned against by the latter.

と並んで行く、次に

「短い方(今度は “it” で表せばよい)は他を支へて居るが如くて、實は却て支へられて居る」は英譯すると「それは實は支へられて居る、——支へて居るが如く見えるけれども」と云つた言葉の配りになつて

It is in reality being supported though it seems to be supporting the other.

となる。

「つまり」は “in short”

「両者は人といふ字を構成する」, “the two constitute the character.”

「支へつ支へられつして」は “by supporting and (at the

same time) *being supported by each other.*”である each other は前の supporting にもかかる。

こゝで *being* ~ の形が度々出るがそのうちで *it is being supported* とあるそれは「.....されつゝある」意で gerund ではない、「.....される」の進行形である、あとの *by being supported* は *by* の object となつた「支へられること」の意の gerund なのである。

【譯】 The Chinese character for “man” consists of two strokes, the shorter one supporting the longer. But, as the former is kept from falling by being leaned against by the latter, it is in reality being supported by, though seemingly supporting, the other. In short the two constitute the character for “man” by supporting and at the same time being supported by each other.

問題

32. 日露通商の要諦は日本は其の工業力を發揮し露西亞はその資源を開放して共存共益を計るにあります。

〔要諦〕は essentials. 「.....にあり」は to consist in ~. 「資源」は natural resources など。

33. 君が日本に着く頃には僕はもう支那へ出發してしまつて居るだらう。

Incomplete Verbs と Complements の應用

動詞に Incomplete Verbs (不完全動詞)なるものがある。早い話が *He is. He made me.* と云ふ。たゞそれだけでは何の事だか文意が完全に表はれぬ。是非 *He is a student.* とか *He made me happy.* とか何等かの言葉を補はねばならぬ。かく動詞がそれ自身で完全なる叙述を爲し得ず、何等か之を補ふ言葉を要するものを Incomplete Verbs と云ふので、その補ひに用ひられた語を Complement と名付けて居る。但し complement は adverb とは異なるもので、例ば “*He went quickly.*” に於て *quickly* は「彼の行き方」を形容したもので adverb なるに反し、“*He went mad.*” と云へば「彼の如何なる者になりしか」を云はひとせるものであつて *mad* は *went* の complement なのである。要するに complement は主語や、客語の性質状態を云ひ表すもので adverb は單に動詞の修飾に過ぎぬ。He = *mad.* であるが He = *quickly* では無い。

それで此の不完全動詞の代表的のものは、自動詞の *Be, Become,* と他動詞の *Find, Make* とである。その他の Incomplete Verbs はすべて此の *Be* や *Become, Find* や *Make* に類似の意を有するものである。He *went mad.* も He *became mad.* の變形と見るべく、We *elected him president.* も We *made him president*

を云ひ更へたものと見らるゝ。此處に注意すべきは Incomplete verbs の多くは徹頭徹尾 Incomplete なのでは無く完全な動詞が臨時「……となる」「……とする」的の意になつて用ひられた際に Complement を取り Incomplete Verbs になるのである。

下の如く元來 Complete な動詞が Incomplete になつた場合と並例して見ると、後者の場合各動詞が一種の風味を帯びて何とやら become とか make とかに似て來る事を見らるゝであらう。

- { I turned toward him.
- { He turned pale.
- { He ran all the way to school.
- { The dog ran mad.
- { I left Tokyo the next day.
- { My father died and left me an orphan.
- { He called my name.
- { He called me a fool.

其れで此の不完全な動詞なるものが英文の構成上如何なる位置を占むるか云ふと、我々が一寸考への附かぬ程重要なものになつて居るのである。何もそんな Complement なぞをブラ下げなくては役に立たぬ様な不具の動詞が大切だとは受け取り難いけれども、實際にぶつかつて見るとそれならでは云ひ表はせぬ味があるのである。例へば

何事も御不在中の出來事は御報知致します。
と云ふ文を譯すにしてからが

I will inform you of anything that (or, whatever) may happen during your absence.

とする代りに

I will keep you well informed during your absence.
とすれば文がよほどよくなる。どう云ふ點で善いのかと云ふに、「何事も報告する」と云ふ事が「常に當方の事情に通じさせて置く——連絡を保つ」心で其處が“keep”の發揮する本領である。文典上から云へば I will keep you. では文意不明で、well informed と云ふ complement を得て始めて完全になる誠に厄介な言葉であるけれ共、かくして出來上つた文はその働きの上から云つて、とても他の言葉では及び難い仕事をして居るのである。又

こう云ふ人は一生貧乏をして不幸な死に方をするものだ。

とあるを「一生貧乏のし通し——貧乏圈内を出ぬ」意が remain といふ動詞に表はれる、又「不幸に死ぬ」が to die a miserable man と die を臨時不完全にして仕舞ふ。と

Such a person will remain poor all his life and die a miserable man.

となるので、こう云つた動詞を充分に使ひこなす力を練習するのは英作文上最も必要な仕事である。

今下に Incomplete Verbs の重なるものと其の用途とを擧げて見ると。

To Find.

I *found* the man.

I *found* the man *honest*.

此處で云はうと云ふのは上の第二文に於ける find の用法である。かゝる際の find は單に「見出す」で無くて「……なるを始めて知る」意である。即 I found that the man was honest. とある文が縮まつたわけである。それでかゝる構文が如何なる日本文に相對して居るか、と云ふ事を考へるが必要である。すべて英文を書く力を養ふには常に英語の idiomatic expression に出會ふ毎に「此れが日本語の何と云ふ所に當るか、日本語でこう云ふ時に此れを使ふのだ、」と云ふ事に思ひ及ばねばならぬ。で私は此の find を常に“したらの Find”と云つて居る、“したらの Find”とは一體何か、まづ次の例を見られよ。

その薬が大變効能があると云ふから試みに一週間飲んで見たら大變よく利いた。

此れを次の様に譯す。

Hearing of the medicine highly recommended, I tried it just for a week and *found* it very efficacious. 一寸考へると上の and *found* it…… は and it was ……としても一向變りが無い様であるけれ共「薬を飲み試みた結果有効なるを知つた」心を表はす上にはど

うしても此の find を用ひたくなるので、所謂「……したら……だつた」には此れを應用するがよろしい。猶二つ三つ例を擧げると。

私は自分の部屋へ歸つて來て見ると室の戸が半分開いて居た。

When I came back to my room, I *found* the door ajar.

來て呉れと云ふからわざわざ出かけて行つたら何のこと不在だつた。

At his request I went all the way to see him, only to *find* him absent.

口でそう云ふのは誠にやさしいが、さて實際やるとなると中々さうは行かぬから。

It is all very easy for you to say so, but when it comes to practice, you will *find* it otherwise.

一寸食べて見給へ中々うまいから。

Just try it. You will *find* it very delicious.

To Prove.

「盗人を捕へて見れば吾子なり」と云ふ句がある。

此の「……見れば……だつた」と云ふ結果を表はす役目をつとむるものに動詞“to prove”がある。元來 prove は他動詞で「證明する」意だ。それを自動詞的に用ひて「不明で居たものが明かに……なりと知れる」即自ら證する様な心で此れを用ひるので to prove = to be found と思へばよろしい、譯例を擧げると

あんなに主人から信任されて居た番頭がその實悪漢(シレモノ)と判明した。

The clerk who was so far trusted by his master proved a knave.

“proved a knave” は “proved to be a knave” の約されたもので、此れを It was proved that the clerk was a knave. と書いたものと比較して見るがよろしい。如何にもそれが idiomatic な語調であつて「遂に化の皮がはがれた」様な語氣が prove 一語によく表はれて居る。併し prove は決して悪い事をのみ云ふのではないので、善悪共に「後(アト)で……とわかる」意である。此れが日本語では多く「……になる」「……だつた」等ですまして置くが、それがもし上に云つた様な場合であつたら prove を應用するがよろしい。猶數例を擧げて置く。

最初彼はその傷を馬鹿にして居たが、それが致命的のものだつたのだ。

At first he made light of the wound, but it proved mortal.

朝寝の癖位大した事ぢや無いと思ふだらうが、それが遂に出世の妨げになるかも知れぬ。

You will think that a mere habit of late rising does not matter much, but, mind, it may prove a great obstruction to your success.

猶此の prove の意で “to turn out” が用ひられる。

「豫想外の結果がヒョックリと表はれる」を云ふのだ。

つまり彼が損をしたのが却て成功の機會になつたのだ。實際何が仕合せになるか分らぬものだ。

Thus, his great loss proved a chance of his success afterwards. No one knows what will turn out (to be) one's fortune.

To Keep と To Leave.

Keep は「保つ→或状態に保つ」で、Leave は「残し置く→或る状態に放置する」である。同じ事を云ふにしても He kept the door open. と云へば「戸が閉ぢぬ様開けて置いた」であるが He left the door open. は「戸を開け放して置いた」である。前者は心して開けて置いたのだが、後者は「構はずに開けて置いた」である。さて此の Keep, Leave 共に文典から見て不完全な動詞で open と云ふ様な Complement を要する。

さてそれ等が如何なる邦語に相當するかを考へて見ると To keep は「……しておく」「……させて置く」に當る。例へば

人間は忙しくさへしておけば、つまらぬ考へは起らぬものだ。

Keep a man busy and he will have little occasion for doing mischief.

If a man is kept busy, there will be no room in his mind for idle thoughts.

永く御待たせしまして誠に相すみません。

I beg your pardon for *keeping you waiting* for so long.

病の眞實を病人にかくして置くのは殆ど罪惡だ。

It almost amounts to a crime to *keep* the real state of the disease *a secret* from the patient.

最後の例では “*to keep a secret*” が「かくして置く」に當る、此れは「秘密を保つ」でなくて「秘密に保つ」である。次に

To Leave に就ては一層の注意を要する、此れは前にも申した通り「放つて置く」が基の意である。例へばあれをあのまゝにして置くと遂には取返しがつかぬ事になるぜ。

① If you leave the matter as it is, it will prove past retrieve in the end.

それでこう云ふ事に考へ及ばねばならぬ。……「そのまゝで放つて置く」と云ふ事は「何もせずに放て置く」事だ。従つて此の “*to leave anything undone*” といふ形が非常に必要になる。「御膳に箸を附けずに下げる」は “*to leave the dinner untouched*” だし、云ふべき事を「云はずに置く」が “*to leave it unsaid*” だ。即「……せずに置く」「……せずにすます」等の邦語に相當する事になる。例ば

私はその書類を探すために隅から隅まで引つくり返して見ない所は無かつた。

I left no stone unturned to discover the papers.

多くの事を半分やりにして置くより一つの事をしつかりやつた方がよろしい。

It is far better to do one thing well than to leave many things *half-done*.

人はやつてならぬ事はやり、やるべき事はやらずに置く。

We do those things which we ought not to do, and we leave *undone* those things which we ought to have done.

To get any one to do; To have any one do.

此れは「誰に……して貰ふ。……させる」に相當する形である。丁寧な云ひ方としては *to get one to do* の方をよしとする。

私は彼に作文を訂正して貰ひました。

I got him to correct my composition.

明日朝早く君に来て貰ひ度い。

I wish to have you come early to-morrow morning.

猶 **to have one do** は「誰に……される」意に用ひる事がある。此れは例ば「私は父に早く死なれた」と云ふ様な間接的影響を表はす Indirect Passive とも云ふべきものである。元來 Passive なるものは他動詞に限つて作らるゝ形であつて或行爲を直接受けた事を表すものである。然るに「死ぬ」には「何を、誰に死

ぬ」なんと云ふ事は無い、従つて直接に passive を作る事は出来ぬ。I was died by my father. など云ふ事は絶対に不可である、だのに「私は父に死なれた」と日本語で云ふのは父の死てふ事が自己に深く影響するからであつて、こう云ふ場合に英語では「死ぬ父を持つ」的の云ひ方をする。即 *I had my father die when I was yet a collegian.* (私は高等學校の學生で居た時父に死なれた) と云ふのである。

To get anything done ; To have anything done.

此れは「何を……して貰ふ、させる」「何を……される」に相當する形である。「させる」と「される」とは受動者の意志が加はると加はらぬとの差別があるが、それは文の性質から定まる事で同一の形式でも混雜は起らぬ。*I had a photograph taken.* は「私は寫真を取らせた」で *I had my watch stolen.* は「私は時計を盗まれた」である。自分の時計を命じて盗ませる事は無い筈だ。だから同じ形式で「させる」と「される」が表されるのである。扱てその「私は時計を盗まれた」を

I was stolen my watch.

と譯してはどうか。一寸考へると此れでよい筈である、黙つて居ると多くの學生はこう譯す、依つてまづこう云ふ事を考へて見やう。Passive の文は之れを Active に直す事が無論出来る。

I was given a book. は active に直して

He gave me a book.

となるわけである、よつて借問する。 *I was stolen my watch.* は

Some one stole me my watch. (何者か私に時計を盗んだ) と云ふや否や、無論そんな文は成り立たぬ。

こうして見ると *I was stolen my watch.* といふ文は誤れる事が證明される。「私は本を興へられた」「私は時計を盗まれた」は實際よく似た文體だ、然しその裏面の受動形を作つて見られよ「本が私に興へられた」は成り立つが「時計が私に盗まれた」は成立せぬ、それもその筈で「私が時計を盗まれた」に於ける「私」は盗まれた行爲から起る利害關係を云ふので「本が興へられた」に於けるが如く行爲の傳達を表すのでは無いからである、然らばいつその事

My watch was stolen.

と云つたらよいでは無いか、と反問が起る。成る程それは正しい文である。併し此れでは前云つた「私の被害」といふ心が表しかねる、どうしても「私が……」と云出し度くなる。於之

I had my watch stolen.

といふ形式の必要が生ずるのである。

例 文 A.

外國語を學ぶ捷徑は習熟にありとは誰もよく知つて居ることだがさて實行となると仲々むづかしい。

【譯し方】「捷徑」はその字の如く *the shortest cut (or way)*

でも表はし得る、或は *the best (or the most effective) method* でもよろしからう。「習熟」は *practice* だ。「……にあり」は *to consist or to lie in* ~ が普通用ひられる、それで前半は次の様なものになる。

Every one knows that the best way of learning a foreign language lies in practice.

「さて實行となると」には *when it comes to*……といふ句が必要である、此れは何でも「イザ……するとなる時は」を意味する大切な句で *to* の次には名詞又は *—ing* の形が来る、*when it comes to do* とはならぬのだから注意して忘れぬ様に。「實行」は *practice* だが此處では「其の方法の實施」の意で *to carry it out* を用ひて前の *practice* と重なる事を避けたがよい。

それで「仲々むづかしい」へ来て考へなければならぬ、此れを *it is very difficult*. としたではどうも物足らぬ、「さてやつてみると六ヶ敷い事が發見される、——六ヶ敷いと判明する」心が表し度い、於之 *it proves*……、の活用となるのである。

【譯】 It is so well known that the most effective method of mastering a foreign language lies in practice, and yet, when it comes to carrying it out, it proves very difficult.

例 文 B.

悪小なるを以て爲すこと勿れ、善小なるを以て爲さざること勿れ。

【譯し方】 先づ「……なるを以て……する勿れ」に於て *because* の用法を考へねばならぬ此れは

Do not despise a man because he is poor.

人が貧乏だからとて之を輕蔑すべきで無い。の文がよく表はして居る様に *because* は「……だから」で無く、*「……だからとて」* である、猶詳く云へば *because* が前の文全體の理由になるのでは無く、その中の *verb* の表はす行爲の理由を表はすのだ。此處で云へば「……だからとて輕蔑する」と *despise* の理由になるのである、「……だから輕蔑する勿」では無い。

此の *because* が此處で早速役立つので「悪 (a bad thing, an evil) 小なりとてそれを爲す (犯す—to commit) 勿れ」が

Never commit an evil because it is small.

となる。

次に「爲さざる勿れ」に至つて此の項で説く *leave* が應用されるのである、即此れが *do not* が二重になる場合なので *never + do not good* の意を *never leave good undone*. で表すのである、最も *never neglect doing a good act*……、とすれば *leave ……undone* を用ひずとも譯す事は出来るのである。

【譯】 Never do an evil because it is small, nor leave good undone because it is little.

【別譯】 Never commit an evil deed because it is small, nor neglect doing good, be it ever so small.

例 文 C.

勤勉の消極的効能の一つは常に人に悪い事をする餘裕を興へぬと云ふ事である。

【譯し方】 「消極的」は *negative* であつて「積極的」の *positive* に對する、「悪い事をせぬ」、は *negative good* であつて、「益を爲す」は *positive good* である、すべて物事にはこの *positive*

と negative の両面がある、勤勉(industry)にもそれが大事を成し世を益する點はその positive quality (積極的効能)であつて一方又閑居して不善を爲さしめぬ點がその negative quality なのである。

さて「悪い事をする餘裕を與へぬ」はそのまゝ譯すと

It does not allow one time to do mischief.

なぞとなる所だ、「悪い事」と云ふても「罪惡」と云ふほどでも無いので丁度 do mischief が相當する、それで此れを「勤勉が悪い事から人を keep する」といつた云ひ方で譯して見ると遙かに文がしまつて來る、下の様に

【譯】 One of the negative qualities of industry is that it keeps one out of mischief.

問題

34. 一年に幾萬の人が此の病氣の犠牲になると思ふとゾツとする。

(「犠牲になる」は “to fall a victim or prey to~.” の句で譯す、「病氣になる」の「なる」も fall なるを知れ。)

35. 糧食缺乏を告げたので止を得ず寄港したのだ。

(「缺乏を告げる」は “to run short of~.” 「寄港する」は “to put into a port” なり。)

36. 私は後で用に立つ事もあらうかと思つてその手紙を大切に保存して置いた。

(「後で用に立つ」が “to prove of use” で「大切に」は carefully など。)

37. 「人間萬事塞翁が馬」と云ふ事がある、不幸が仕合の素になつたり、喜が悲の基になる事が往々ある。

(「人間萬事云々」は “a joyful evening may follow a sorrowful morning” など云ふ、「と云ふ事がある」は “We have a saying”

がよろしい。)

38. 學問が尊重され労働が輕蔑される時代が去つて労働者がやたらに威張り出した。

(「重んずる」とか「輕んずる」とかは to hold in esteem or in contempt で表はす。「威張る」は to hold one's head high 或は to assert oneself 等。)

Causative Verbs の活用

思想の發表には brevity (簡潔) と vividness (活氣) とを常に眼中に置いてかゝらねばならぬ。同一の趣意を言葉に表はすにもなるべくそれが單文で表し得る様に、換言すれば接續詞や關係副詞などを用ひる事を少くして簡短に發表したものゝ方が力強く感ずるのである。於之其の一法として Causative Verbs (使役動詞) が英語に於て大に利用される。Causative Verbs とは「……を……せしむ」と云つた様な心を表はす動詞で英語にはその數が甚だ多い。Heat causes water to evaporate. (熱は水を蒸發せしむ)。The idea makes us shudder. (そう考へるとゾツとする) 等の to cause, to make の如きが代表的のものである。で例ば Why do you think so? (何故君はそう思ふのか) と云ふ代りに What makes you think so? と云つ方が「一體どうしたわけでそう考へる様になつたものか」と云ふ様な味が言葉に出るので、此れなどは單に brevity のみを目的としたものぢや無く言外に一種の味を添へるにも役

立つのである。「私は決してそんな事をせぬ」と云ふのも I will never do such a thing. は一通りの譯であるが、それを *Nothing shall induce me to do such a thing.* (何物も予をしてかゝる事を爲す様に誘ふを許さず) とすれば「矢でも鐵砲でも賄賂でも何でも持つてこい降参するもんか」と云ふ様な語氣が加はるのである。即 expression が vivid になるのである。それで斯の如く causative verb を用ふるとすると勢ひ subject の据え方も變つて來るわけで、つまり別項説く所の「subject の選定」と密接な連絡を取る事になるのである。ここに二三の例を擧げて練習の準備とする。

英語を知つて居ると、それを知らなければ見えぬ事までも見える。

此れをたゞそのまゝ譯し出すと、

If we know English, we can see what could not be seen without its knowledge.

様なものになる、それを「英語の智識が吾等をして……」と云つた様に持つて行く、とこうなる。

The knowledge of English enables us to see what we should otherwise fail to see.

enables us to see は makes us see でも宜しい。又

暇があれば、一層よいそして細心の仕事をやる事が出来る様になる。

If we have leisure hours, we become fit for the performance of better and careful works.

此れが次の様に簡潔になり得る、

Our leisure hours fit us for the performance of better and careful works.

猶數例を擧ぐれば

此れを見てニュートンは考へ込んだ。

This set Newton thinking.

彼の顔を見て約束を思ひ出した。

The sight of him reminded me of my promise.

極度の悲嘆で彼女は狂してしまつた。

Extreme sorrow drove her mad.

例文 A.

洋行すると是迄氣がつかなくなつた自國の弱點が明かにわかる。

【譯し方】「氣が附く」は “to become aware” がよく用ひられる例は、

彼等は機關に故障があるのに氣が附いた。

They became aware that something was wrong with the engine.

しかしその打消の「氣が附か無い」は do not become aware と云ふ外に “to escape one's notice or observation” と云ふ逆に云つた便利の句のある事を覺えられよ。

その變化は一寸君の氣が附くまい。

{ You will not easily notice the change.

{ The change will easily escape your notice.

此の問題の「明かにわかる」の如きは簡単な “to see” を用

ふる方が却てよい、これは「自覚する」意であるから。

「是迄気がつかなくつた」は須く present perfect の打消を應用すべきで、「是迄」の意はそれで充分表はされる、猶その上別に言葉を求むるならば hitherto などがある。それで「洋行すると」を普通に when.....、と書き出すか又「洋行が.....」とするかに依て下の二通の譯が成り立つ、

【譯】 When we go abroad, we see clearly those defects of our country which have hitherto escaped our notice.

【別譯】 Travelling abroad will open one's eyes to the defects of one's own country which have hitherto been left unnoticed.

例 文 B.

本が一パイ詰めてあるあの丈の高い本箱を見る毎に近頃死んだその持主であつた友のことを思ひ出さずには居られぬ。

【譯し方】「.....を見る毎に」までは次の様に普通に譯し得る、

Whenever I see that tall bookcase, filled with books,

そうすると「思ひ出 (to recall, to think of) さずに居られぬ」には例の “can not help —ing” を使つて

I cannot help recalling its late owner.

とする、猶「.....すれば必ず.....する」の譯し方には「.....せずして.....する事無し」的の云ひ方を用ふる事も思ひ出して置く方がよい。

I cannot see that tall bookcase.....without thinking of its late owner. (or,.....but I recall its owner.)

たゞこゝに「その持主であつた友」とあるので、此處を少し考へて置くがよろしい、此れなぞは its owner who was a friend of mine. と長くするとその次に又「近頃死んだ」を who died....., とせねばならぬので甚だ拙い事になる。簡単に who was を削つて a friend of mine を同格にしてしまへばよい、或は recall my friend, its late owner. と置き換へてもよい。

さて全文の構造を The sight of that bookcase 或は單に That bookcase を主語に据えて「必ず思ひ出させる」(to remind of~) と譯して行けば甚だ簡短になる。「必ず」は never fail to が相當するが單に力を込めた will (書く時は underline を爲し云ふ時は語勢を強めて) を用ひるもよからう。

【譯】 The sight of that tall bookcase full of books will always remind me of my friend, its late owner, who died recently.

例 文 C.

彼が一旦何でもやらぬと決心した以上挺子でも動かなくつたし又一度何かやり出したらいくら失敗しても平氣であつた。

【譯し方】「決心する」は例に依つて to make up one's mind や to determine を使つてそれに「.....せぬと」と續けるには not to do.....と not を冠した infinitive を置く、此の打消の infinitive の形を忘れぬ様すべし。

それで「挺子でも動かぬ」とか「いくら失敗しても平氣」とか云ふのが本項で説く如く「何物も彼を爲さしめ得ぬ」「如何なる失敗も彼を失望せしめ得ぬ」と云つた行き方で譯するのが一番よい、それには又 “to disappoint” といふ御誂向きの動詞がある

ので、これが「失望せしむ」と云ふ他動詞である事をしつかりと覚えて置く事が此の問題の一番の獲物である。次の譯文で其の邊の筆使ひを覚えられよ。

【譯】 If he had made up his mind not to do a thing, nothing could make him do it, but if once he had started on some project, no failure could disappoint him.

問題

39. 米國の政治組織を知悉し、その國情を了解して、こゝに始めて對米問題は機宜を誤らざるを得ん。

(「米國の government organization と、その internal conditions の完全な知識を外にしては何者も米國問題の適當なる解決、即 solution を吾人に得しむる事能はず」と云ふ風に譯しこなすべし。)

40. 日本には大なり、小なり庭の無い家は減多に見うけられぬ、此一點からでも日本人が深く自然を愛することがわかる。

(「此の事實だけでも、吾人に如何に日本人が自然を愛するかを show するに充分だ」と書いて行く。)

41. 今回の戦争は吾人をして、我國に於ける化學工業の發達が如何に必要なるかを痛切に感ぜしめたり。

42. 暑さも漸く日一日と加はり街頭に飄へる氷屋の旗も夏の近きを感じしむ。

(「街頭に飄へる氷屋の旗」は “sign-flags in front of ice-shops” でよし。)

Passive Construction と注意すべき Transitive Verbs

英文に於ける Passive Construction が日本文に於ける「……される」に相當するものばかりならば何等の苦勞も要らぬ筈であるが、事實は之に反して、邦語に於て少しも受身的の臭ひが無いものが英文になると所謂 “Be done” の形式になつて表はれて來べき場合が頗る多い、於之 Passive Construction なるものの研究が英作文上の重要な仕事となるのである。そしてその研究の主眼點は吾々が日本語でどう云ふ様な場合に英語では Passive で發表するのかと云ふ事の詮索にあるのである。一體吾々には「……される」と云ふ事は生物と生物との間の交渉に主に限られて居る様である。「彼は敵に惱まされた」とは云ふが「彼はリョウマチスに惱んだ」と云ふ「リョウマチスに惱まされた」とは英語化した日本語であつて純粹の日本語法では無い。

従つて眞意は Passive であるが普通日本文では Passive で表はさぬものが實に多い。「火事で家が焼けた」と云ふ、それは「家が焼かれた」(Houses were burnt by fire) のである。しかし日本語としてはさうは云はぬ。「病人が助かつた」と云ふ、「助けられた」(The patient was saved.) とは云はぬ。そう云つた例を擧げ出したら切りが無い、要するに日本文には甚しく

Passive Construction なるものの用途の範囲が狭い、それだから吾々自覺はせぬが甚しく不便を感じて居る、つまり主語も無い文や動詞も避けて名詞にした云ひ方が頻發する、次の文の如きは如何に日本語の構文に無理があるか英語の *Passive* が容易にそれを片付けて居るかをよく説明して居る。

此の點が折合つて契約書も出來、兩方の署名も濟んだ。

This point being agreed on, the contract was written and signed by both parties.

本月廿四日静岡市に大火あり、全焼八十七戸半焼七戸を出せり、損害高は約五萬圓なりしと云ふ。

A big fire took place at Shizuoka on the 24th inst. Eighty-nine houses were totally destroyed and seven half-burned. The damages are estimated at (or, are said to amount to) about fifty thousand yen.

かく英語に於て *Passive Construction* が非常に多く且廣く用ひらるゝと云ふ事は一方から觀察すれば日本語では自動詞であるものが英語では他動詞として存在するものが非常に多いと云ふことになる。此の事が又吾々に取つては一つの難點であつて、試に學生に「驚く」と云ふ英語は何かと問ふと言下に “surprise” だと答へる、「喜ぶ」はときくと “delight” と云ふ。英語には「驚く」と云ふ動詞は無いよ、と云ふと、ぢやあ “surprise” は何ですか、と反問する。“surprise” は

「驚かす」だ「驚く」ぢや無いと答へると變な顔をして居る、それも無理は無い、實際「驚く」と云ふ意味の所で “surprise” といふ動詞を使つて居るのだから。併しそれは「驚かされる」“to be surprised” といふ形式を以てしてあるのだ、併し日本人の目から見ると *be surprised* の “be—ed” の形が大切に思はれぬ。おどろまで同じなのだから序でに「—く」と呑み込んで仕舞ふのだ、が翻つて考へて見ると「驚く」と「驚かす」とは大分異ふ、否大分所ぢやない主客の顛倒だ、語學の先生が目角立て、「く」ぢやない「かす」だと、むしろに此の「かす」に力瘤を入れるのも無理は無いのである。さてそれで吾々も不性無性にこう云ふ自他の別が日英兩語の間に存する事を納得したとして、さてさて英語でふものは不便である。一寸した事にまで *to be done* と云ふ形式にしなければならぬとは、と一と廉英語の缺點を發見した様に感ずるが、それは楯の一面を見た丈の斷定である。かゝる他動詞が *Active Construction* になつて活動する場合を一向考への中に入れて居らぬのが、實に迂闊千萬である。まづ次の様な日英兩文を比較して見られよ。

此れで私は悪い事は酒から始まると云ふ事をつくづく感じました。

This convinced me that drinking leads to other vices.

私の非常に興味を感じた事は、印刷機が急速に紙を刷り出す事であつた。

What interested me most was the rapidity with which the press turned out the printed sheets.

上例の convince(確心さす), lead(導く), interest(興味を起さす) 等の他動詞は、別項説く所の英語特有の subject の置き方に依つて非常に簡潔に、直截に文意を發表して居るので、こう云ふ Idiomatic な Transitive Verbs が自由自在に用ひる事が出来たら英作文の腕は實に上達したものと云ふ事が出来やう。それではさう云ふ様な Transitive Verb を片端から一つ覚えて行かうと云ふ氣になるが、それは幾萬とも知れぬ語數を片端から調べて行くのでなければ望まれぬ事である。たゞ此處には比較的卑近な、英作文上屢々用ひる他動詞の數個を見本的に擧げて用法を示すに止めて置かう。

まづ第一に纏めて知つて置くべきは「感情」を表はす動詞は多く causative sense (使役の意味) のある Transitive である、と云ふ事である。即ち上に云つた “surprise” 「驚かす」流なので、まづ此の部類に屬するものから始めて行く。

喜ぶ、 “to be pleased, delighted, rejoiced, exulted, etc.”

此の内でも to delight, to rejoice はそのまゝの形で「喜ぶ」意に用ひられる。delight はその場合「楽しみにしてやる」如き意となる。

市民は勝報に接して非常に喜んだ。

The citizens rejoiced (or, were rejoiced) at the news of victory.

その仕事を喜んで御受け致しませう。

I shall be delighted to undertake the work.

彼は他人の不幸を悦ぶと云ふ不埒な質(タチ)だ。

He is of a vicious nature that delights in other's misfortune.

満足する、 “to be satisfied, contented, etc.”

吾等一同その結果に満足致します。

We are all satisfied with the result.

自分の境遇に満足して居るものは尠い。

Few men are contented with their lot.

悩む、苦しむ、 “to be harassed, tormented, annoyed, troubled, afflicted, worried, etc.”

「悩む」意は英語では大概「悩ます」の意の他動詞を Passive にして表はす。たゞ一つ to suffer といふ自動詞がある事を記憶されよ。

彼は心臓病で悩んで居る。

He is troubled with (=suffers from) an affection of the heart.

時勢が變つて雇用者が使用人の我儘に苦しむ様になつた。

Times are changed; it is now the employers that are tormented by the wilfulness of the employed.

當局者は社會主義者の不穩な舉動に惱んで居る。

The authorities are annoyed with the turbulent behaviors of the socialists.

驚く、 “to be surprised, astonished, amazed, as tounded, alarmed, frightened, etc.”

「驚嘆する、怪しむ」意に自動詞 to wonder, to marvel あるを併せて覺ゆべし。

日本勝利の最初の報で世界中の人が目を丸くした。

All the world was astounded at the first news of the Japanese victory.

彼女は吃驚して正氣を失ふた。

She was frightened out of her senses.

市民はコレラ發生と聞いて非常に驚いた。

The citizens were much alarmed when a case of cholera was reported from their own city.

失望する、 “to be disappointed, dejected, etc.”

吾々は自分の手に入らぬ内は非常に欲しかつたものも一旦手に入ると失望する事が多い。

We are often disappointed in a thing which seemed so attractive before it is ours.

怒る、 “to be offended, etc.”

君は些細な事にも激し易いがそれは君に色々の不利益を來す事と思ふ。

You get easily excited at trifles and that, I think, will occasion many disadvantages to you.

「怒る」意味の他動詞に “to resent” がある。此れは One resents an insult. (無禮を怒る) の形式に用ひらるゝもので、「人を怒る」意味には普通用ひぬ。即 “I resented him.” と云ふ事は無くて “I resented his audacity” (私は彼の鐵面皮を怒つた) なぞ云ふのである。

彼は卑怯者だ、人から侮辱を受けてもそれを怒る氣概が無い。

He is a white-livered man; he has no spirit to resent an insult.

それで前申した様に、英文に Passive Construction が非常に多く用ひられる結果、吾々は英語に他動詞が多い様に感ずるのだが、それは上に擧げた様な特種の、殊に使役的意味の他動詞が多いと云ふ事なので、全體から見ると決して英語の他動詞なるものが日本語のそれよりも多いと云ふのでは無い。否或る他の部面で見ると日本語の他動詞に對して英語では自動詞しか無いものがある例へば「彼は私の心配を笑つた」と云ふ、それに對して英語では He laughed at my fears. と云はねばならぬ。He laughed my fears. と laugh を他動詞として使ふ事を許さぬ。又 He smiled at my warnings. と云ふ、私が警告しても笑つて取り合はなかつた意である。すると日本語では平氣で他動詞に用ひる「笑ふ」が英語では必ず自動詞として、無くては用ひるを許さぬ。英學生の立場から云はせると、誠に意地の悪いと

申すもの、Passive Construction が多いかと思ふと又「私は笑はれた」と云ふ様な日本語として立派な Passive は I was laughed. だけでは通過せぬのだから。併し公平な立場からよく考へて見ると其處には又夫れ々々の長所、短所がある。英語で to laugh at~. と云ふ形は吾々が書くなら「嗤ふ」「嘲笑する」など色々文字の工夫を要すべき所である。“at” 一つの助詞が此の「嘲り」の心を表はし得るとすれば却て気分、意志を表はす簡便な方法だとも申されやう。又 “He laughed away my fears.” の away 一つが「彼は私の心配を一笑に附して省みなかつた」意味の完全な發表法であると知れば、「笑ひ去る」よりももつと上手な語法かも知れぬ。

とに角英語では數多くの自動詞に preposition を附けて邦語の他動詞に相當するものを作る、そしてそれが preposition に特有の意味と結合して各種各様の意味を表示するのである、於之、所謂 prepositional verb なるものが英文の構成上甚だ重きをなすものであつて吾々のどうしても研究せねばならぬものとなるのである。

順序が却て逆であるかも知れぬが先づ此の Prepositional Verb は自動詞+preposition には限らぬ事を斷つて置く。最も卑近な例で云へば I have never heard from him. と云ふ、to hear は勿論他動詞である、それに to hear from~. と preposition を附ける、此れが丁

度「誰から便りを聞く」に相當する、その「便り」が元來 hear の object であるべきで即 “to hear a message from~.” が元來の形。その message は云はても知れるものとして略した結果 “to hear from~” となつたのである、同様に「御醫者を呼びにやる」が “to send for a doctor” であつて “to send a message for~” の略、その結果「を呼びに」が “for” 一語で表した事になる、だから「書物を注文する」も此の to send for (a book) ですむのである。

さて以下に英作文上盛んに用ひらるゝ Prepositional verb を少し擧げてその活用を練習して見やうと思ふが其れにはどうしてもそれに用ひらるゝ Preposition の性質をよく呑み込んでかゝる必要がある。依つてそれ等の前置詞を主題としてその傘下に集る各動詞の研究を試みやう。勿論かく形成された Prepositional Verb は Passive Construction となる際その Preposition を捨てる事は必ず出来ぬ、そしてかゝる Passive Construction が英作文上甚だ必要なのである。

I “of”

“of” は精神的無形的に或る事に「觸れる」意味である。“to speak of a thing” とは或る事に一寸言及する意で、「何々のことを云ふ、云ひ及ぶ」に相當するし “to think of a plan” は「或る手段をふつと思ひ及ぶ、思ひつく」である、かく思想感情がある事に及び觸れる心で次の様な邦語に通じるのだ。

a. “思ひ及ぶ、知り及ぶ、言及する”等

私は夏服を一着作らせ度いのですが誰か良い洋服屋を御存じありませんか。

I want to have a suit of summer clothes made. Don't you know of a good tailor?

東京に一大美術館建設の議のある事を御聞き及びでしたか、はい新聞で一寸見ました。

Have you heard of the project of establishing a great art museum in Tokyo? Yes, I read of it in the newspapers the other day.

そうだ！ちつとも気がつかなくつた、馬鹿だな僕は。

Why, I never thought of that? How foolish of me!

b. 「……(のこ)を云ふ」「……(のこ)を誇る」「……(のこ)を訴へる」等

居ない人の事を悪く云ふものぢや無い。イヤ居ても居なくても他人の事は充分の根據が無くては悪口するものぢや無い。

Never speak ill of the absent, nor of any one unless you have some sufficient ground.

午後になつて子供は頭が痛いと言つたが大した事でもなからうと思つて氣にとめずに居た。

In the afternoon the boy complained of a headache, but we paid little heed to it thinking it to be no

serious matter.

電車の只乗をしやうなんと考へるべきもので無い。ましてやそれを自慢にするなんて。

A free ride of the tram-car is not a thing to be thought of, much less to be bragged of.

c. Some idiomatic prepositional verbs.

to dispose of ~ 「片附ける」

私は用事の片次第歸國する積りで居ります。

I intend to go home as soon as I have disposed of my business here.

こう云ふ骨董品は買ふ時は馬鹿に高く、さて賣ると中々賣れるものぢや無い。

You pay high prices for these curios and when you want to sell them, they are not easily disposed of.

to beware of 「用心する」。(此れに對する他動詞が to warn anyone of ~ である。)

こう云ふ人達を信用せぬ様用心なさい。

You must beware of trusting such persons.

*「……せぬ様用心する」意が“beware of”を用ひると「……する事を用心する」の形式となる。beware of not trusting……と云ふのは誤なり。丁度 Take care how you trust such a person. が Take care not to trust such a person. に等しいと同様でかゝる際の negative の表し方をよく比較研究すべし。

to despair of~「絶望する」〔此れに類似の使役的他動詞に to disappoint one of~ がある。〕

彼は中々の重症にて恢復覺束なし。

His case is serious and the recovery is despaired of.

II "To"

“to”は行爲の及ぶ方向を示すものであつて、「提案に同意する」が“to agree to a proposal”にピッタリ一致する、さて此の“to”が「……に」と明かに表はれぬ邦語に對しても用ふる事があるし又此と反對に邦語では「……に」となつて如何にも“to”が用ひられさうに見えながら英語では“to”を用ひぬ場合がある。

a.

Refer to~. 「……に注意を向ける」が基の意で「……に照會する」(to refer to a person); 「……を見る」(to refer to a dictionary); (相手の注意を向ける意で)「云ふ、名指す」等可成り用途の廣い語である。

詳細の事を聞き度い人は下記宛御照會あれ。

For further particulars, the inquirers are referred to the address given below.

此處に述べた若者は晝は食を得るために働き夜はあそくまで勉強した。

The young man here referred to, worked by day for his living and studied till late by night.

彼は眞面目くさつて時計を見て今日はそんな時間が無いと云ふた。

He gravely referred to his watch and said that he had no time for it that day.

Resort to~, 「或手段に赴く」意で「……を用ひる」に當る。

どんな事をされても腕力に訴へるのは紳士的の所業とは申されぬ。

It cannot be said to be a gentlemanly conduct to resort to force under any provocation.

近頃の醫者は何かと云ふと注射を用ひる。

Doctors nowadays are too ready to resort to injection.

*此れと同じ心持ちで“to go to~”の句が時々用ひられる。

溫良な人達は訴訟沙汰は好まぬ。

Peaceful people do not like to go to law.

See to~; Look to~; Attend to, 「……に氣を附ける」意で「配慮する」「心する」「取はからふ」等に當る。Seeには又 clause を從へて同様の意味に用ひる事も知つて置くべし。I will see that the boy is well looked after. (子供の御世話の行届く様氣を附けます)に見らるゝ如くに。

監督は注文が漏れなくそれぞれ丁寧に取り運ばれる様に氣を配るのが役目だ。

It is the superintendent's duties to see that every order is carefully attended to.

Consent to~; Object to~, 同意、不同意を示す動詞で“to”を従へるものが多い、Object' には to object to do と云ふ形を用ひず object to doing とする定めである。

両親はその縁談に反対だつた。

The parents objected (=were opposed) to the match.

b.

或他動詞は其の言葉それ自身のうちに to 又は in を含んで居るものがある、例ば resemble は re+similar なので、“be similar to”である、だから「彼は父に似て居る」は “He resembles his father.” であつて “He resembles to his father.” では無い。即 resemble は他動詞なのであつてそれ自身で「に似る」意なのだ、ところが日本語では「……に似る」と云ふもんだからやゝもすると resemble to~ と云ひ度くなる、其他此れに類する誤りやすい他動詞を拾つてみると

to inhabit. 此れは to live in に等しい語なるは一見して知られる、to inhabit in a place と云ふ事は to live in in a place と云ふと同様で不合理である、だから inhabit は他動詞として passive の構文を作る、

その地にはブリトン人が初め住んで居た。

The land was at first inhabited by Britons.

to approach. ad+proach=to draw nearer to である、即「或場所へ近づく」は to approach a place で to approach to a place では無い。(動詞 to reach も同様に to reach Tokyo で to Tokyo でない。)但無形的、形容的に云ふ場合は to を用ひる、次例を比較せよ。

彼は帽子を手にして私に近寄つた。

He approached me hat in hand.

彼の英語は完全に近い。

His English approaches to perfection.

to accompany と to join.

to accompany は「同伴する」意だ、それで「……に伴ふ」と云ふ日本流の云ひ方に誘はれて I will accompany with you などよく云ふがそれは誤りて

I will accompany you.

(御供致しませう)

である、従つて、それが受身の形になつて

彼は友人と一所であつた、(連れがあつた)。

He was accompanied by a friend.

となるのである。

これに類する語に to join がある、これも他動詞で「何を何に結ぶ」意が基であり、次で「……に加はる」意でも他動的である、例へば、

私は観光團に加つた。

I joined the sight-seeing party. [joined to~ に非ず]

僕等に仲間入りせぬか。

Won't you join us? [*join with*~ に非ず]

但し「或る仕事に加はる。」意では自動詞となつて *to join in*~ の形をとる。

私はかるた取りの仲間入りした。

I *joined in* the game of cards.

to attend.

to attend は「出席する、参加する」意では他動詞、「侍する、従ふ」意では自動詞である。

君は式に列しましたか。

Did you *attend* the ceremony?

多人數彼に従ふた。

A number of men *attended on* him.

猶 *attend to*~ は「注意を拂ふ」意になる。

他人の事などに世話をやかずに自分の務めを怠るな。

Don't meddle in another's business but *attend to* your own duties.

“Be done” の形

“to be done” と云ふ形が「……される」と云ふ受身の動作を表はす外に「……してある」と云ふものゝ状態、をも表はすことを先づ知つて貰ひ度い。此れは何も不思議な事はないので、The work is ready. とか He is on his way. とか The door is open. など be 動詞に形容詞や形容句を従へて現在の状態を云ふのと變りはないのである、元來 done なる形は動詞の形容態なので (written book, fallen tree, wounded soldier 等に見る如く) 其れが上例の ready や open 等の就く位置に就いて The book is written. The door is shut. 等云ふたまでである。かゝる場合 “is written” は「書かれる」では無い「書いてある」だ、“is shut” は「閉ぢられる」では無い「しまつて居る」である。即 written や shut は ready や open と同様形容詞の役をなして居るのである。

元來日本語の「……して居る」には二つの意義がある、一つは「……しつゝある」で行為の進行を表はす場合、も一つは「……した、又は、された、状態にある」意を表はす場合、之である、前者はすでに知らるゝ通り “Be doing” が受け持つ役目で、後者が此處に云ふ “Be done” の仕事である、此の後者の役目は普通の passive とはどうしても區別されねばならぬ、勿論

それには passive の意は加はつて居るのだが、その受身の行爲でなくてその行爲から結果した状態を云ふのである、此處が相違點なので、Passive の意が加はると申したのは「書いてある」は解剖すれば「書かれてある」意だからである、但し必しも Passive の意が加はるとは限らぬことは斷つて置く、例ば The tree is fallen. (木が倒れて居る)、The sun is risen (太陽が昇つて居る)、The man was gone. (その男は早やそこに居なかつた)、He is come. (彼は来て居る) 等何等受動の意の含まれぬ場合も中々ある。以下此の種の例を少し擧げて見やう。

彼等は艱難に慣れて居るから一晝夜の強行軍位何とも思つて居りません。

The men are inured to hardships, and make nothing of making a full day's forced march.

私は仇を報いる決心です。

I am resolved to revenge my wrongs.

彼は自己の運命を諦めて居た、だから悪びれた様子も無く死に就いた。

He was resigned to his fate, and died with a good grace.

いくら君が彼を非難しても僕は彼の潔白を確信して居る。

For all that you say against him, I am persuaded of his innocence.

彼は政界に於て雄辯を以て知られて居る。

He is distinguished for his eloquence in the political circles.

彼は酔つて居たから私はその云ふ事を取り合はなかつた、でなきや只は置かなかつたんだが。

As he was drunk, I paid no heed to his word; otherwise it should have gone hard with him.

扱次に考へて置くべき事はかく “Be done” “Be + adjective” に依つて表はされたる状態に入る行爲を如何に表はすかと云ふ事である、例ば「慣れて居る」(to be accustomed) に對して「慣れる」は何と云ふか、「怒つて居る」(to be angry) に對して「怒る」はどうかと云ふ事である。此れにはよく to get done の形式が用ひられる。

「伊藤さんは私よく存じて居ります」「ハアそうですか、どこで御知り合ひになりましたか」「昨年輕井澤で近附きになりました。

“I am well acquainted with Mr. Ito.” “Are you? Where did you get acquainted with him?” “I made his acquaintance at Karuizawa last summer.”

彼は些細な事で腹を立てる、だから何處へ行つても嫌はれるのだ。

He easily gets angry at trifles. This makes him disliked everywhere.

最初はその仕事が一丈六ヶ敷く御感じてせうが
きに御慣れになりますよ。

At first you will find the work somewhat difficult;
but you will soon get used to it.

一度何か習慣がつくとそれを脱する事は六ヶ敷
い。

When once you have formed a habit, it is very
hard to get rid of it.

議論が進むに従つて両方共熱して来て、はては言
葉が荒くなり遂に取組合となつた。

As the argument proceeded they both became
excited. High words arose which ended in a scuffle.

Verbal Form の Aspect

A. He sat in a corner of the room.

B. He sat down in a corner of the room.

上の二文を比較して見ると、その異つた所は動詞の
形が sat と sat down との差である。それで A 文は
「彼は室の一隅に座つて居た」で、B 文は「彼は室の一
隅に座つた」である。

由來動詞にはその元來の性質上
継続的動作又は状態を表すもの
と

一時的動作を表すもの

とある。例へば He held it fast. の hold は「つかんで
居る」意で継続状態を示すものである、それに對して
「つかむ」とか「捉える」とか云ふ一時的動作を表すに
は He seized (or, caught hold of) it である。又 I
looked about me but could not find him. に於て to
look は「見る」で to find は「見つける」である。

かゝる動詞の表す動作状態の性質をその aspect
(態) と名づける事が出来る。そして上例の hold や
look の如きものを **durative or frequentative aspect**
(継続や繰返しを表す態) と呼び、to sit down や to
seize の如き「或状態に入る最初の動作」を示すものを
inchoative or inceptive aspect (始動の態) 又 to
find の如き「最後の結果を示すもの」を **effective
aspect** (結果の態) と呼ぶのである。名稱はとに角動
詞形にはかく継続的 (continuative)、一時的 (momenta-
neous) の二つの發表の種類がある事を知つて置く必要
がある、勿論同一語がその二種類を表はすものは頗る
多いが又何等か形式上の變化を必要とする場合も多々
ある。

I. 一時的動作 (momentaneous aspect) は屢々 adverbs
を加へて表される。to sit down, to sit up in bed, to
sink down, to stand up, to drive away 等の如く。

II. 「……し始める」「……するに至る」等に相當す
る特殊な形式

to come to do.

to begin —ing.

to fall —ing. 等

III. 「……しつゞける」「相變らず……する」等に相當する繼續(durative aspect)を表す形式

to keep —ing.

to continue to do.

to be doing.〔進行形〕 等。

以上の事は英語の Progressive Form と重要な關係を有するもので、後段“Progressive Form に就て”に説く所を参照せられ度い。

例文 A.

むかし、我國では、商人は一般の人々に輕蔑されて居たものであるが、今日では、農業や工業に従事する人々と同様に尊重されるやうになつた。

【譯し方】「輕蔑されて居る」が所謂上に説く所の durative aspect でそれには *to be held in contempt* の如き適當である。之に對して

「尊重される様になる」が inceptive aspect で *to come to be respected* であらう。

「商人」は tradespeople が一般的でよい。それは tradesman の集合的意味の語。merchant も商人だが重に「大商人、貿易商」等である。business man は「實業家」。

「今日は」は at present 又は now や now-a-days の如きもの。

「農業や工業に従事する人々」はそのまゝ直譯して those who are engaged in agriculture or industry でもよく、又 those whose occupation is agriculture or industry でもよい。

【譯】 Formerly in our country tradespeople were held in contempt by people in general, but nowadays they have come to be respected as well as those who engage in agriculture or industry.

例文 B.

□ 彼は興味を覺えると、あくまで凝る性質で、一度何かをし始めたら、満足な結果を得るまでは、決して中途で止めなかつた。

【譯し方】これは「彼」なる者の過去の性質を述べたもので、「彼はものに凝る性質であつた」は所謂過去の習慣を表す would を用ふる所で、凝る性質は「性質上……に凝る」とこなすがよい、即

He would be by nature utterly absorbed in anything……となる、「あくまで」は強いて譯し出す必要はない、to be absorbed(吸ひ込まれる)が「夢中になる」と云ふ強い expression だから。まあ be utterly absorbed 位で充分である。

この「凝る」と云ふのはやはり inceptive の形であるから be absorbed の代りに get absorbed とするもよいが would と云ふ repetitive(繰返し)の語があるから必ずしもさうせずともよからう、それよりも

「興味を覺えるも」の方はどうしても上に説いた inceptive の形が必要である。即 to be interested in~ (……に興味を感じて居る)を to get interested in~ とするか、或は to find

interest in~ とするかである。

「途中で止める」は “to give up half-way” 「満足な結果」は “some satisfactory result” など

【譯】 He would by nature be utterly absorbed in anything when he got interested in anything and never give it up half-way till he got some satisfactory result.

【別譯】 He would by nature get engrossed in anything when once he found interest in it. He never gave it up before he got some satisfactory result.

Present Tense に就て

Present Tense の用ひらるべき範圍は容易に指定し得るが問題はそれの實際應用である。まづ Present Tense Form は以下の場合に於て特に用ひられる。

a. 一定不變の眞理。過去、現在、未來に亘つて續く習慣的行爲。

此れは The earth revolves round the sun. (地球は自轉しつゝ太陽をめぐり)、とか I do not smoke. (私は喫煙は致しませぬ) とか云つた例でよく示される。

b. 過去の事柄なれど其れが今猶そのまゝの効力を保つて居る時は現在形を用ひる。

此れは Christ says, “Love thy enemies.” (キリストは汝の敵を愛せよと曰ふ)。Father writes to say that he will come to town next Sunday. (父は次の日曜に

上京すると云つて來た。) の如きがよく例として用ひられる。

c. 未來の行爲ながらすでに豫定されて大體動かぬ筈のものは simple present form を用ひる。例ば I start tomorrow; Jiro goes with me. の如きである。

d. すべて副詞的從屬節 (Dependent Adverbial Clauses) に於ては未來を表はすものに現在形を用ひる。例ば

試験が済み次第歸郷するように郷里の父から手紙で言つて來ました。

と云ふ文を採つて考へて見るに、「試験が済み次第」はまだ未來に屬する事だから “as soon as the examination will be over” となる筈だが實際は “as soon as the examination is over.” である。即全文の譯は

Father writes to tell me to come home as soon as the examination is over

となる。それで注意すべき點は此れが adverbial clause に於ての事であつて其の他の noun clause や adjective clause に於ては決してそんな事は無いのである。次の例が比較に最も便である。

a. I will let you know when he comes.

彼が來れば御知らせします。

b. I will let you know when he will come

何時來るかを御知らせませう。

a に於ては when he comes は let you know を形容する副詞節である、然るに b 文では when he will come が「いつ来るかと云ふ事を」の意で let you know の object (目的語) となる noun clause である。又

a. I will ask him if I meet him to-day.

今日彼に會つたらきゝませう。

b. I will ask him if he will join us.

彼が吾々の一行に加はるかどうか問ふてみよう。

b 文での if は「ならば」でなくて「……か否かを」である、即 if 以下の句が ask の目的語として名詞の役目をつとめて居るのである。

以上に依つて見るに Present Form は却つて「現在」を表はすよりは未來の行爲を示すに用ひると云ふ事になる。それでは現在形が全く現在を表す事が無いかと云ふに決してそうでは無いのでそれは次の「Progressive Form に就て」の項で研究する事にして此處では上述の場合に相當する練習を試みやう。

例文 A.

花笑ひ、鳥歌ひ、今や一年中の最も愉快な季節であります。我々は入學試験が済んでから故郷に歸り或は旅行に出掛けて心身を一層健全にしようと思ひます。

【譯し方】まづ最初の「花笑ひ、鳥歌ひ」の處置を考へなければならぬ、それが次の「今や……季節であります」。

Now it is the happiest season of the year.

にどう連絡するか。これは前置詞 “with” の働きにまたなければならぬ、此處でこう云つた文の譯し方を知つて置かれよ、例ば、

乗る人あり下りる人ありでプラットホームは大混雑でした。

The platform was overcrowded with people either getting in or getting down.

此れを應用して最初の部分はこう譯せる。

Now it is the happiest season of the year, with flowers coming out and birds singing.

さてそれで「入學試験がすんでから」は上述の説明中 d に屬するもので説明を繰り返す必要も無からう、此の句の附隨する本文は「心身を一層健全にしようと思ふ」であつて、これには to improve が役立つ、こう云ふ風に、

We intend to improve our body and mind by.....

猶そうでなくても to make our body and mind healthier としても悪くは無い。

「故郷に歸る」は “to go home” が一番簡單で、その他 “to return to our native places” もよい、「旅に出掛ける」に就ては “to start on a travel” と “on” を用ひる事を忘れてはならぬ。

【譯】 Now it is (or we have) the happiest season of the whole year, with flowers coming out and birds singing (their melodies). When the entrance examination is over we intend to improve our body and mind either by going home or by starting on a journey.

例文 B.

あの男は如何なる寒い冬でも毎朝屹度冷水浴をやり
ます。

【譯し方】 まづ「如何なる寒い冬でも」を “However cold it
is in winter” とするのが一番おとなしい譯し方であらう、も
つと手早く引きしまつた云ひ方を求めれば “In the coldest
winter” である、the coldest に「如何に……でも」の意が含ま
れる事に注意。

「冷水浴をやる」は “to take a cold bath” だが「屹度やる」
の譯出が考へ所である。此處の「きつと」はこちらの想像を表す
のでなくて彼の確さを云ふのである。同じ sure を用ひるにし
ても次の様な二つの場合がある。

is sure that I am sure he will succeed this time.

+ clause 彼はこんどはきつと成功すると思ひます。

is sure of + を Whenever I meet him he is sure to complain of his
何に信ず poverty.

sure to 會ふ度毎に彼はきつと貧乏をかこちます。

習熟表 即 *He is sure to do* が *He will surely do* 又は *He never
fails to do* であつて、もし *He is sure that*……ならば *He
believes that*……と云ふ事になるのである。此處では前者を
用ひねばならぬ。

【譯】 That man never fails (or is sure) to take a
cold bath every morning even in the coldest winter.

【附】 猶此れが表題の説明中 a に相當する習慣を表はす現在形の一
例であつて。此れを一層強く云ひ表はす時は邦文に「彼は必ず……する
事にして居ります」と云ふのがある、此れに對する譯語に to make
it a rule to do と云ふがある、此れを用ひると

He makes it a rule to take a cold bath.....

となるのである、此れの應用例を一つ出して置く。

僕の友人は試験中ゆつくり眠ることにして居りま
す。

「ゆつくり」は slowly とか at one's leisure とか色々あるが皆此處に
はあてはまらぬ。文字に拘泥せずに眞意を考へたらば to sleep well で
充分だと云ふ事がわかる筈である、to get a good sleep でもよい。譯
してみると

My friend makes it a rule to get a good sleep in
the examination time.

序に注意して置くが「私の友人」は a friend of mine で My friend
で無い、My friend と云へば友人は唯一人しか無い事になる、とは教
室でよく先生から聞かされる事だ、だから此處でも A friend of mine
ぢや無くてはならぬ様に思ふ人があるかも知れぬがそれは考へ違ひて、
此處の私の友人はある particular な一人を指して居るので My friend
Mr. と云ふたと同じ心持なのだから差支は無い、もし A friend of
mine makes it a rule と云つたなら(それでも正しい文であるが)
「私の友人に試験中はよく眠る事にして居る人があります。」の意である
事を承知されよ。

例文 C.

人の一生は重荷を負ひて遠き道を行くが如しと家康
が云ふた。

【譯し方】 古人の金言今猶新しい次第だから Iyeyasu says
と現在形を用ひるが宜敷い。「人の一生」は man's life だが、た
ゞ life でもよい。「……は……なるが如し」には色々の譯し方
があるis like.....,may be compared to.....等それ
である。compare to の次には名詞を置かねばならぬ。“to com-

pare to~” が「……に譬へる」で “to compare with~” が「……と比較する」である。だから Life is compared to a long journey. とするか、然らば Life is compared to *going* a long way. と云ふ様に gerund を用ふべきである。

「重荷を負ひて」は with……on one's back. carrying……on one's shoulders. 等がよい。

【譯】 Iyeyasu says that man's life is like going a long way with a heavy load on one's back.

【別譯】 Iyeyasu says that life in this world may be compared to a long journey carrying a heavy load on one's shoulders.

問 題

43. 本校卒業後實業に就くもの最も多く、教師になるものは極めて少ない。
44. 窮した場合に 當にすることの 出来る様な 友人が居ないので、心細く感じます。
45. 寝る前には必ず日誌をつけることにして居るが、いつも書くことがないので困ります。
46. 四月の始めになると櫻はぼつぼつ咲き始めます。
47. 世の中には死なぬ人は一人も無い、そして光陰は飛んで矢の如くである、故に吾等は寸陰をも徒費してはならぬ。

Progress Form に就て

所謂「……して居る」「……しつゝあつた」等行爲の進行を表はす形には progressive form を用ふべきは誰しも知る。が千變一律如何なる場合にも然りとは云はれぬ。先づ邦文の進行形でも英語では progressive form にならぬ場合の研究と練習とを試みようと思ふ。

元來 be + -ing なる形は「……爲つゝけて居る」意を表すための形であるのだからもし普通の現在の形がすでに繼續を意味する動詞であつたなら be + -ing の形は無意味な事になるわけだ、例ば to know とか to love とか云ふ語を取つて考へて見よ、或る事柄を學び知つた (to learn) が最後 know するので、I know it. と云へば「私はそれを知つて居る」である、I am knowing. と云ふ事は滑稽である。to love でもその通り、一寸愛したり一寸やめたりする事は無い筈である、即ち一時的瞬間的の行爲では無いのだ。to love は心の働きを云ふ語、反之 to caress (愛撫する) は形に表はれた動作である。She was caressing her child. とは云へるが She was loving it. とは云はれぬ。元來「愛する」といふ事は自分の意志で勝手にならぬものである、愛する事を止めて嫌ひにならうとしてもそれは無理である、かく心理状態即自己の意志を以て左右し得ぬ心の働き、及び 現在形それ自身が繼續を表はす種類の動作には

progressive form は無いのである、就中自然の感覺を表す語は此の部類に入るもので、それが感覺を得んとする努力の語と區別を要するのである、後者は勿論進行形を執る。此の實例には to see, to look の比較が一番よく解る、to see は自然の感覺であつて「見える」である、to look は見んと努むる心で「目を注ぐ」である、I am seeing it. と云ふ事は無いが I am looking at it. は普通の言葉である、同時に to hear は「聞える」で to listen は「耳傾くる」である。to see, to hear に類する語に to perceive, to notice, to understand 等がある。又さつき云つた to know に類する語に to remember, to forget, to believe, to have, to want, to agree, to resemble, to differ, 等がある。英語が影響した結果として下の様な日本語はよく聞く所である。

普通の文士の名聲は實に短命なものである、大評判になつたかと思ふともう忘られつゝあるのだ。

「忘れる」と云ふ事を冷靜に考へて見られよ、「忘れんとしつゝある」間はまだ「忘れ」たのでは無いし一旦忘れたら再び思ひ出す迄は其の狀態がつゞく道理だ。だから to be forgetting (忘れかけて居る最中) なんて云へる筈のものぢや無い、「そう申上るのを忘れて居てすみませんでした」は I am sorry I forgot to tell you so. であつて I was forgetting ぢや無い、上例にしてもそうだ、忘れつゝあるは忘れられんとしつゝある意に外なら無い、即 “is going to be forgotten.” であらねばならぬ、下の譯文を考へられよ。

The fame of the average man of letters is really

short-lived. The moment he is at the height of popularity, he is already fast going to be forgotten.

猶又 to love に類する感情の語はすべて此の進行形にならぬ動詞の部類に入るもので to hate, to like, to dislike 等數多い事である。序に老婆心から申添へて置く。進行形が無いと云つたとて participle の形は無論あるのだから上掲の諸動詞でも Participial construction をなす事は一向差支へ無い、例ば Forgetting himself, he cried out “Hurrah!” の如きで此れと進行形とは何等の關係は無いのである。

次に此の progressive form と往々混じり易い場合を一つ注意して置く其れは be done の形を以て表される物の狀態の叙述である。それは Passive の項で委しく説いたつもりであるが be + adjective (例ば, I am glad の如き) と並行すべきもので「どうした状態になつて居る」かを表すものである。例ば

彼は君の不勉強に呆れて居る。

He is astonished at your laziness.

私が行つた時は戸が閉つて居た。

When I went, the door was shut.

の如きである。かゝる際に「……して居る」と云ふ語に誤られて「私は喜んで居る」の如きを I am rejoiced. とした丈けでは何だか物足らぬやうな氣がするのは進行形に中毒したものと云はねばならぬ。

次に話者が眼前に見る事柄を叙述する場合には簡短

なる現在形を以てする事が多い。次の様に

噂をすれば影で、あれあそこに今話して居た御本人がやつて来る。

“Speak of the wolf, and you will see his tail”;
and there comes the very man we have been talking of.

最後に「受身の進行形」について注意して置く、Passive の形は be done であるから「……されつゝある」は此の be を being にして to be being done. となるが合理的と思はれるであらう、だから「家が建てられつゝある」は The house is being built. であるし「書物が印刷中」は The book is being printed. とすべきわけだ、が此の is being done. と云ふ形は誠に口調が悪いし又 The house is building と云つたつて別に家に手足があつて大工さんの仕事をする筈も無いから文意に間違は起ら無いので、こう云ふ受身の progressive は普通の active form を以て代用して構はぬのである、但しそれは主語が無生物の場合の事である。Boys are being taught. と云ふ所を Boys are teaching. としたては boys が先生になつて仕舞ふから此れはいけない、こんな時には are being taught の形を避け度ければ Boys are at school. と云ふ様な別種の construction を見出さねばならぬ。

例文

學生はボート漕ぎに出て居ります。いづれも赤と白との縞の運動服を着て居ります。

【譯し方】「出て居る」も「着て居る」もいづれも progressive form の要らぬ動詞である、まづ第一に「著る」は to put on で「着て居る」は to have on である事を知らねばならぬ、即 put on するのは一時の動作である、put on し終つてからの連続状態が have on なのである、動詞には此の或る状態に入る動作 (例ば to get の如き) と其の後に続く状態 (例ば to have, to possess の如き) とを明かに區別する必要があるのだ。

さて「漕ぎに出て居る」は to be out rowing でよろしい、此れは to be out for rowing の如き文の省略と見るべきで「……しに」がたゞ doing の形だけで表されるのである、

母は買物に出かけました、

Mother has gone out shopping.

「赤と白の縞」は of red and white stripes. で「運動服」は a blazer 又は sporting clothes だ。

【譯】 The students are out rowing boats. They have all sporting shirts of red and white stripes on. (or, They are all dressed in jerseys of red and white stripes.)

問題

48. 私は音楽が大好きで、何か音楽を聴いて居る間はすべての苦勞を忘れて居ります。

Shall と Will

Future tense を表す中心となるべき shall と will の用法に就て特に作文上注意すべき諸點を摘出して考へて置く、

まづ shall に就て、

shall には 1. 用ひねばならぬ場合。 2. 用ひて差支へ無い場合、及び 3. 特に色彩を帯びた shall の用法、とある。

1. shall は主格の第一人稱にありて、單なる未來(主格の意志の加らぬもの)を表す場合に必ず用ふべきものである。I shall succeed, fail, recover,等自己の單なる未來を表すのがそれである。猶之に就て注意すべきは此の單なる未來と云ふ事は自分の勝手にならぬ事柄であるから、場合に依つて I must.....に代る事もあり又 I can.....に代る事もある。

○ 今出かけたなら彼に會へるだらう。

If I go now I shall see him.

見つかつたら御目玉を喰はねばなるまい。

If this is found out we shall catch it.

2. shall は subject の意志を何等加へぬものであるから、従つて丁寧な控へ目な云ひ振りになる、I willと云へば「自分が.....するつもりだ」である、

その所を I shall..... とすれば遠慮勝ちな云ひ方となる、I will do as you wish. と云ふ代りに I shall do as you wish として何等誤で無い、要之、I will の代りに I shall と云ふ事は差支へないが、その反對 I shall と云ふべき所を I will と云ふ事は絶対に許されぬのである。

3. shall は第二人稱第三人稱に用ひて speaker の我意を表す、you shall....., he shall..... は常にその裏に I will の心が潜む、「.....さしてやる、.....すべし」の心である、但し其れには favour の含まれる事のあるを忘れてならぬ。You shall never want while I live. (私が生きてる間は御前に不自由はさせぬ)の如きがその代表例である。

かしこまりました、早速さう致します。

Certainly; it shall be done at once.

の it shall be done が「さう致します」にも「さう致させます」にも通ずるに注意。

4. you shall はかく特別に意味のある形であるものから shall you.....? と云ふ疑問の形にも何等かそれに類似の意味がありさうに思はれる、がそれは大なる誤りであつて shall you.....? は I shall..... を答に引き出す單なる未來の疑問である。

{ Shall you.....? I shall.....
(君はどうなるか) (私はこうなる)

{ Will you.....? I will
 {(君はこうするつもりか) (私はさうする積り)

と相對して考へればよろしい。

5. Shall you.....? は上に云つた様な無色彩な意だが Shall he.....? は全く違ふ、即肯定文に於て You shall. He shall は全く用ひ方を一にするけれども問の場合は全然性質を異にする。Shall he.....? はかりに讀者が誰かと對して談話して居ると考へ、別に第三者 he なる者を想像して、Shall he.....? と云つた場合、それがどんな意味合ひのものかを考へて見られよ、即 he に対する話し相手 (you) の意志を問ふ事になるで

Shall he come tomorrow? = Do you wish him to come tomorrow? (彼に明日來させませうか)

Shall he have your consent? = Do you give him your consent? (彼に御同意を與へられますか)

これは Shall I.....? でも同じ事、Shall I.....? は單に自己の未來を問ふ外に對手の意志を伺ふ場合がある。

a. Shall I come tomorrow? = Do you wish me to come tomorrow? (明日參りませうか)

b. Shall I have your consent? = Do you give me your consent? (御同意下さいますか)

それで a. に対する答はどうか、「明日參りませうか」……「左様、明日來い」で答は命令文、Yes, (please) come tomorrow.

b. に対する答は……命令文では稍變である。

Shall I have your consent? Yes, have my consent.

ではあるまい、須く Yes, you shall (have my consent). であらねばならぬ、その差別は動詞の性質にある、その動詞が主語の働きを示すものなら命令形が答となり、主語の受動的なもの(承諾を貰ふと云つた様な)なら you shall, he shall が答となる。これは Shall he? に於ても同様に命令形は Let him.....で表される。次の様に

When shall the carpenter come? (大工は何時參らせませうか)

Let him come as early as possible. (出来るだけ早く來させて呉れ)

6. Who shall.....? の形は對手の人の意志を問ふて「誰に……させませうか」に當る、外に Who can.....? 誰れが出来やうぞ、誰にも出来るものかの意を表すことがある。Who shall decide when the doctors disagree? (御醫者が意見が一致せぬ以上、誰がどうと斷定出来るものか……くらうとでもわからぬものがどうして素人にわからう筈が無い) の如きが代表例である。

次に Will に就て

Will は意志を表示する助動詞である、がだゞ例外として You shall..... He shall..... は別に意

味のこもつた expression だから、それに對して You や He の單なる未來 (I shall に相當する) を示す形として You will succeed. He will fail. と云つた様に用ひるのである。但し You will や He will でも決して此の單なる未來を表すに限つたものではない。それが I will に相當する意志の表示をも兼ねると云ふ事を忘れてはならぬ、例へば

He says *he will* help you. (彼は君を助力すると云ふて居る)

If *you will* do so I shall be greatly obliged (そうして下さらば非常に有難い)

彼の Accidents *will* happen. (怪我はどうも起りたがるものだ) や The wood *will not* burn. (薪がどうしても燃えない) の如きは此の意志表示の例である。

問題

- 49 今朝田中君を訪問したら風邪を引いて臥せつてゐた、二三日は登校出来ないだらう、[can の未來形は shall (or will) be able to ~ を以て表す。]
- 50 近日中商用にて御上京の由友人より承りましたが、若し御構ひなくば御滞京中御宿をいたしたいと思ひます。
- 51 「色々むづかしい議論もありませうが、私が一命にかけて御引受します」。西郷の此の一言で、江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つ事が出来、又徳川氏もその滅亡を免れたのだ。

「色々むづかしい議論もあらう」は “the question may give rise to hot discussions”, 「引き受ける」 “to answer for ~”, 「一命にか

けて” “with one's life”, 「徳川氏」は “the Tokugawas”, 「滅亡を免かれる」 “be spared the ruin.”)

- 52 御前はたいさうとんちがあると聞いた。此のからかみにかいてある虎をしばつて見せよ。「しばつて御目にかけて、どうぞこゝへ追ひ出して下さいませ」。
- 53 「大工が待つて居ます、がかへしませうか」「そうだ、そして明後日又来る様に云つて呉れ」「給料はいつ拂つてもらへませうか」「月末にやる」。
- 54 僕は色々説いて止めさせようとしたが、どうしても私の云ふ事をきかなかつたのです、一旦云ひ出したからには思つた通りにする男ですから。

Perfect Tenses に就て

Perfect Tenses の根本義は今更こゝで管々しく云ふまでもなからう。即或一定時迄に或行爲が爲し終へられるか或は繼續するかを指すもので其の一定時と云ふのが現在なるか、過去なるか、未來なるか、によつて have done, had done, will (or shall) have done の形となるのである。要は此の形は其の一定時迄に行ふた行爲の結果が其の時残つて居る心を必ず含むて居る事である、I have read it. と云へば I know it now. と云ふ事になる、従ふて

僕は一度それを讀んだ事はあるが内容をすつかり忘れた、

の如きは「事がある」とあつたからとて Perfect は使

はれぬ、須く過去形を用ひて

I read it once, but have forgotten its contents. とすべきである。文法書には perfect は「経験」を示す、即「……した事がある」は此の形を用ふ、と教へては居るが其れは「……した事があるから今それに関する知識を持つて居る」意を指したもので上例の如きは立派な経験とは云はれぬ。譯文は語句の表面に捉はれずに眞意を傳ふるに努めよと云ふは此處を云つたものである。だから「……した事がある」は必しも present perfect たるを要せぬ只の past form を以てする場合が多々ある事を知られよ。

今こゝに此れ等 perfect form の使用に關して注意すべき諸點を擧げて應用練習の前提とする。

I. Present Perfect に關しては

- a. 此の形は過去の行爲が齎らしたる現在の状態を表はすものなるが故に現在に結び付かざる point of time を表はす言葉と共に用ふ可らず、I have come here yesterday が代表的の誤文である。
- b. されど或行爲が現在まで繼續せるを表はす爲めに duration (幾日間、何年此の方等)を示す語句と共に用ふる事は屢ある。従つて since とか for とか云ふ接續の語はよく perfect に従ふのである。

此れて五日雨が降つて居るのだ。

It has rained for the past five days (or, these five days).

私は彼の子供の時から知り合だ。

I have known him since he was a boy.

* I studied English (for) five years. と云へば英語を五年勉強した」のでそれは「今」に接續せぬ五年即ズーッと以前に五年間學んだのでもよい。I have studied it these five years (or for the last five years). だと「五年此の方」の意となるのである。

- c. 完成を表はす語は present perfect と共に用ひられる、already, just, now, by, yet 等がそれである。こゝで注意すべきは問の「もう」は yet である事だ。何だか yet は「まだ」の意に限る様な氣がするがそれは打消の場合なので、もうすでに……したかは yet? を以て表すのである。

もう鐘は鳴りましたか、いえまだです。

Has the bell rung yet? No, (it has) not (rung) yet.

彼はもう出發しました。

He has started already.

但し already も問に用ふべき場合は別にある事を斷つて置く、それは perfect が伴はぬ時で。

もう御歸りになりますか。

Are you going already?

の如き例に依つて見るがよろしい。

d. 「今」をも含む「時の言葉」は present perfect と共に用ひ得。

今日は大分働いた。

I have worked very hard to-day.

故にまだ朝のうちであれば *I have received a strange letter this morning.* と云つてよい事になるのだ。

e. Verbs of “going” and “coming” は「完了」と「経験」とを別々の形で表さねばならぬ、*He has gone to America.* は *He is now in America.* と云ふ事なので「彼は米國に行つて居る」に當る。だから「彼は米國へ行つた事がある」は *He has once been in America.* を以て表されるのだ、*to have come* も同様「来て居る」意だ、だから *have gone* (行つて居る) と云ふ事は第三人稱の主語 *He* や *They* についてのみ云ふ事で二人稱や一人稱について云ふ事は無いわけだ (一つの身體で此處に居ながら何處かへ行つて居る事は不可能だから)。たゞ次の様な場合が一つあり得る。

留守中誰か尋ねて來たら友人を迎えに停車場へ行つたと云ふて下さい。

If any one should come for me, please say that I have gone to the station to meet a friend.

II. Past Perfect に関して

Past Perfect は先に起つた事を後で云ふ時に用ひられるのだ。例ば

前の日に買った本を落してしまつた。

I lost the book which I had bought the day before.

それだからもし二つの行爲が其の順に従ふて *and* や *but* の如きで云ひ表はさるゝか又は *before* や *after* を使つてその前後の關係が明かであれば *past perfect form* は不要なのである、*I bought a book and read it. I called on him before I started.* 等に見る如く。但しかく順序が明かであつても猶「……してしまつた」意を特に明示する必要があつて始めて *past perfect form* が用ひられるのである。

The passage had been blocked up and the men inside was practically buried alive.

通路が塞がつてしまつたから内側の人足は事實上生理になつた。

I went out after I had done so.

そうして了つてから外出した。

それにつけて特に注意を要するのは “before” の用法である。邦語では「……せぬ内に」と云ふに反して英語では「……してしまつた前に」と云ふ。だから *I became aware of it before I had (not) gone far.* (遠く行かぬ内に氣が附いた) と云ふのが日本人のよくやる誤なので此れは “not” が無くて *before I had gone far.* と云はなければならぬのである。換言すれば *before* の次には打消の文句を置いてはならぬのだ。猶

before にはその前後に had done の形を加へ得る事を知るべし。

1. The train had started $\left\{ \begin{array}{l} \text{before} \\ \text{when} \end{array} \right\}$ I arrived.

(私が着く前に汽車は出てしまつた)。

2. The train started $\left\{ \begin{array}{l} \text{before I had arrived.} \\ \text{when I had not arrived.} \end{array} \right\}$

(私が着いてしまはぬ内に汽車が出た)。

cp. I arrived after the train had started.

III. Future Perfect Tense は「何時迄に……し終る」豫測を云ふのでこれには shall, will の用法を誤らぬ様にそれから下の様な場合によく用ひられる事を注意すればよい。

私は此の六月で五年此處に住む事になります。

I shall have lived here five years by June next.

これは今ならば「四年何ヶ月」と云ふ様な半端な勘定を避けるがために時の限界を未來へ持つて行つた結果 shall have done と云ふ形が用ひられるのである。

最後に、Perfect Form を用ふべき場合にも時に他の形を以つて簡短に手軽く處理さるゝ事が稀しく無い事を實例に依つて示して置く事とする。

入學試験の結果が發表になる迄には、彼は旅行から歸つて來るでせう。

此の問題は一見して future perfect の應用問題と見られるであらう、即「彼は旅行から歸つて來るでせう」が He will have returned from his journey. となる。が「歸つて居る」はよく to be home (to be at home

とは別に)と云ふ句で表し得る、それを用ひて He will be home from his journey としてすむのである。丁度「試験が済む」が The examination is over. と云ふのと同筆法である、かく be done や be+adjective の形は to have done, to have been done の代りになるのである。それで「結果を發表する」は to announce or publish the result だが to give out といふやさしい云ひ方もある。

「迄には」は by the time when であつて till では無い又 by when もいけない。by next Sunday の如く時の語には by をすぐ附けてよいけれども何か事柄には by the time when としてつけなくてはならぬ。依つて譯文は次の様になる。

By the time when the result of the entrance examination is given out, he will be home from the journey.

例文 A.

約束の時間よりも僕は五分早く行つたのに彼はもう出立してしまつて居た。實は僕の時計が遅れて居たのであつた。

【譯し方】此の文のうちで past perfect の用ひらるべき箇所が二つある、即「もう出立してしまつて居た」が He had already departed (or, started) であり、又「時計が遅れて居たのであつた」が「其の時まで遅れつゝあつた」意で時計の遅れるは to lose. («進む」は to gain) だから My watch had been losing. となるのである。

「約束の時間」は appointed time がよろしい、會合の豫約なぞを appointment (時や場所を appoint 「指定」する事) と云ふ事を知つて置く事。

「實は」は此の場合 The fact was (that)....., To tell the truth.....等の句が相當する。

それからも一つ大切な事は「行つたのに彼は出立してしまつて居た」のつゞき具合である此れを

Though I called....., he had started already.

としたでは稍つゞきが悪い、此れに就ては次の例を参考せられよ。

私が入つて行つたら彼は泣いて居た、
を譯して

When I entered, he was weeping. とする代りに

When I entered I found him weeping.

と云ふ様に I の發見した事柄にして表はすのが普通である、かゝる際の find の用法に充分慣れる 必要があるので本文の「行つたら出立してしまつて居た」も

Though I called.....I found that he had already departed. とする方が better であり、猶一層進んで結果を表す infinitive を應用してonly to find that....., とやれば best である、勿論さうすると冒頭の though も不要になつて来る。

【譯】 I called five minutes earlier than the appointed time, only to find that he had already departed. The fact was, my watch had been losing.

【附】 此の問題も必しも past perfect を使用せればならぬ事は無い、例は He had already started. てふ事は He was already on the way. と云へる、即 to be on the way は「途上にある」意で to have started に等しいのだ。又 My watch had been losing. の如きも My watch was slow.でも結構意は違する。依つて次の如く perfect form の御厄介にならずに譯が仕上げられる。

I went five minutes earlier than the appointed time, only to find him already on the way. To tell the truth, my watch was too slow.

例文 B.

山國には折々生れてから死ぬ迄一度も海を見たことのない人間が居ります。

【譯し方】「生れてから.....した事が無い」と云ふ事は經驗の perfect form を用ひた文として屢々出て来る。次の様なのがその代表的なものだ、

生れてからまだ飛行機といふものを見た事が無い人もある。

Some people have never seen an aeroplane in all their lives.

此の「人もある」は There are some who have never seen と譯してもよいが、併し必しもそうせんでもよろしい、又「生れてから」は in one's life が相當する、since they were born は駄目である。

さてそれで今此處の問題へ歸つて見直すと、「生れてから死ぬ迄云々」とある即「一生海を見ずに終る人」がある事を云ふて居るので「今迄.....した事が無い」と云ふ上の例とは一寸違ふ所がある。依て次の様な譯文となるのだ。

【譯】 In mountainous districts people are often found to die without ever having set an eye on the sea in all their born days.

【附】「山國」は mountain-land でもよい。Men are often found to..... が「人もあります」の語氣を表はして居る事を考ふべし、即「た

づれて見ればそう云ふ人も見附かる」心からである。一直線に people die without.....と云ふたのと一寸氣持が違ふであらう。又此處の without の用法をよく研究さるべし即「.....せずに.....する」の譯には此の without が無くてならぬ connective である、そして此れは前置詞だからその次へは名詞、即動詞の名詞形 (gerund) たる -ing の形が來なければならぬ、そして「かつて.....した事もなくて」の意を perfect form で表はすものとして without having done なる従屬句の形式が成り立つのである。

In all one's born days は In all one's life を云ひ代へたものである。同様に to set an eye on~は to see の面倒かけた云ひ方なので to get a glimpse of~ なんと云ふ句もある、簡単に without ever having seen the sea. でも文意は勿論表はし得るのだ。

例文 C.

彼が其の後如何なつたか、誰も消息を知るものはありません。

【譯し方】此れは比較的容易な文であるが present perfect form の役目を最もよく盡す好適例として採つたのだ、一見するに「彼が其の後どうなつたか」と「その消息」とは別々のものゝ如きも後者は前者の結果として現在に残るもので要するに どうなつたを perfect form にして表はせば用が足りるわけである、それについて此處に二つの expressions を相對して覺えて置くがよろしい。

- a. { その男は其の後どうなつたか、
What has become of the man?
b. { あの書物を君はどうしちやつたのか。
What have you done with the book?

此の a. 「どうなつた」。 b. 「どうした」の二つは何でもない

様で居てよく學生が苦しむ種になる。さてその a の形式をここで應用するとして

【譯】 No one knows what has become of him since.

【附】上文の since は since then の略と見るべく副詞に用ひられたるもの、「其の後」に相當する。

問題

55. 過去二十年間には私の身の上に種々の事がありました。
56. 洋服が和服に勝れて居るかどうかは時々問題にもなるがまだ眞面目に研究されたことはないらしい。
57. 或人は日本の歴史は模倣の歴史であると云ふかも知れない、併し日本人は模倣のみやつて居たのではない。
58. 昨日正午に合せた時計がもう七分進んで居る。
59. 彼は數回其處へ行つたことがあるのであの地をよく知つて居りました。
60. 彼は二年前に此の國へ來ました、爾來私方に滞在して居ります。
61. あの人は維新以來國家に功勞があつた。
62. 醫者が到着したときは彼は既に息を引取つて居た。
63. そんなにぐづくして居てはそれが出来上つた頃には御客様は歸つてしまふぜ。

Infinitive, Participle, Gerund
の Sense-Subject

“to do” や “doing” の形は動詞を形容詞的に又は副詞的に又は名詞的に働かしたものである、例は *A book to read.* (adjective use); *To read or reading books.* (讀書する事、noun use). に於ける如く。

それで此れ等の形は「誰が爲す」かを明示する必要が起る場合がある、此れを Infinitive, Participle, Gerund 等の sense-subject (意味の上から見た主語) と云ふ。もしそれが一般的のものならば別にそれを明示する必要が無い。例は、*It is not right to tell a lie.* とか *Lying is a great sin.* とか云ふた場合に「嘘を吐く」のは「何人が」やつても不正なのだから誰かと特に云ふ必要が無いのだ、又或特別な箇人のやる行爲でもその sense-subject が文中の何處かに表はれて居れば差支は無い、そしてその多くは本文の subject 又は object が之を表はすのである。

Infinitive.

He must be a great man to have done so.

それをやつたとは彼は偉い人に違ひ無い、(to have done so. の sense-subject は本文の主語 “he” が兼ね表す)。

I want you to go in my place.

私は君に私の代りに行つて貰ひ度い、(to go の

sense-subject は want の目的 “you” が兼ね表す、此の場合 you が無くて *I want to go.* とせば全く文意が變る事に注意すべし)。

Participle.

Being rich, he was envied by them.

金があるもんだから彼は皆に羨まれた、(being rich の sense-subject は本文の主語 “He” が兼ね表す、但しかゝる際は *Being rich, they envied him.* としては不可なり、即 participle にありては本動詞の object を以てその sense-subject ならしめ得ず)。

Gerund.

He was punished for breaking the rule.

彼は規則を破りしために罰せられた、(breaking の sense-subject は He が兼ね表す)。

They punished him for breaking the rule. (object “him” が breaking の sense-subject を兼ね)

然るにかく sense-subject が本文の subject 或は object (Participle にありては本文の subject に限る) と一致せざる場合には何等か他の形式に依りてそれを表示するの必要がある。次例の如く、

斯る侮辱は私は堪へる事が出来ない。

It is impossible for me to bear such insult.

それは君が決定するのだ。

It is for you to decide.

月が昇つたので吾等は電燈を消した。

The moon rising, we turned off the electric light.

私は彼が後ろに立つて居るのに気が附かなんだ。

I was not aware of his standing behind me.

あんな精力家が成功するに何の不思議は無い。

There is nothing wonderful in such an energetic man succeeding.

即 Infinitive の sense-subject は for~ の句もて、Participle のそれは noun や pronoun の nominative case を冠することに依つて、Gerund のそれは possessive case を冠する事に依つて表はすのである、但し Gerund に冠する noun は 's の記號を略す事が多い、in the man's succeeding とする代りに in the man succeeding といふ風にするのが普通である。

例文

夏の暑さより冬の寒さの方が僕にはよほど凌ぎよい。

【譯し方】「暑さ」は hot の名詞 heat を、「寒さ」は cold そのまゝを用ひるがよい。「凌ぐ」は to bear (堪へる) や to stand である、それで

It is easier to bear the cold of winter than the heat of summer.

に to bear の sense-subject として for me が入るのである。

或は「凌ぎよい」を一個の形容詞 bearable で表はせば infinitive は不用になる、その時は.....is bearable to me. である事に注意すべし。

is...to...for me. = is...to one.

「よほど」は far を加へて表はすがよろしい。

【譯】 It is far easier for me to bear the cold of winter than the heat of summer.

【別譯】 The cold of winter is much more bearable to me than the heat of summer.

問題

- 64. 林檎が頭上へ落ちて來たのでニュートンは考へこんだと云ふ事を聞いたが、林檎の落ちるに何の不思議があるのでせう。
- 65. 君がさう云ふのは誠に容易な事だらうが、實際その局に當る僕に取つては、なまやさしい事ぢやない。
- 66. ワシントンの父は息子が誤ちを隠さぬ事を賞したのだ、何も大切な樹を切つたのを褒めたのぢやあない。

Partial Negation

「兩虎相撲つ時は兩虎俱に生きず」と云ふ事をよく聞く。一寸考へた所では「兩虎共死ぬ」意と思はれる。がそれは日本流の考へ方で此の句の本家即漢文では「何れか一方は死ぬ意」なのだ。どうも我々の言葉には此の部分的打消 (Partial Negation) なるものの發表が誠にまづい、「常に然らず」と云つてしまへば全部の否定になる、仕方なしに、「常には然らず」とても云ふて「常に然りと云ふわけには參らぬ」意を表はす、上の兩虎の場合でも「俱には生きず」として辛じて意味の間違ひを避け得らるゝ、英語で all, every, both,

always 等を “not” で打消したのが此の partial negation なので All men are not kind. と云ふ時の not は all に作用するのだ、即 not all なのだ、吾々は日本流に all are not (皆然らず) と考へるから間違が起るのである。日本語には一つ此れにピッタリとはまる副詞がある、それは「必しも」と云ふ語で、此れならば確に誤りつこ無い、だから此の「しも」てふ助詞を、何にでもくつ付けて「常にしも、俱にしも」などとすればよからうがちと耳障りになる。

さて英文を書く場合にはこゝに絶対的否定 (absolute negation) を表さんとする場合に上の not all の筆法でやる懼れが生ずる。例ば次の様な誤譯をしがちなのだ。

私は兩親共生きて居りません。

Both my parents are not living.

此の英語は「兩親が揃ふては居ない」意なので原文の意は

Both my parents are dead. = Neither of my parents is living.

でなければ表し得ぬ。

學生は打消に要する語句を下の様に相對して覚え且つ其の用法に習熟する事が最も必要である。

| <i>Partial Negation</i> | <i>Absolute Negation</i> |
|-------------------------|--------------------------|
| “not all” | “not any” = “none” |
| “not both” | “not either” = “neither” |
| “not always” | “not ever” = “never” |

例文 A.

常識は何人にも必要なるものにして又何人にも得らるべきものなり。然れども其修得は必しも容易ならず。

【譯し方】「何人にも必要なる」は “necessary for every man” 或は indispensable or essential to~”である。「得らる可きものである」も同様に形容詞形を用ひて “obtainable by one” とする事が出来る、或は “can be cultivated by~” などもよい。「修得」は “acquirement” 又は “cultivation” 等當る。

【譯】 Commonsense is necessary for every man and at the same time, is obtainable by all. But its cultivation is not always easy.

【別譯】 Commonsense is indispensable to every man and its cultivation is possible for all. It does not, however, follow that its acquirement is always easy.

例文 B.

金満家は必しも名望家とは限ら無い、巨萬の富を積んだ人で而も世に悪し様に云はれて居る人が少く無いのは遺憾である。金を儲ける事は六ヶ敷いことであるが金を有効に使ふ事は更に猶むづかしい。

【譯し方】 同じ「必しも」でも場合に依つて色々ある、例へば、學者になるには必しも多くの書物を讀むの要は無い。

You need *not necessarily* read many books to become a good scholar.

勝敗は必しも数の多少には依らぬ。

Success in battle does *not always* depend on numbers.

本問題に於ける「必しも」は「常にしも」の心であるから “not always” がよい。で「名望家」は “a man of high repute” などであるから、文の書き出しは

The rich man is not always a man of high repute.

と云ふ事になる、或は……is not always highly honoured でもよい。「巨萬の富」は “immense riches” 又は “millions” 等で「富を積む」は “to accumulate” 又は “to amass” を用ひる。

「少く無い」は主語を “not a few” で形容するが便である、例ば

此の誤をする學生が少くない。

Not a few students commit this error.

「悪し様に云ふ」は “to speak — of” に badly とか abusively とか云ふ副詞を加へたらよい、それを「……なのは遺憾である」 (“It is much to be regretted that……”) でしめ括るのだ。

最後の一節「……するはむづかしいが……する事は猶むづかしい」と云た口調は “indeed (or, to be sure)……but……” の如く先づ「なる程 (indeed; to be sure, etc)……だ」と筆を起して「が併し」と應ずるのである。

それは難事には違ひ無いがもつとむづかしい事をもつと困難な身で遂げた者は幾人あるか知れませぬ。

True, it is a hard task; but harder ones have been accomplished by thousands in more difficult conditions.

【譯】 The rich man is not always highly honoured. On the contrary, it is much to be regretted that not a few people who have amassed immense riches are

often badly spoken of. Making money is indeed a hard task, but harder is it to use it effectively.

【附】 “on the contrary” (之に反して) の句は原文に無きも語勢上そう出て來たくなる所なり。又 “it is harder……” とあるが普通の形なるも此れもやはり語勢が強くなるので harder を先きへ出した關係上 “it is” が “is it” となるのである。

問 題

67. 學者必しも無學者より常識があるとは限らぬ、否大學者にして往々没常識な者のあるのは世人のよく知る所である。
68. 好機會は何人にも來るのだが、其れが來た時に誰しもこちらに用意が出來ては居らぬのだ。
69. 金を得るが人事の總ては無い、一生の仕事の大切な部分を作すものが多々ある。
70. 戰爭に最も熱心に行きたがる人間が最も愛國者とは限ら無いし、又體力の強い人が皆勇者だとも云へない。
71. ビカビカ光るものが皆黄金では無い。

条件の構文

此處には假定的条件即 subjunctive past or past perfect の諸構文以外のものをまとめて置く。此の項に屬するものの中には (1) 「如何に……であつても……」の讓歩的の句。(2) 「……せざる限りは……」。(3) 「……するに於ては……」等がある。

(1) 讓歩の句としては次の様な形式を應用する。

何事があらうとも僕には覺悟がある。

a. *Whatever may happen*, I am prepared for it.

b. *Come what may (or will)*, I am prepared for it.

いくら一生懸命にやつて見ても思ふ様に行かなかつた。

a. *However hard I might try*, I could not satisfy myself.

b. *Try as hard as I would*, I could not satisfy myself.

上例各 a に屬するは *whatever*, *whenever*, *however* 等 *-ever* の形を有する compound relatives (複合關係詞) を用ひるので助動詞 *may* を従へる、此れに就ては *however* は常に *however hard* の如く次に形容詞又は副詞を従へる事を注意すべし、又 b. に屬するは命令法の利用である。*Come what may* が何でもやつて來い

と云つた調子であるを見られよ、そして *However*~ が *Do as~as……* と變る所を注意。それから此の讓歩的構文に限つて命令法が過去の事にも用ひられる (*Do as hard as I might* に於ける如く) のである。

(2) 「……せざる限りは……」は普通接續詞 *unless* を以て表す、時としては“without + 名詞”を以て簡潔に處理し得るを下例にて研究すべし。

人は治安に妨害にならぬ限り自己の所有物をどうしたとて構はぬ。

One can do anything he likes unless he does not disturb public peace.

忍耐せずには成功は出來ぬ。

Without perseverance, one can never succeed in anything.

時として *until* (……する迄は) を用ふる事が出来る。

後悔するまでは私は彼の補助はせぬ。

He shall go without my assistance until he repents.

(3) は「……すれば……してやる」意の條件で最も普通の形が *If one will or would do……* である、その外命令法を利用して「……せよ然らば」の形式がよく用ひられる、猶此の交換條件には *provided* といふ過去分詞形が接續詞として用ひられる。

もし彼が罪を謝るならば赦してやらう。

I will pardon him *provided* he acknowledge his fault.

例文 A.

如何に學問があり才能があつても勇氣が無ければ何事にも成功はし難い。

【譯し方】「學問がある」を *learned* で譯すとしたら、「才能がある」も同様な形で *talented* と應じなければならぬ、すると

However learned and talented one may be.....

となる、もし「才がある」を *to have talent or ability* とするならば「學問」も *learning* として

Whatever learning and talent one may possess.....

の如くする、此の邊の語句の呼應、調和と云ふ事に意を用ひなければならぬ。

「勇氣が無くば」は上の(2)に説く如く *without courage* で表すがよい。

「何事にも成功せぬ」は *one can never succeed in anything* 又は *— accomplish anything* なり。

例文 B.

成功の秘訣は第一に身體を強健にするに在り。如何に才あり知識あるも身體健全ならざれば寶の持ち腐れとならむ。

【譯し方】「秘訣」は *secret* が適譯であつて、それが「.....するにあり」と續くには *to lie in~.* の句が當る。すると「身體を強健にする事」てふ名詞形が必要になつて來る、依つて *the culture of a sound body* とか *acquiring robust health* などを之にあて、

The secret of success lies first of all in acquiring robust health.

と譯す。もし *to lie in~.* を使はないならば手軽く次の様にも書きこなせる。

The secret of success is to make one's body healthy and strong.

やさしく譯したからとて決して下手だと云ふ事は無い、却て.....*lies in to make.....*と云ふ様な誤つた書き方をするのが悪い。

次に「如何に才あり知識あるも」云々は前の練習で説明した書き方の外に此處で形容詞の最上級の利用を試みてみよう、即

The cleverest man will sometimes commit a blunder.

いくら賢い人でも時には失敗するものだ。

といった筆法の應用である。さうすると「最大の知識や才が寶の持ち腐れになる」と云つた様に後の句にシツクリと適應するのだ。

「寶の持ち腐れ」の如きはその意を汲んで簡短に譯せばよい、即 *useless treasure* で結構である、むしろ「持ち腐れになる」の「なる」なぞに注意を拂はれよ、即

.....*will prove a useless treasure.*

と致し度い。*to prove* は「證明される」意で「.....となる」に相當する、猶参考のために「寶の持ち腐れ」は *a white elephant* (白象を貰つたが飼養するに金が要つて大迷惑したと云ふ話から)とか *miser's gold buried in the ground* (地に埋めた守銭奴の金)とか云ふ譯が附く事を申添へて置く。終りに

「身體健全ならざれば」は「病氣の人にありては」と云つた様な附屬句にして.....*will prove useless treasures in a sick person's (or in an invalid's) hands* とすれば全文の調子が整ふのだ。

【譯】 The secret of success lies mostly in the culture of sound health. The greatest ability and knowledge, in an invalid's hands, will prove only a useless treasure.

【別譯】 The secret of success is to make one's body healthy and strong. Whatever talent and knowledge a man may possess, if he is not robust in health, they will prove only unavailable treasures.

例文 C.

君が十分なる理由を提出せられない限りは残念ながら御要求に應ずることは出来ませぬ。

【譯し方】「理由を提出する」は to show でよろしい、to produce sufficient reasons も亦可である。

「残念ながら」は I am sorry to say が普通。

「要求に應ずる」は to comply with one's request 又は to do as you wish でもすむ、其の他別に云ふ事は無い。

【譯】 Unless you show me sufficient reasons, (I am) sorry to say, (that) I cannot comply with your request.

(括弧内の I am と that とは同時に省略する事が出来る、すれば會話に際しての省略した形になる)。

例文 D.

君は休暇中でも毎日少しづつ、勉強せねばならぬ、學

問に於ては若し進歩しなければ必ず退歩するものであるから。

【譯し方】「少しづつ」はそれだけの譯としては by little, little by little などであるが、こゝでは「毎日」があるから「づつ」は氣にしなくてよい。

「學問に就ては」, in learning.

「若し進歩しなければ必ず退歩するものだ」は if you do not progress you must fall backward と忠實に譯す外に、「進歩するか退歩するか何れかせねばならぬ」意を表す事が出来る、それには either.....or を用ひるのである。

【譯】 You must study a little every day even during the vacation, for in learning one must either progress or retrograde.

問題

72. 何處へ行つても彼の様な品性の下劣な男は排斥される。
73. 如何なる職業でも忠實につとめる人は偉人と云はねばならぬ。
74. 修養の出来た人は如何なる大事に臨むでも容易に狼狽しない。
75. 彼の人間が自ら非を悟るまで勝手な事をさせて置くがよい。
76. 如何に努めても彼女は父の心を柔ける事が出来なかつた。
77. 他人が私の事を何と云はうが彼と云はうが私は目的を選せざる限り努力を止めぬ。
78. 大なる注意と忍耐とを以て精勵するにあらざれば如何なる職業を執るも成功する能はず。